

艦これ×暗殺教室「青春を潮と血に染めて」

みかんバーグ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—あれから3年が経つたのか

3年の間に深海棲艦は現れ、地球は滅亡の道を歩んでいる。

戦えるのは第二次大戦時に戦った艦と女の子が合体した艦娘だけ。
この話はそんな艦娘達を支えた、学徒動員された部隊のお話です。
注　みんな死にますのでその辺覚悟のある人が読んでください。

目 次

プロローグ 胎動			
第一話 戦闘訓練			
第二話 「英雄なんかじやない」	—		
第三話 「ダン・クイゼンベリー」		60	19
第四話 「奥田さんと赤羽くんの話」		93	1
暗殺教室×艦これ第五話 「マレー半島の 戦い」	249	314	

プロローグ 胎動

結論から言おう。

この物語は戦史では無い。

なので、艦娘と深海棲艦の戦いを、その付隨する全世界で徴兵された少年兵の中で最も戦功を挙げた「E組」の戦功を主觀無く知りたい方々には別の文献をお勧めする。

この本は、国により深海棲艦達と戦う事を余儀なくされた青年達の、儻く生きた証を後世へと語り継ぐ為に編纂された物である。

その青年達がどんな人間だったのか。その青年達が私たち艦娘に何を遺したのか。その事を人々に忘れ去られない為に、私たち鎮守府の皆はなるべく多くの資料、証言を基に迅速にこの物語を書き上げた次第である。

だが、この物語は多くの軍事機密を白日の下に晒すものであり、直ちに公開されることは決してないであろう。

：それでも私達はあるの青年たちの死が意味のある物であると信じ、この物語を綴つていつた次第である。

さて、物語を開く前に文責である私、この青葉がここに宣言する。28人との絆と魂

は私たち艦娘の心に永遠に生き続ける事を。

それは靖国通りの桜が蕾をつけ、冬の恰好をしなくても良くなつた頃の話であつた。

潮田渚を始めとする元3年E組はその靖国通り沿いにある防衛省に全員集められていた。

「やあ、ようこそ防衛省へ」

何故ここに居るのか。そんな当惑を隠せない様子のE組の面々に、防衛大臣はまるで長年の友達を初めて自分の家に連れ込んだような、軽く棘のない挨拶をする。

だがその挨拶と裏腹にその両眼には値踏みをしてやろうという瞳だった。

「防衛大臣の掛巣長治だ、よろしく」

年齢は59歳。

政治家としては油の乗り切つた年齢であり、その顔は精悍の一言に尽きる。

その防衛大臣が秘書一人だけで元E組の高校生を見続けていた、その非日常感が大臣室にあふれている。

「……に居る皆、樋ヶ丘中学の元3年E組ですよね？ 一体何を企んでいるんですか

？」

困惑で取られた会話の主導権を取り戻そうと矢田桃花が口を開く。

「いい質問ですねえ。流石営業志望だけはある。このご時世なんだから、何となく察し

がついているでしょう」

時は2015年春。

日本は、いや世界は滅亡の淵に立たされていた。

深海棲艦。

半分機械で半分生き物の生まれながらのサイボーグと言うべきであろうその生物は、1年半前に世界一帯、特に太平洋を中心に突如として大量に発生、瞬く間にハワイやオセアニア諸国を占領してしまった。

その惨状に各国は手をこまねいていた訳ではなく、連合軍を派遣するも連戦連敗。ついに日本近海やアメリカ近海にまで現れる様になり、世界中が人類は滅亡するのではないかと恐慌状態に陥った。

「いい大人が勿体ぶつて話しする？そういうのって先に結論から話すべきだと思うけど？」

防衛大臣の上から目線にイラついたのか、赤羽業が棘のある言葉で返す。

だがその言葉は、その場に居る殆どの人物が思っていた事の代弁でもあつた。

「全く、最近の若者は会話を楽しむと言う事を知らないのか？」

その言葉がやや不愉快だった様だ。大きく鼻で老眼鏡を動かす。ずれた老眼鏡を元に戻しながら、愚痴るように防衛大臣は呟いた。

「まあ良い、結論を言おう。君たちには徵兵されてもらう。徵兵されて浦賀にある鎮守府で艦娘たちの教育要員兼強襲揚陸要員の任に就いてもらおう」

「え、」

E組全員が一斉に驚いた。

寺坂竜馬が驚きそのままで口を開く。

「ちょ、ちょっと待て。大学とかどうするんだよ」

「もちろん休学してもらいます。その間は学費を払う必要も発生しません」

「ここに来て、大臣の後ろに携わっていた秘書が口を開いた」

背が高く、大臣のボディーガードも兼ねている体格の良い若年の男性である。

「艦娘つてあの艦娘ですか？」

不破優月が矢継ぎ早に質問する。

「そうだ。かんむす、という言葉に別の意味は無かつたはずだが」

防衛大臣は眉一つ動かさず答えた。

そう、世界が滅亡する瀬戸際、という話にはまだ続きがあつたのだ。

艦娘。

もう人類滅亡か、という絶望の中に現れた最後の希望。

第二次世界大戦前後に活躍した戦艦の魂を宿した少女達の事である。

艦娘の素となるものは適合者である人間の女性だ。

未成年者の人権を侵害する物として批判的な向きも国際社会には有つた。だが彼女達は、日本に迫りつつあつた深海棲艦の軍を瞬く間に押し戻して行つた為、追い詰められた状況の国際社会は追認していく他無かつたのである。

「駆逐艦の艦娘は小学生から中学1、2年生、軽巡洋艦も中学2年生から高校1年生までの少女だからな。そういえば、児童養護施設で児童を教えていた経験も君らにはあつたよな。それが活かせるぞ」

と話を進めていこうとする防衛大臣。

「ちょ、ちよつと待つて下さい。私たちはやるなんて一言も、」

それに焦りを全面に押し出して片岡メグが異議を挟む。

「いや、俺達はこの話を受けざるを得ないよ」

その異議を冷静に赤羽業は否定していく。

「ほう、流石だね」

防衛大臣は感心して眉を少し動かした。

「もし、僕達が受けなかつたら、他の似たような高校生達が同じようにこの任に就くようにならぬ。その人たちの事を想い、僕達は断る事が出来ない。…どうでしよう？掛巣さん」

磯貝悠馬が苦虫を噛み潰したような声を出す。その絶望の重さがE組全体に重くのしかかる。

「強制とは人聞きの悪い。私はただお願いしているだけですよ。：最も君たちが仏心を出すから断れない、それだけです」

防衛大臣は猫なで声を囁いた。

その挑発めいた態度にE組の面々の怒気が増していく。
足元を見やがつて。

そんな言葉が聞こえてくるような状態であつた。

「…おう、黙つて聞いていれば舐めた態度をとりやがつて」

「俺たちをただの高校生と思つてないだろうな？」

ここに来て吉田大成と村松拓哉がその怒気を代弁するように防衛大臣を詰る。

今でも飛びかかりそうな二人の後ろに寺坂は黙つて彼らの後ろに回る。飛びかかる彼らを止めるため、では無い。別の理由があつた。

防衛大臣が微動だにしないのだ。

政治家とは言え、ここまで怒氣を放たれたら少しは反応するはずである。

だが、防衛大臣は後ろの秘書と同じように全く普通の表情を崩さない。

ここで初めて、E組一同全員がこの防衛大臣も並大抵の人間でないことに気づく。

「よしよし。大した殺氣を放てるじゃないか。戦場に立つなら、そのくらいの物を出せないとな」

ここに来て防衛大臣は僕らの殺気に応え、初めて笑った。

猛獸。

一言で表現するならこれが最適解だろう。

「…ツ！」

E組の一団が総毛立つ。

E組の一団が半ば本能的に全神経を戦闘モードに切り替っていく。
その様子をまじまじと見る大臣。

更に戦闘モードの顔に切り替えるつて行くように見えた瞬間、

「…はあ」

といきなり小さなため息と共に大臣の顔から獰猛の笑みが消えた。

：その顔には苦渋、という文字がはつきりと浮かんでいる。

大柄な体で立派な椅子に座っているはずの防衛大臣。

だが今はその身体が誰が見ようとも小さく見える。

何か見てはいけないものを見ている。そんな雰囲気が部屋に漂っていた。そんな様子を見て大臣は更に気が進まなそうな顔になりつつ、口を開く。

「私は防衛大学校出身で陸上自衛隊のレンジャー教官の経験もあるんでな。正直言つて君たちの様な少年兵を作るという、上の判断は承服しかねる物があつたのだが……」

「どう言葉を締めると、ゆっくりとE組一同の顔を見渡した。

「防衛省にあつた資料通り、君たちの中学生三年生で過ごした一年間は充分に徴兵に耐えれる人間をつくり出せた様だな」

大臣はそう言つてまた更に、顔にある皺を更に深くしていった。

「そんな顔になるんなら、そんな命令最初からやらなければいいじやんか」

寺坂竜馬がそんな大臣の様子を見て、呆れた様に口を開く。

「バカを言え。そんな事をしたら、即座に私の首が飛ぶどころか政治家生命すら危ういわ。ここで私の首が飛ぶとあいつらがスタンダードアロンしてしまう

「あいつら…？」

竹林孝太郎が意を測りかねて疑問を投げかける。

「まあ、直にわかる」

「……応聞く。君たちは日本国の大兵を受ける、それで良いな？」

「……E組には逃げ道は無かつた。

「ここで逃げてしまつたら知らない誰かが生贊の羊にされる。

そんな事はE組にとつてそれは受け入れがたい事実だ。」

かつて大人に見捨てられた自分たちが今度は本意では無い命令を大人に受ける。しかも逃げたらもつと後悔する形で。

：受け入れるしかなかつた

だがそれを今すぐ受けいれる事が出来るかは別問題であつた。

そんなE組の気持ちを察した磯貝が口を開く。

「少し、僕達の間で話をさせてもらえんか？」

直接話しを突然持ちかけてきたという事は余裕は本当に無い、それが実情であろう。だからこそ背景の整理をしたい。

「…いいだろう。だが、ゆっくりとは待てないからな」

大臣は多彩な感情を見せた今までとは打つて変わつて仏頂面になり、その提案を承諾した。

「たくつ、本当に急過ぎるぜ、この話」
寺坂が悪態をつく。

「まー、そんだけ日本という国が追い詰められてるって話だよね」

赤羽が口を開く。軽い口調と裏腹に顔は真顔のままだつた。

防衛大臣の計らいで防衛省の会議室の中、E組は話し合つていた。

この計らいは徵兵されるとは言え、破格な待遇で言えよう。

だが、そんな待遇を自分達で意識出来ないくらいには緊迫したやりとりが続く。「きょうしゅうようりく要員つて何なのかな？」

倉橋陽菜乃是ずっと疑問であったのであろう。緊迫した雰囲気に合わないおつとりとした口調でE組全員を見回して尋ねている。

「簡単に言うと、海から島へと上陸する時に攻め込んだり物資の上げ下ろしを行つたりする兵士だよ。アメリカ軍だと海兵隊として独立して編成されてる部隊だね」

磯貝が答える。E組随一の秀才は強襲揚陸という一般人に馴染みの無い用語を濶みなく説明する。

「え、なんかそんな凄く重要そうな所を任せられるの？」

岡野ひなたが驚いた声をあげる。

「ところが、そういう訳でもないんだよねえ」

赤羽業は官僚志望という事もあってか、この内容にも対応出来るのであろう。少し余裕が戻り軽い口調で補足を入れる。

「どういう事？」

木村正義が疑問を挟む。

「実は自衛隊には海兵隊にあたる、強襲揚陸人員っていうのは存在しない事になつてゐる

んだ」

磯貝が説明を始める。

「へえ～」

どこからともなく感嘆の声が聞こえる。

「そう、あくまでも“自衛隊”であり、敵に攻め込む為の人員は不要、っていう思想からそういうのを今に至るまで作っていなないんだ」

赤羽がまた補足説明をする。

「でもそれだと深海棲艦に占領された島を奪い返す時に対応出来なくなつたから、緊急にそういう要員が欲しくなつたんだろうな。自衛隊員、深海棲艦と戦つて3分の2にまで減つたらしいから」

磯貝が口調で淡々と事実を述べていく。

それはこの日本が未知の怪物に対して消耗しているこの上ない証であつた。

「で、新設の部隊なんか作れるはずもなく、暗殺者とは言え軍事的な訓練を受けた経験のある俺らに白羽の矢が立つた、という訳か」

千葉龍之介が顎に手を当てながら分析する。

「そういえば鳥間さんも、イリーナさんも何やつてんだよ。この話に反対しなかつたのかよ～」

岡島大河がやれやれと言つた表情で口を開く。彼の軽いノリの発言。その場の緊張が緩む。

「二人とも深海棲艦対策で今はタイ」

中村莉桜がそんな岡島くんの発言をやれやれと思つたのか、少し投げやり気味に答える。

3年E組の担任であつた超生物、通称「殺せんせー」

その殺せんせーに後事を託された防衛省の一員である鳥間惟臣とその妻となつた鳥間イリーナは海外諜報を担当する部署に回っていた。

そして深海棲艦戦争の戦局の悪化とともに国連の深海棲艦対策部として未だ健在であるタイ王国の首都バンコクに赴任していたのであつた。

それを思い出すE組一同。

「ん…。なんでそんなタイミング良く二人共日本から居なくなつてんだ?」

杉野友人が疑問を呈した。

その発言を聞いた瞬間、クラス一同がパズルが嵌つたように一様に察した。

「もしかしてこれ、狙い通りつて奴?」

場の空気が引き締まつていく。

「ここまでして俺たちを徵兵したい奴らが居るつて事か」

菅谷創介がその空氣の総意を口に開いていく。

それは見えない悪意を代弁する物であつた

「そこまで私達を陥れたい奴つて鷹岡と柳沢が思いつくけど…」
不破が思いつくだけの名前を羅列していく。

鷹岡明と柳沢誇太郎。

E組にとつて浅からぬ因縁も持ち主であつた。

だが、今は話の本脈から逸れてしまう為、その因縁に対しても省略させてもらう。

「鷹岡はともかく、柳沢は身体も動かせない状態だつたはずじやなかつた？それに人望もほとんど無かつたつて話を聞いたけど」

片岡メグがその言葉に反論していく。

「そういう犯人探しするのには材料が少ないとと思うぜ」

「寺坂の言うとおりだ。ただ少なくとも、僕らのことを快く思つていない、いや悪意を持つている人物が居るという事はこれから的事を考え頭の隅に入れとくべき、だと思ふよ」

寺坂と三村航輝が脱線しそうな話を元に戻す。

「これからのこと、かあ…」

潮田渚が口を開く。

今でもこんな非日常的な命令が信じられないのであろう。

：普通、通常の民主主義国家下でこういう重大な物事を通すのは、国会における議論を経てその事の是非が語られる。その間に当事者の彼らの心情も定まる。そのはゞであつた。

しかし、今はその法案を通した大人側の裏技でそういう事は一切無視された、と言つて良い。

：もし、悪意という物があるのならそこである。

だが、今の彼らはそこに對して触れずに進んでいる。気づいていないのか。それとも敢えて気づかないで先に進んでいるのか。

答えは後にわかる事となる。

「そうね。そんな伏魔殿から自分だけ逃れよう、つてのは私の趣味じやないわ」

狹間綺羅々が口火を切つて徴兵を受けるに賛同の意を述べる。決して運動が得意では無い人物ではなかつたがその意志は堅い物が見えた。

「その通りだね。医者なんていつでもなれる。今は僕らが一丸となつてそんな悪意と戦う時だと思うよ」

竹林も同意とばかりに口を開く。彼もまた運動による暗殺が苦手だった人物である。二人共徴兵、となると多大な苦難が予想される二人であると言つて良い。

そんな二人からの力強い徴兵される事への意志の顕れ。

それはこの場の空気を決定させる痛烈な一打となつた。

「あれから3年経つた。各々殺せんせーからのアドバイスブツクを貰つて自分たちの課題を見つめ合い成長したと思うんだ」

その一人の意見を承け、磯貝悠馬がE組全体を見回して口を開く。
「だから徴兵を受けるだけじやない、俺たちをハメようとしている奴に一泡ふかす。いいな!？」

強く拳を握りあげ、スピーチの様に場を締めあげた。

「おー！」

一同は同意の歓声をあげる。

今ここにE組は徴兵される事を決断する運びとなつた。

「…決まつたか」

防衛大臣の部屋。

防衛大臣はさつき送り出した時の仏頂面はそのままに、手元にあつた書類を後ろの秘書に渡して短く一言言い放つた。

「はい、俺たちはあなたの提案に乗る事にします」

磯貝がE組を代表して意志を表明した。

「…賢明な判断だ」

「あんたの思い通りなんじやないの」

赤羽が悪態をつく。

「…そう思うと良い」

防衛大臣は否定も肯定もしなかつた。

「…そう思つておくことにしとくよ」

張り合いが無さそうに赤羽は引き下がつた。

「では手続きをしますのでこの下の会議室に移動してください」

ここまで久しく口を挟まなかつた秘書が口と身体を動かし、移動するように促はしへた。

E組一同は無言でそれに従う。

秘書が観音開きの扉を両方開ける。4人ずつ順々にE組の面々は出て行つた。

そんな最中、突然防衛大臣が口を開いた。…あまり大きくなない声だった。

「…ああ、一つ言い忘れていたことがあつた」

集団の最後尾に居た潮田と隣りにいた雪村あかりが怪訝に思い振り返る。
「提督は優しい人間だ。気をつけると良い」

「…？」

その言葉の意味を二人は意図を図りかね、また踵を返し部屋から出していく。

彼らがその言葉を知るのは鎮守府に着任してからである。∴今の彼らにはその言葉を知る術もなかつた。

∴いかがでしたでしょうか？

これは柵ヶ丘中学校3年E組でも暗殺の才能を万全に發揮し、この物語を作る上でも手がかりとなつた膨大な資料を残した潮田渚くんの手記からのプロローグでした。

ここでは重要な機密が三つ、明らかにされています。

一つ、柵ヶ丘中学三年は決して国難に立ち向たいという自発的な意志で徴兵を受けた物では無く、半ば強制的に徴兵されていた物であつた事。

二つ、その徴兵には何らかの裏があつた事。

そして三つ、∴未だに3年E組の生徒達は3年時に担任だった超生物の事を殺せんせーと言い、未だに慕つてゐる事。

その教えが如何にして彼らの血肉になり、道標になつてきたのであつたのか。

僅かながらこの手記で少し分かつたであろうか。

だが、それと同時にのことわざを皆様にお教えしたいと思う。

The road to hell is paved with good intentions

(地獄への道は善意で舗装されている)

…彼らはそう、善意で悲劇への扉を開いてしまったのである。その事を当時の私達を含めまだ誰も知る由はなかつたのです。

第一話 戦闘訓練

ここにちは、大淀型軽巡洋艦の大淀です。

つて青葉さんじやないですか、なんですか改まつて？
え？ 「E組」ですか？

：あの人たちは、とてもいい人たちでした。

鎮守府の皆と仲良くなつて、慕われて、提督にも信頼されて…。

無理矢理徵兵されたのにそんな後ろ暗さを一切感じさせないくらいには…。

そう、一番あの時の鎮守府が楽しかつたんですよね。

でも、あの時はもう戻らない。

皆さん全員居なくなつてしまつたから。

：ねえ、青葉さん。

これから世界はどうなるのでしょうか？

もしかして私たちのやつてる事つて、世界にとつてはあまりにもちっぽけで無意味な
事だつて思うように来たの。

え？ 考え過ぎ？

：でも、それでも、皆さんのが無名の戦士として死ぬことが無ければ、そんな世界の潮流に逆らうことが出来たんじやないか。

最近、時間が出来る度にそう思つてします。
そう思うと、青葉さんの言う通りに皆さんのがした事を少しでも遺さないといけないわ
ね。

この世界の潮流に逆らうために。

晩春の荒波が浦賀港にまで、大きな音を立て進入してきている。

ここは防衛省海上女性職員集合施設浦賀本所。通称浦賀鎮守府。

北はアラスカ、南はインドネシアと深海棲艦との戦争に東奔西走している艦娘達のベースとなる基地である。

その指揮系統の一番上に相当する提督室。その部屋には今、滅多に鎮守府を離れることがない司令官である提督の姿はおろか、提督代理であり艦娘達のまとめ役でもあり、連合艦隊の長、大和の姿もここには無かつた。

「大和ー！」

鎮守府の生命線となる浦賀軍港の防波堤。

不在の大和を呼ぶ、凛とした声が辺り一帯に響く。声の主の名は長門。大和着任までは連合艦隊の長としてその任を任せられていた女傑であり、凛とした声に似合った白黒

のツートンの艦娘の装束が灰色の防波堤に映えていた。

「はい、長門さん」

その声に反応して、紅い番傘を構えた長身の女性が振り返った。

朱色と白の戦装束。鼠径部を丸出しにした格好は痴女に見える、だが彼女自身の凛とした雰囲気はそうさせていない。

「駆逐艦達の訓練を見ていたのか？」

長門は大和が見ていた海の方に目をやりながら、大和に質問した。

長門が目を向けた先、そこには自衛隊員のボートと由良の監督の下で対潜警戒訓練が行われていた。

「…」

その質問に何故か大和は答えない。そして彼女の顔も長門の言葉に耳を傾けずに前を向いたままであつた。その様子を見た長門は一瞬訝しじんだが、すぐに察して、

「提督が心配なのか？」

と大和に別の質問をぶつけた。

そして、それは正鵠を得ていた。ここで初めて大和が長門の方へ向き正対する。

「…はい」

俯きながらの大和の声はいつもの様な気丈さは無く、ただ一人の女性として、心配と

している姿があつた。

「ハハハ、そうか。連合艦隊の長も提督の前では一人の女か」

長門は表面上では笑い飛ばした。しかし長門の顔はどこか影のある表情は残したままであつた。

：提督と大和の宿縁と愛。提督と艦娘達との絆と宿命。それは長門である彼女にも嫌という味わつてきた。

「今日、初めて私は行く側から待つ側に変わりました」

大和はゆつくりと口を開く。長門にもかかつた暗雲を指し示すように。

勿論、彼の信念、身体的な強さに疑いの予知は無い。

：だが彼は強すぎるのだ。

長門はかつて同じ艦娘である金剛の提督評を思い出した。彼女は戦艦の中では艦娘の中でも古参であり、彼女も大和と同じく提督を愛している。

提督は自分の名前の通りの金剛である。その理想は誰にも傷つける事が出来ない硬い石そのものであり、その理想の中にある仁者の精神は硬い金剛石の中に潜む脆さと言つていい物であつた。

(本当は一番戦いに向いてない人間なのかもな)
敵には夜叉の如く気迫を押し出すが、配下である艦娘達には優しくそして厳しく導い

てきた。

「…あの人はずつとこの重圧と向き合つて来たのですね」

提督は戦場に行く艦娘に絶えずこう言つていた。

「戦いに出れなくてごめんな。

「…そうだ」

長門は短く言い切つた。

「…」

大和は静かに目を閉じる。対潜訓練の掛け声がそのまま二人の間をすり抜ける。

「…大丈夫だ」

…暗雲は断ち切られた。

大和の顔が仰向く。その顔は驚きの色を見せる。

「私達がずっと還つて来れたんだ。提督が還つてこれない道理はない、そうだろ？」

長門はそう言つて微笑んだ。

…それは根拠などない空言だつたのかもしない。だが、その言葉は確実に大和の心

を捉えた。

「大体、訓練なんだ。いくら提督が戦い以外で鎮守府出たこと無いからつて心配しすぎだろう」

大和の心が解けたのを見て、長門は普段は厳格な彼女からは見られないおどけた表情を見せる。

「なつ、長門さんだつて本氣で心配してたじやないですか！」

大和もいつもの調子を取り戻し、口ぶりが軽くなる。

「ははっ、確かにそうだな」

そう言つて長門は大和に向けていた視線を訓練の方に戻す。

「でも、私達は信じる事、それを背に戦つてきたんだ。提督を信じてあげる事、それは造作も無いはずだろ？」

そう言つて長門は片目をつぶつて大和に笑顔を見せる。その仕草は普通の男性や女性なら魅惑されてしまうだろう。

「…そうですね。ありがとうございます！」

ただし、愛する者一筋な大和には額面通りの戯けた仕草、それ以上でもそれ以下でもなかつた。

「さて、そろそろ戻ろうか」

帰還を促す長門。それは信じて待つという行動の為に必要な行為であつた。

「はい。きちんといつも通りに仕事をこなす。それが私達が信じて待つ為に必要なこと。そうですよね？」

「そうだ。だから笑つて、笑つて待とう」

「…はい！」

そう言つて、海に背を向け、鎮守府へと向かう大和と長門。
：信じて待つという行為、どれだけの覚悟が必要か。

その心を背負つて、提督は今は少し遠い所に居るのである。

（ヤバい）

赤羽業はこの時、久しぶりの恐怖を味わっていた。

：最後に恐怖したのは中三の晩冬だった。

そう、クレイグ・ハウジョウとその部下たちの闘気に恐怖を抱いた記憶である。

だが、それは自分たちのフィールド（学校の裏山）でリベンジを果たし、乗り越えた
はずだった。

その恐怖が今再び蘇る。

（ヤバい）

潮田渚は困惑していた。

今まで出遭った敵とは一切違う何かをこの男は持っていた。
静寂。

その物を一言で表すならこうであつた。

自分の切り札であるスタッフクラナー。それは精神の波が有つて初めて通用する技であつた。

だが、今の一瞬の動きは一切の精神の波を生み出さなかつた。彼への突破口が見いだせない。

(ヤバい)

磯貝悠馬は策が尽き始めていた。

一瞬で寺坂、吉田、村松、堀部、木村と後方で支援用の煙幕を張ろうとしていた竹林と奥田。

この7名があつという間にリタイアへと追い込まれ、完全に作戦が崩れた。

2ヶ月にわたる初等訓練の最後の総仕上げとなるこの戦闘訓練。

E組はいつも戦闘訓練をしている教官と違う上官との戦闘訓練をしていた。

その上官は2メートル近い長身と今風で柔軟な美男である左半分の顔、無数の穴跡がある右半分の醜悪な顔が特徴的であつた。

(それとしたつて)

その穴だらけの顔の上官は槍の代わりであろうか、2メートル以上はある木の棒を両手に、凄まじい瞬発力で突進してくる。

〔撤退！ 射撃部隊は援護！〕

本来は寺坂達の先鋒の第一部隊が今回の上官を撃討して磯貝が率いる第二部隊と赤羽が率いる射撃部隊である第三部隊で決着を付けて、切り札である潮田渚は使わないともりであつた。

(ここまで破格な化物が出てこなくてもいいだろ!)

だが、その見積もりは春雪の様に僥々溶けて行く。

「げえつ、麻酔弾を全部弾き落としてる」

菅谷は恐れるように声をあげた。

走りながらも両手に携えた木の棒を器用に体の周りを高速回転させ、E組の射撃部隊から放たれる麻酔弾全てを弾き落としていた。

「怯むな! 同士討ちを恐れるな!」

いつもは軍隊生活とは程遠い余裕を持つた口調であつた業も、2ヶ月の軍隊生活で相応の指示を飛ばすようになつていた。

だが、その指示に焦りが見える。

こうなつてしまふと上官の思う壺である。

指揮官の焦り、怒りといった負の感情は配下達へ伝染して行く。

指示の声色が聞こえない、遠距離からの狙撃を試みている千葉龍之介と速水凜香以外の射撃の精度、それがあからさまに低下している。

(まずい!)

散開し見通しの悪い森を利用して撤退している第一部隊の一部と第二部隊。その兵士の一人、磯貝から見て左側にあたる兵士が上官に捕捉された。その人物は雪村あかりであつた。足場の悪い森の中でも十分なスピードを出す、その技術はこの兵役で勘を取り戻しただけではなく、それ以上への技術へと昇華させる事が出来たとE組一同は思つていた。

だが、その上官はそんな技術を鼻で笑うかの如く、雪村あかりとの間を縮めていく。
「このっ」

磯貝は麻醉銃を急所に向けて放つ。そこには綺麗な訓練という目的は失われていて、むき出しの命のやり取りしか存在していなかつた。

「甘いっ！」

ここに来て初めて、上官は言葉を発した。

瞬速で打ち出されたはずのそれは、瞬く間に木の棒に跳ね返される。

跳ね返った麻醉針は最短距離で磯貝の肩に横腹が命中。染料の散華と共に苦痛の声が出来る。

「ぐつ！」

雪村あかりはそれに合わせて麻醉銃を取り出し、反転して射撃するも即興の崩れた体

勢であつたため、上官の背中を掠めただけに終わつた。

「磯貝くん！」

あかりは短く叫んだものの急いで反転し、上官から離れようとする。

(…どうしようか)

千葉龍之介は逡巡していた。

自分と速水凜香は狙撃兵として、潮田渚はジョーカーとして磯貝から自由な行動を任せていた。

だが、今の状況は非常に狙撃に難い状況になつていて。

味方も敵も森の中へと入り込み、誤射の可能性が大幅に上昇した事。

今所持しているこのM24 SWS銃を改造した麻醉銃は弾速が実弾よりも劣ることであった。

一斉射撃を自分の身体に触れさせなかつた上官の神業的な運動能力を見た後だと、遠距離すぎると麻醉弾を見極められてしまう可能性が非常に高い。

(…いつそ近づくべきか?)

今の自分の居場所は演習場である森の端、演習場と普通の森との境界線でもある崖から遠い、一際大きく周囲を一望出来る大木。その幹から力強く生えてる枝に千葉龍之介は身体を預けていた。

(…)

この千葉が居る枝の上から崖の上はスナイパースコープ越しに見える。この訓練を見守っているのは陸海空の自衛隊の幕僚長たちである。

その隣に海将補だと分かる男の人が並んで座っていた。どうやら並々ならぬ地位の人物であるように見える。

：千葉龍之介の頭の中にはまだ他の引っ掛かりがあつた。今戦闘している上官とは訓練を始める前に一度挨拶したが、彼をどこかで見たことがある事、それと幕僚長達の迷彩服の間に軍服を着てはいれども全く違う異質の女人が2名居る事だつた。

しかし、今はその事を気にしている場合では無い。

業が大きな声で切り込みを叫んでいる。明らかに一斉射撃を諦めた。そうなると自分達の狙撃に対する比重が大幅に増す。

千葉は向こうの崖の向こうに居る速水の顔を覗た。彼女の表情は見えない。だが、彼女が自分の考えを是認している事が千葉には分かつた。

(よし、近づくぞ)

彼は大木からジャンプで他の木へ飛び移る。

：この決断は後に功を奏す。しかし、彼ら二人にはまだ分からぬままであった。

陸上自衛隊北富士演習場。

富士山北東の山麓に位置しているこの演習場。

春も終わりへと近づき、初夏の気配すら感じさせるこの演習場の森。その中では木とカーボンがぶつかり合う鈍い音が響き渡る。

(どうしよう…)

訓練開始から1時間近く経過した。

潮田渚は自分自身というカードを切れずにいた。

渚は審判の背中に隠れ、上官の隙を伺っていた。だが、E組の半分以上が脱落した今でもその機会を見出す事は出来なかつた。

片岡メグが吹き飛ばされ、渚と審判の側の木に転がってきた。
射撃に対する餉として3人一組で近接戦闘の時間を稼ごうとするものの、5分ともたずには3組9人が訓練脱落し27人の内16人が脱落、しかも近接戦闘要員は8割も氣絶しているおまけ付きである。

(あの上官、精神の波が極端に少ないまま、みんなを退けている…)

この訓練は簡単である。E組は迷彩服のみの上官に誰か一人が麻酔弾を打ち込み、気絶させる。もしくは近接戦闘に勝利して気絶に追い込む事でE組の勝利となる。

それに対し、上官はE組の皆が肩や胸、脚に付けている染料が詰まっている袋。それを破る事と、ペイント弾を詰めた銃で命中をさせる事。それをもつてE組は訓練から脱

落する事になる。

本来ならば、圧倒的にE組側が有利な条件下で始まつたこの訓練だが、ここまで上官が持つ脅威の身体能力でE組側を退け続けていた。

「今いる部隊は一つに集中しろ！ 今いる全ての兵力を出し切るぞ！」
業が声を張り上げる。

「渚も出ろ！ これで決めなければ敗北だ！」

それは最後の戦いである事を指し示していた。

その言葉を受け、渚はぬるりと審判の後ろから出だ。

そして業が居る木々の間の小道へ合流していく。

「…ほう。やはりそこだつたか」

また上官は口を開く。その表情こそ変えないが、視線は矢を射るようにまつすぐに渚を捉えていた。

「流石は暗殺者の才能を持つ者だ。気配の消し方は満点に近い。だが、1年間そばに居た友達に襲いかかつた時の殺気だけは一瞬、変わつたな」

そう冷静に上官は言い放つ。

(数多の殺意の視線の中で、渚だけの視線を特定した、だと…)
業は上官の感覚の鋭さに一層戦慄した。

だがそれと同時に小さな、ほんの小さな別の感情が生まれた事に彼自身ですら気づいていなかつた。

「本来ならば、その時点で倒すべき最大の事項だつたが、襲撃のタイミングを逸してたようだつたので捨て置いた」

そう言いながら上官は両手に持つ木の棒を子供の指遊びの様に回転させる。「随分余裕があるようだけど、ここに居る全員の前にそんな事言える?」

そう言つた業の周りにはE組の残留戦力が集まつていた。

赤羽業、潮田渚、雪村あかり、岡崎大河、神崎有希子、倉橋陽菜乃、菅谷創介、原寿美鈴、矢田桃花。

この殆どの少年近接戦闘は苦手な面々である。

だが、その面々をじつくりと眺めた上官は

「言えんだろうな」

と不利を認めた。

「…隨分簡単に不利を認めるんだね」

業は内心肩透かしを食らいながらも、挑発するように返答する。

「…スタート地点の開けた地点はしが良いように見えるが、高低の問題で下半身が狙いにくい構造になつていた」

そう言つて上官は回してた木の棒の動きを止めて、左手の棒を業に指差す様に向けた。

：その左手は小指と薬指の先端が欠け、まともに木の棒を触れていなかつた。
 「もし狙撃を狙うのであつたら、弾道の予測しやすいスタート地点ではなく、もつと平坦な場所へ私をおびき寄せる、若しくは最初に第一部隊を制圧されたのを恐れずにきちんと第二部隊10人掛かりで私に近接戦闘を挑み、制圧してから麻酔銃を打ち込む。そうするべきだつた」

そう冷静に分析する上官。それはE組の作戦ミスを指摘するものだつた。

「…」

業は押し黙つた。

：戦場での作戦ミスは命に直結する。

そう2ヶ月で叩きこまれただけあつて、その上官の言葉は鉛よりも重かつた。
 だからこそ、しつかりと下準備を怠つた自分への不甲斐なさに業は臍を噛む思いだつた。

返答出来ない業の代わりに神崎が上官に向けて返答した。

「御金言感謝します。これから先、この訓練ではこの失策を忘れないように精進させてもらいます。…ですが、今この訓練では私たちが今これから麻酔銃を貴殿に打ち込めば

勝利なんですよね？」

神崎はそう雄弁に語り上げる。それは迷いが生まれた司令官に対しての叱咤激励でもあつた。

「…ああ、そうなるな」

上官は表情を変えずに返答した。

「なら、ここで一斉に仕掛けて勝利に追い込む事には俺たちは変わりはない、そうだろ、カルマ？」

神崎の言葉の続きを岡島大河が紡ぐ。

それは、ここに居る残りのE組達全員の総意である事を表していた。

「……」

業は押し黙ったまま、皆を見回した。迷いが消えたのか眼に闘志が宿っている。

「…よし皆、上官を包囲しろ！ 合図があるまで距離を保て！」

そう言って、全員は素早く散開を始めた。

その言葉を聞き、上官は静かに笑う。

：それはいつか見た防衛大臣の同じ顔であつた。

—最後の戦いの火蓋が切つて落とされた。

「…」

「…」

テントの中、観戦している大淀とあきつ丸は無言であった。
もうすぐ6月である。初夏の日差しは軍制の冬服だと若干汗ばむくらいになつていた。

その横に陸海空の幕僚長が全員並び、テントの下で軽く談笑を始めていた。

陸の幕僚長は虎谷茂雄。

海の幕僚長は馬場錦吾。

空の幕僚長は熊代忠。

いずれも50前半の男盛りであつた。

そんな談笑の中に一人の20代男性自衛官が混じっていた。

制服は海上自衛官の服であり、その海将は自衛官の命と言える制服を眩しいほどにきちんと着こなしていた。

(噂には聞いてましたが、凄いですね山口殿は…)

(いい加減慣れました)

小声で喋り始める大淀とあきつ丸。

陸海空、それぞれの長と言える幕僚長。

その輪に入つて談笑するという、上下関係の厳しい自衛隊において大馬鹿か命知らず

か分からぬ様な行為に見える。

だが彼を知る者彼を知る者にとつては当然の行為なのである。
彼を知る者はこう呼ぶ。

影の提督と。

山口守高 26 歳。防衛省海上女性職員部涉外担当。

今、訓練場で E 組と戦つている「提督」とは盟友以上の存在である。

彼には提督の様な一騎当千の武はない。

彼の持つ最大の武器はその口である。

「男の頭は坊主に、女の髪の毛はボブカットに、つて内務班長が言つた時にあまりにも無体じやないかと抗議したんですが、皆飲んでくれるとは思つてもみませんでした」

片手に持つ紙コップはほうじ茶だつたか。

守高はそれを一気に飲み干した。

弁舌さわやかで豪放磊落。

山口守高に下された周りの評価はそれだつた。

相州浦賀にある海上女性職員駐屯地、通称鎮守府。

その鎮守府は国の予算だけで賄われてゐる訳ではない。

総合商社、ゲーム企業、製鉄会社、流通業界、服飾業界…。

ありとあらゆる企業の支援を汲み取り、日々海上女性職員、通称艦娘が対深海棲艦の戦いに集中出来るような構造に見繕つたのが提督と守高、この場所には居ない女性海将である伊代野綾の3人であつた。

そして、その構造を作り上げる為の煩雜な交渉、弁舌を活かし一手に引き受けたのが彼、山口守高であつた。

当然の如く、鎮守府に関する防衛庁内の利害調整も彼が行つていたのであつた。

「まあ、その方が実際鉄バチの中が蒸れんでも住むからねえ。最近の子は自分の感情より合理性を優先させることは聞いていたが、その通りでしたな」

虎谷が同じく片手でほうじ茶を飲み干しながら守高の意見に同意する。

制服時代から変人軍師との評判名高い陸の幕僚長は談笑を楽しみながらも眼は笑つていなかつた。

「しかし、内閣府から話を聞いた時は流石に気でも狂つたのかと思いましたが、中々どうして彼らはガツツがある」

馬場が飲み干した紙コップを潰しながら豪快に笑つた。

幕僚長の中では一番整つた顔をしながら、その語り口は一番毒を含んだ物である。

「まあ1年間、超生物を殺すために様々な訓練を受けてきた面々だからな。その事を思い出す、それだけで充分だつたのでしょうか」

熊代は丁寧に両手で紙コップを持ちながら、ゆっくりと中身をする。この中では一番柔軟で、少しだけE組に対して憐憫の情があつたか。だが、彼はE組の徵兵される先とは一番関係ない部署の人間があるので、その情が彼らに恩恵を受ける事は無い。

(…よく皆が必死に戦っているのに話が続きますね)

大淀は呆れながら双眼鏡を取り出し、森の中の戦況を見る。

ただ、彼らの談笑が何を意味しているのか、大淀にも理解できていた。

双眼鏡の先には、九人が一齊に提督に対して攻撃を始めていた。

模造ナイフと二本の木の棒が高い音を響かせ合いながら叩き合っている。

…ところで赤穂事件というのを知っているだろうか。

後世人形淨瑠璃などで脚色され、忠臣蔵の名で有名になつた江戸時代の大事件である。赤穂藩の浪士四十七士が、冬の夜半に吉良邸に討ち入つたのが後世赤穂事件を有名にさせた吉良邸討ち入りである。

だが夜半の奇襲とは云えども二時間程度の戦闘で歯向かつた四十人近くの吉良家の家臣を確実に殺傷させ、主君の仇とも言える吉良義央をも殺害している。赤穂浪士達は若い武士だけではなく、七十七歳の老人も含まれていた。

…そんな面々の赤穂浪士達がどうやつて迅速に事を運べたのか。

その答えが双眼鏡の向こうに写つていた。

(…提督、流石に二十七対一は無理がありますよお)

…そうである。

赤穂浪士は決して一対一の戦闘をせず、当時最先端の兵学であつた山鹿流兵学に基づき三人一組で行動していたのである。

当時槍の戦闘は廃れはじめ、狭隘な道路や敷地に向いた刀中心の戦闘になつていて為、その兵学が最大限に効果を發揮したのであつた。

…以上が提督自身から大淀ら「はじまりの艦娘」達に最初の兵学の授業で教えられた物であつた。

(…だから艦娘は数的不利な状況で戦つてはいけない。数的不利になつたら命を惜しめ、逃げろ。そう教えてくれたのは提督じやないですか)

大淀はほどを噛んだ。

提督がいつもいつも艦娘相手に一対多数で組手を行うことは、大淀も闇を共にした事があつた為知つてゐる。

だが、この訓練はそんな組手より十二分に危険度が高い代物である。どんなに頑丈な提督であろうと、麻酔弾を体に喰らつて無事でいられるはずが無い。

スナイパーである千葉龍之介と速水凜香はもう提督を確実に射止める射程圏に入り

込んでいる。

だから幕僚長たちは談笑し始めたのである。

：もうこれ以上自分たちの予想が外れる事はないだろう。

提督が敗北するただ一つの予想から。

そう悟つてゐるのが、大淀には痛いほど気づいていた。

そう思うとこの訓練 자체を中止にさせたい衝動に大淀は駆られる。だが、自衛官の枠に入り込んでしまつたこの身体では訓練を止めることは出来なかつた。

あきつ丸はそんな大淀の姿を横目で見ている。

あきつ丸は元は陸上自衛官だつた。過酷な訓練も困難な任務も沢山見てきた。

だから大淀の気持ちを理解はすれど、同意をする事は出来なかつた。

そう後ろ髪を引かれる思いから逃げるようになきつ丸は視線を提督達の戦いへと戻す。

元々人間の時からかなり視力が良かつたあきつ丸。彼女の視力だと裸眼で容易に提督の表情まで見える事が出来る。

「何か喋つてる…？」

事前の打ち合わせではネタ明かしは全ての戦いが終わつてからのはず、提督はそれまでは最低限の事しか喋らないはずであつた。

「あきつ丸さん」

大淀は双眼鏡から目を離さずにあきつ丸に話しかける。

「承知」

大淀の意思を汲んだあきつ丸は愛刀の脇差を取り出した。

その刀は陸上自衛官から艦娘になつた時に親から譲られた先祖代々秘蔵の刀であつた。

「行くのか？」

談笑をしていたはずの守高が大淀とあきつ丸を呼び止めた。

「山口海将補、あなたもしかしてこの事を……！」

大淀はその美しい顔をキッと歪めた。

いつもは提督と負けず劣らず守高と信頼関係を結んでいた艦娘であったが、この時は提督の方が優先であつた。

「いや、知らない」

守高の返答は大淀にとつて意外だつた。

「え？ じやあ何故あなたは」

総て分かつた風なのでですか？ という言葉を言い切れずに大淀は飲み込んだ。だが、それを察した様に守高は言葉を放つ。

「だつて俺、あいつの影だもん」

そう言つて飲み干した紙コップを置いて、ゆつくりと立ち上がつた。

「行くんだろ？俺も行く」

守高の背丈は日本人の平均身長を越える程度の身長であつた。

だが、きつちりと決めた制服と堂々と胸を張つた姿勢が身長以上の体躯に見せる。

「ただ、あいつの言うことはお前ら艦娘にとつてもあまり耳あたりが良い事じやないと
思うぞ、それでも行くのか？」

守高は大淀とあきつ丸に質問した。その目はまっすぐな目だつた。

「行きます。だつて私たちは…」

様々な感情が去來したのか、そこで大淀は一息置いた。

「あの人、艦娘ですもの」

その言葉を聞いて守高は顔を緩めた。

「…どうか、じゃあ行くぞ！」

「了解であります！」

三人は崖の上から先程までスナイパーの速水が待機していた木に飛び移る。

：晩春の太陽が空の真上に差し掛かろうとしていた。

鋭い木とカーボン模造のナイフの打ち合う独特的の音が響き合う。

最後の戦いはここまでE組が近接戦闘を優位に進めていた。だが、そんな優位の中でも提督は二本の棒を活かし、有効な打撃を受けずにいた。

「答える！何故お前らは戦う！」

二本の木は舞の様に美しく上官の周りを舞っていた。それとともに上官は大きな声を発していた。

「それは、徵兵されたから！」

神崎が性格上滅多に出さない大声を出している。トレードマークであつた日本人形の様な長髪は失われていた為、ヘルメットから黒い髪は靡かない。

「否！」

その返答を聞くな否や、防御に徹していた上官が攻撃に転じる。二本の木の棒の猛然とした突きは神崎有希子の身体を的確に捉えた。神崎の身体は宙へと舞い、戦いから脱落する。

「…次！」

攻撃に転じたのかが予想がつかないほど一切の予備動作を含めない自然な動きに他の6人は呆然とするしかなかつた。

だが、渚と業は違つた。

（精神の波が乱れてきてる…？）

(わざわざ、持久戦を捨ててきた…)

それは例えるならば、門を閉め忘れ滅亡の道へ歩んだ東ローマ帝国の如く、呆氣なく目の前に差し込んできた光であった。

その光は2つに分かれ、渚と業の前に微かな道を作っていく。

(行ける!)

「怯むな! 今までの作戦を守つていけば勝てる!」

業は迅速かつ的確に指示を出す。

「業! トドメは任せて!」

渚は鋭く言い放つ。それは彼の普段の様な柔軟さではなく、暗殺者の才能が顕現した鋭さであつた。

「OK、カルマに任せる!」

素早く円形の包囲を締めなおす8人。

「やはりそうしてくるか、まあ俺でもそうするわな」

突然上官が碎けた口調で話してきた。木の棒は静止していて、次の獲物を探すような動きをしていた。

「次はないよ、上官?」

業は上官の代わりか、模造ナイフをぐるぐると回し始めた。

2ヶ月の徵兵生活で失われていた悪戯心が蘇つた様だつた。

「ほざけ小僧、俺は負けんぞ」

業と同じように悪戯っぽく語る上官だつたが、左半分の顔が痘痕だらけなだけあって、威圧的にも思えてくる。そのやりとりの間にも8人は上官の周りを走り回つている。

「もう一度問おう。何故お前らは戦う。いや、お前らが何を裏切つてているのかわかるか？」

上官は二刀流の棒をまた高速回転し始め、戦闘態勢をとる。

「それはどういう意味ですか！」

原がここに来て初めて口を開く。その声は当惑に溢れていた。

「こういう事だ！」

神崎を貫いた物と同じように二本の木の棒を瞬速の動きで突き出す上官。その丸いはずの先端は余りのスピードで刃物の切つ先に劣らない動きを見せていた。

「同じ手は食わない」

「つて言つたよ、：？！」

その動きを見越して岡島と倉橋が原のガードにかかる。

それと同時に渚、業、雪村、矢田、菅谷が一斉射撃に入る。

戦術を学んできただけあつて、先程のミスを帳消しにする具合になるほど正道に適つた物であつた。

このままだと上官に麻酔弾が当たり、敗北は必定。

と思つた瞬間、上官は瞬速の突き出しを瞬間に止めた。その代わりにドロップキックの要領で下半身を投げ出して、岡島と倉橋を股に挟み込むようにスピード良く足首の内側で勢い良く二人の腰を捉えた。二人は意図しない方向からの痛撃に完全にバランスを崩し、お互いの顔の側面が衝突。意識を失つた。

体勢が大きく代わり狙いがされた事と更に上官の棒も今までの高速回転に戻したため、一斉射撃や狙撃も虚しく、彼の棒に阻まれたのであつた。

「…なに、あれ」

大木の枝に潜んでいる速水凜香が呆気に取られた。

彼女の眼前には寝転がる形になつた提督に向けて、業たちは変わらず射撃を打ち込んでいた。だが上官はあつという間に体勢を整えてその射撃を躱していく。

彼女は殺せんせーを脳裏に過ぎらせる。

だがあれは、超生物の話しだ。あの上官は人間である。

しかしこの訓練で度々見せる上官の動きは、E組のもう一人の「担任」鳥間惟臣の物

とも違つた人間離れした異次元の動きである。

「ふう……」

速水は大きく深呼吸をした。

手にした麻醉銃のスナイパースコープを覗き直す。自分の一挙一動にE組の勝敗が掛かっている。そう思うと引鉄が重くなるのを感じる。

その刹那、速水の後方の木から僅かながらに音がした。

(気配を消してる。誰だろう……?)

頭のなかで思考しながらも速水はその方向を向きはしない。

審判が何もアクションを起こさないのを見るに自衛隊関係者なのは間違いない。

どういう理由でこの訓練のフィールドに入つて来たのかは知らないが、自分たちに害は及ぶことはないであろう。

むしろ、それに過剰反応してこの位置を上官に知られた方が怖い。そう速水は冷静に分析してスナイパースコープを覗き込んだままでいた。

(大淀、あきつ丸、守高……やはり來たな)

上官こと提督の感覚は速水凜香よりも数段上だつた。

もう既にスナイパーの千葉と速水の位置はおろか速水の後ろ30メートルに隠密で接近していた3人の存在に気づいていた。

「何を裏切つているだつて？」

寝転がる格好になつたはずの好機を逃した上に自分たちの包囲も崩れた悔しさからか、業の語り口はイラつきを隠せなかつた。

「分かつてゐるさ、殺せんせーは自分を命の的にする事で命の大切さを説いた！」

そう叫びながらも左手は包囲を続行するように指示していた。あくまでそこは冷静さを失つていなかつた。

「なら、なぜ気づかない！今軍隊に徵兵される事はその教えに逆らう事になるんだぞ！」

提督は叫んでいた。

歪んだ半分の顔が更に歪んでいく。

「それは！殺せんせーが教えた力は誰かを助ける為にその力を使えつて言つたから！」

雪村は同じように叫びながら、提督の構えた棒に猛然とナイフを振るつていく。

かつて染め上げて演じていた茅野カエデはそこになく、黒い短い髪の雪村あかりがナイフを振るつていく。だが叫ぶ言葉はE組の茅野カエデのままであつた

「だから今ある力を！徵兵を拒否されて理不尽な目に遭う他の誰かを生み出さない為に使うの！それはいけない事なの!?」

：感情的になつてゐるのか。

業の一撃離脱の指示を忘れ、雪村は飛びかかりながら、更に提督の棒で作つたガード

に打ち込んでいく。

「茅野、打ち合い過ぎだ！」

渚は動搖の余り、前の名前で叫んでいた。

雪村の打ち合いが起こしている隙が傍から分かる程大きな物になっていた。
「ああ！ そうだ！」

提督はその隙を見逃さず、雪村の右脇腹を狙いに行く。
その一撃は雪村の身体能力は優れていたのもあり、既の所でガードするのを成功した。

しかし2m近い提督の筋力と、いくら鍛えられた身体とはいえども、160という体格差である。鐔迫り合いですら仰け反るような形になる。そんな状態になればどうなるか。残酷なほどに1秒後がそれを示していた。

突風が吹き荒れた様だつた、と大淀は後に表現した。

提督は右手の棒を雪村のナイフを支える左手ごと「压しきつた」。木の棒はヘルメットの前部を痛打する。ヘルメットが割れんばかりかの大きさの鈍い音が響いた。
「誰かが理不尽な目に遭う可能性？」

雪村あかりは膝から崩れ落ちた。脳震盪を起こしたか白目を剥いている。
「そんなのはあくまで可能性だ！」

提督は二本の棒を今度は回さずピンと一つの方向に向けて話す。それは雄々しく、まるで一国の王が強く宣言をするが如く、力強い声であった。

「お前らが向かつて いる物は人殺しの道でしか無い！」

話している間にも業たちは銃弾を放ち続いている。

だが、提督に対して銃弾が何故か当たらない。

あかりの壮絶な散り方を見て、見えない恐怖を呼び起こしたか。とにかく提督に銃弾が当たらない。

「それでも、僕たちはその道を選んだ！」

渚は銃を構えながら大きく応えるように叫んでいた。それは怒気を含む物であつた。

雪村あかりの存在。それが渚の中で友人以上の物になつて いる事に自分自身でも気づいていない。

「それは教えを背くのかもしねない！」

原寿美鈴も渚の叫びに呼応して、同じように銃を構えながら叫んでいた。穏やかで滅多に叫ぶことの無い彼女も今は感情を表に出していた。

「だけど俺らは！あの一年を忘れた訳じやない！」

菅谷創介は狙いを定めるのに必死になりながらも次の言葉を紡ぐ。

「そう、誰かを助ける事は地球を救える！」

その言葉を残し、矢田桃花は模造ナイフを持ち、提督に接近していく。

包囲網の順番通りとは言え、戦闘が得意ではない彼女にとつて提督に近づくことは勇気が必要な事であつた。

「自衛隊法、第三条。自衛隊は、我が国の平和と独立を守り、国の人命を保つため、我が國を防衛することを主たる任務とし、必要に応じ、公共の秩序の維持に当たるものとする。人殺しの業を背負つてまでも平和を守りたいのは俺らだつて同じだよ、司令官！」

そういうて業は叫びはすれど、先程までのイラつきが嘘のように霧散していた。

(こいつ、俺の正体に気づいたのか)

その表情を見て提督は一瞬、殺意を解けた。

その中に矢田はナイフを持つて呐喊する。

「おおおおおおおお！」

E組屈指のグラマラスで美しい女の子。それが彼女の3年E組に居た当時の評であつた。それは3年経た現在でもその美しさは変わらず、身体の線が出ない無骨な感すらある迷彩服を蠱惑的にする身体を手に入れていた。

そんな彼女も女の声とは思えないほどに大きな叫び声をあげる。それは勇気が自分に無いことの裏返しでもあつた。

「なら、己を定めよ」

一瞬であつた。

提督は矢田の間合いに詰め寄り、右手の棒を振るい最短距離で彼女を叩き落とした。彼女は地面に顔から突っ込んでいく。

「矢田さん！」

渚は叫ぶ。

「その“助ける”という物の為に多くの血を流すと決めたんだろう？」

提督は静かに告げた。その間にも麻酔弾は何度も提督の身体を捉えようとする。しかし狙撃手を除くとE組の残り人数が4人になつた今、提督にとつて麻酔弾を弾き落とす事は容易いことであつた。

(また感情の波が静かになつた)

提督の想定外と言つていい突然の精神の静謐に渚は困惑した。

「それならばその為に己を定めろ。死を覚悟し、その絶対的な物の前に定める感情を決めよ」

尚も沈着に話し続ける提督。

「俺たちは死にたくないぞ！ 生きて自分の夢を叶えるんだ！」

菅谷は叫ぶ。彼は芸術家志望である。

彼の夢に対する渴望は本物である。

「そうよ！私達、死ぬ訳に行かない！笑つて2年間を過ごし、自衛隊から出てみせる！」

原も大声を張り上げる。彼女の夢は良き妻になる事であつた。

二人とも確固たる夢があり、だがそれでも国に捧げる選択をした二人である。

「クソッ、弾切れか」

「弾倉を取り替えよう菅谷くん、キヤツ」

弾切れの隙を狙い、提督は原にペイント弾を当てて脱落させる。

「なら、笑え」

右手の木の棒はそのままに提督は左手にペイント弾を握りしめていた。

（早撃ち……）

訓練の序盤、後衛だった竹林と奥田を瞬間に撃ち抜いた提督の早撃ち術。それがここで発揮される。

だが次の瞬間、提督は度肝を抜かれる事になる。

「ようやく銃を使つてくれたね」

渚がまるで動物をあやすような声を出し、いつの間にか提督の至近距離に近づいていたからだ。

「！」

その手には今まで持つっていた銃とは違う新しい銃が握られていた。

(もう一つ銃を温存していた、だと…)

暗殺者の才能を持つ少年である事は事前の調査で十二分に知っていた。だが、ここまで圧倒的な有利をひつくり返され続けていたのにも関わらず、焦らず隙を伺う我慢強さ。

二刀流の棒が片手になり近距離の攻撃力が下がったこの瞬間を逃さずに接近する、戦闘センス。

そして絶対的な武器、スタッフグラナーがあるにも関わらずそれを捨てて特攻覚悟のゼロ距離射撃戦に持ち込む度胸の強さ。

そして、満面の笑み。

その全てが提督の心胆を寒からしめる物であつた。

「そうだ！ その笑みだ！」

そう言いながら提督は笑みを浮かべる。

：それは戦いの鬼たる本能からか。

：それとも別の心を覆い隠す為に笑っているのか。

「業！」

菅谷が業に向けて叫ぶ。この事態を想定してたのか。それを業に聞いた事と好機である事への本能的な叫びが入り混じつた物であつた。

「菅谷、弾を込めて。万が一諸達が外した時に備えるよ」

業は油断はしていなかつた。

だが、渚の暗殺の才能を信頼していた。

だから完全に提督の虚を衝く事が出来た今、勝利を疑つていなかつた。

：渚と提督、その周辺がスローモーションになつた様に感じた、と後に大淀は語つて
いる。

渚は下に構えていた銃を提督に向けて動かす。簡捷に構えたはずのその動きが、吐き
氣がする程緩慢に見えた。

それに対して提督は後ろにステップして距離を図りながら、右手の棒で渚の手をはた
き落とそうとしている。

秒単位の戦い。

—渚と提督、どちらが先にお互い仕留める事が出来るのか。
この場に居る殆ど全員の注目はそれに向けられていた。

先に戦鬪態勢に入つたのは渚であつた。

提督の胸の前50cmに銃口は構えられた。

そして引鉄に指を掛ける。

銃口から麻醉弾から放たれる。

提督は渚の手をはたき落とすのを諦め、棒の持て余している部分でガードしようとす
る。

その瞬間、大淀は叫んでいた。提督を心から案じ、愛した者しか出せない肚の底から
の叫び。

それと同時に大きな音が響く。

：全身全靈はかくありたし。激闘である戦闘訓練の決着が今、つこうとしていた。

「提督うううううううう！」

大淀は叫んでいた。

満腔一杯に出した声は林一帯に響き渡る。

「て、提督？」

菅谷は銃を構えながら困惑している。

「…やつぱり」

業は小さく呟く。

彼の頭脳にはやはりその影は過ぎつていた。

「大淀殿！一体、何をしているのでありますか!?」

あきつ丸は目を丸くし、守高は顔の前に右手で頭を抱えている。

大淀がここまで後先考えない行動に出るとは思つてなかつたのであろう。

「え、え？」

渚は目の前の状況と大淀の大声。二重の意味で何が起こったのか分からず困惑している。

「…大淀め、早まつたことを」

提督は渚の至近距離からの麻醉弾を防ぐ事に成功していた。だが、木の棒とペイント銃は地面に落としている。

狙撃手の狙撃が成功したのだ。その証拠に迷彩服の両肩は穴が開いていた。

(…ふう)

溜息をしながら千葉は天を仰いだ。

大きく損害を出しすぎてしまった。その悔悟と一仕事終えた安堵の溜息であった。

「やあつと当たつた」

速水は大淀の大声に動搖せずに、提督の肩を射抜けた。

彼女もまた、大仕事をやり終えた重圧から解放され、思わず独り言ちた。

「お前らの勝ちだ。これからもその笑み、忘れるなよ」

そう言つて、麻酔が回つたのか。

何百年生えていた大木が折れた様に、提督は大きな音を立てて倒れた。

「提督！」

大淀はまた叫び、一目散に彼の元へ向かう。

今度ばかりは守高もあきつ丸も大淀に追従する。

：これがE組と、提督宇田川信悟海将との苛烈な出会いであった。

この出会いはかつて世界を震撼させた超生物とE組の出会いよりは世界にとつて小さな物だつたのかもしれない。

だが、彼と彼が統率している艦娘とE組の生徒との出会いは世界の根底が揺れ動くきっかけを生み出し、そこで多くの悲しみを目撃していき、彼ら自身もまた誰かの悲しみとなつて行くのだが、今の彼らには知る由もなかつた。

第二話 「英雄なんかじゃない」

「敗北であった。

（俺の責任だ：）
フイリピンレイテ島沖での艦娘と深海棲艦の戦闘は艦娘達の敗北に終わった。

俺は五航戦の姉妹に肩を借りながら被害状況の確認をしていた。
自分自身もまた右脚を負傷し、自分の手で歩けなかつたのであつた。

「提督、大丈夫ですか？？」

「やつぱり寝てた方が良いんじゃない？ほら、帽子落ちそうだよ」

そう言つて彼女ら五航戦は口々に自分を心配する声をかける。

「馬鹿言え。ここで俺が倒れるのは無用な不安を煽る事になる」

そう話している間にも口の中には血の味が広がつていく。どうやら喉が傷ついている様だ。

全身の損傷状態は重篤。即病院のベッド行きが適当。

自分の中に入る冷静な第三者がこうやって呼びかけてくるのを俺は敢えて無視した。
「それより被害状況を教える。軽傷で済んだ艦も医者に診てもらえる様にきちんとトリ

アージを出来るように看護士を案内しろ」

そう言いながら口の中の血が邪魔になり、床に吐き出す。工廠の冷たいコンクリートの床は血を吸うこともなく、あたり一体が蘇芳色の血溜まりが出来る。

「提督、血が口許に」

「血を吐くなら吐くつて言つてよ、ほらタオル」

そう言つて瑞鶴はタオルを取り出して、俺の口を拭いて行く。血が残らないようにするためか、少し強めの力であつた。

「どう？ 痛くない？」

瑞鶴は心配そうに話しかけてくる。こういう事は不慣れなはずだろうが、彼女なりの優しさを感じる。

「大丈夫だ」

「ところで、提督」

おずおずと翔鶴が尋ねてきた。

「どうした」

その口ぶりから余りいい情報でない事が分かる。

「今、無線を聞いていたんですが、門前の道をテレビ局や新聞社が埋め尽くしていて、支援に来た医師たちが搭乗している車の行く手を阻んでいるみたいなんです」

翔鶴の片耳にある無線機は、鎮守府所属の陸上部隊が交信している無線を傍受していた。

工廠の中は傷を負つた艦娘達の呻き声で溢れきつている。そんな中でも翔鶴はきちんと重要な交信を聞き逃さなかつた。

「チツ、どつから嗅ぎつけやがつた」

こういう時に公共性を盾にする輩は質が悪い。ここに司令を初めて半年。彼らマスメディアの悪辣さは身に染みて分かつていた。

「取り敢えず動ける部隊は動かせ。中で傷を負っている艦娘達と今居る医者の数では面倒なんて見切れん。それなら医師たちをどうにかして入れさせた方が良い」

…まずいな。

意識が遠のいていく感覚がする。

外傷の応急処置はしたはずだが。

「分かりました。無線で岡林一尉には具申という形で指示しておきます」

篤実で生真面目だが、やや融通さに欠ける我らが警備隊長はこの事態の収集に苦慮しているだろう。

ただ階位は上とは言え、年下である俺の指示を嫌な顔せずに聞いてくれる。そう言った所で彼の働きは自分自身評価している。

「ああ、頼んだ」

そう言うと翔鶴は無線機に向かって声を向かわせる。
しばらくはここから動けないだろう。

そう思い大きく溜息をゆつくりと吐く。今度は口の中に血の味は広がらず、血溜まりを作ることは無かつた。

「瑞鶴、未帰還者は居ない。それは間違いないな」

の大混乱だ。正直な所、沈んだ娘の可能性は覚悟していた。

だが瑞鶴の返答は、

「うん、レイテに出征してた娘たちは全員回収が済んでて、全員沈んでいないつて
心から安堵させるものだつた。

瑞鶴はそう言い、手元の端末を手慣れた手つきで片手で操作する。

：前橋と高崎が高速で纏めてくれたのであろう。彼らは年末をもつてこの鎮守府から退職して防衛省O.B.に戻る。そんな中でも最後まで職務を全うしようとする姿勢にこの時ほどありがたいと思つた時は無かつた。

「ただ、やっぱり提督が指揮していた陸側の娘達は、正直予断を許さない娘ばかりだ
ね」

そう言つて端末のタッチパネルをスクロールさせていく。

熊野 最上 古鷹 笠 衣 青葉 千歳 蒼龍 飛龍 蒼龍 加賀 赤城 榛名 金剛 山城 扶桑 長門 重体

天龍

龍田

球磨

多摩

阿武隈

川内

那珂

:

端末のタツチパネル一杯に累々と艦娘の名前が連なっていく。

これで軽症者の名前がまだ出てこないというのがこの戦いの惨状を示していた。

「行ってきます」

「行つてくるね」

そう言つて鬼怒と夕張が五月雨や陽炎を連れ、工廠から出ようとしている。

「夕張も遠征に行くのか」

普段夕張は工廠で明石の補佐をしており、遠征の責務は殆ど負わせていなかつた。

「そうよ。遠征頑張つてた天龍さん達、みーんなドック行きすら出来ない重傷ですもん。

私も工廠でガラクタ弄つている場合じやないでしょ」

そう言つて片手で駆逐艦達に先に行くように促した。五月雨と陽炎は慌ただしく礼をしながら他の駆逐艦艦娘を先導して埠頭へ向かっていく。

「そうか。…すまないな」

…艦装の研究をした方が楽しいだろうに。

自分のしでかした敗北の大きさをここでも味わう事になるとは。

「…」

「…」

俺のその言葉を聞いた二人は突如無表情になつた。

「…なんだ？どうした？」

俺は一人の表情の変化に戸惑つた。

その言葉を聞き、二人は溜息をはく。

なんだ。一体何だつて言うんだ。

「そんなにボロボロになるまで戦つたのに、謝る必要なんて無いですよ」

夕張はそう言つて表情をちよつと困つたように笑う。

「そうそう。提督はそういう所、鈍感だよね〜」

鬼怒はそう言つて近づいてくる。

「いくら休め、って言つたつて休まないだろから。でも、全て終わつてからで良いから

休んでよ。これは鬼怒との約束」

そう言つて鬼怒は右手を差し出す。

鬼怒は人間の時から拳を握る挨拶をするのが好きだ。

：まだ提督という職務範囲がきつちりと決まっていなかつた頃。俺は吹雪型と天龍型、睦月型の一部、金剛型、大淀や明石達の人間の姿を知つて、彼女たちを艦娘としてなるまでを見守つたことがある。しかしその後は綾が人間を艦娘にする職務を担当する事になり、俺は一切艦娘が人間の時をこの目で見ることは無かつた。

だが、彼女鬼怒はその例外の一人だつた。

「翔鶴、通信は終わつたか」

と右側を見ると翔鶴は通信を終えていた。

左隣の瑞鶴も同様に端末の操作を終わらせていた。

「はい、終えています」

そう言つて彼女は背中で支えていた右肩を話し、右腰を持ち上げる体勢に切り替えた。

艦娘でいかに筋力があるとはいえども、自分の身長をゆうに超える俺の身体を持ち上げるのには負担が大きい。

「翔鶴に負担がかかる。なるべく早くしろよ」

左足に鈍痛が伝わる。

でも構う事は無い。彼女の笑顔は俺の傷より重い。

「はいはい。分かつてる」

右手と右手を突き合をする。

「うん、おつけー」

満足した様に鬼怒は離れる。

「全く。翔鶴姉にも負担かけたんだから、きちんと還ってきなさいよ」

瑞鶴はそう言って彼女なりに叱咤する。

「…えへへ」

鬼怒は照れくさそうに笑う。

「さて、そろそろ行かないと。五月雨ちゃん達も待つてただろうし」

夕張はそう言って、踵を返して埠頭に向かい出す。

「あ、待つてよ。あ、提督はくれぐれも無理しないでね」

そう言い残した二人は開け放しである工廠のドアを抜け、長い遠征の旅へ旅立つていった。

「忙しなかつたですね」

翔鶴は遠ざかっていく二人の背中を名残惜しそうの見ていた

「こんな重傷者の中で戦意を喪わずに遠征に行ってくれるんだ。全くありがたい事だ」鬼怒と夕張と入れ替わりで鎮守府常任の医師の一人、横野駿が慌ただしく工廠に小走りで入つてくる。彼の様子から見てまだ支援の医師は到着していない様だ。

「…まだ増援の医者は来ないのか」

少なくともフイリピンから逃げ帰つてここまで4日以上経過している。これ以上は傷を負わせたままだと艦娘とはいえども危険だぞ。

「門の中に入つたようです」

翔鶴は再び通信機に耳を充てる。

やつと蜘蛛の糸は垂れたか。大きく息を吐いた。また口に血が溢れる。

「ほらほら。また血が溢れてる」

そう言つて瑞鶴は再度タオルで自分の口許を拭く。

「…すまない」

「ここまでおんぶに抱っこにされてしまうのはやはり申し訳ない気がしてしまって。

「いーのいーの」

だが瑞鶴は意に介さない。

こうしている間にもまた意識が遠のいていく。だが、まだ休む時ではない。

「提督」

「大淀が工廠に入ってきた。少し浮かない顔をしている。

「大淀、なんだ」

「こんな緊急時に自分の携帯電話ではなく、わざわざ秘匿性の高い司令部に直接電話をかけて来られたあたり、あまりいい話ではないのは分かつていた。

その自分の言葉を聞いて、

「本当は横須賀宛に送りたかったんでしょうけど、皆さん居ないんでしようね」

大淀はそう小声で言つて、持っていたA4の紙を俺に渡そうとする。当然五航戦に肩を借りている俺は自分自身で取れない為、翔鶴が代わりに受け取ろうとする。その瞬間、

「翔鶴さん、中身は絶対見ないでください」

大淀が強く制止した。

「え…？」

困惑する翔鶴。反対側の瑞鶴も声に出さないが困惑している気配が読める。

「本来なら私だつて勝手には見ていけない物です。だから翔鶴さんも見ないで直接提督に見せてください」

「痛つ、提督手を動かすなら先に言つてください！」

「作戦概要ならこういう反応はしないだろう。まさか。

翔鶴が声を荒げる。どうやら動かした手が翔鶴の頭に当たってしまったようだ。

「あ、ああすまん」

そう謝りはしたが、俺の意識はちつぽけな白い紙の方に写っていた。

平成26年12月15日

⋮

刑務所女性収容者の内、海上女性職員適合者

一名該當有り

氏名 稔斗 改華

年齢 満25歳

罪科 嘴託殺人

量刑 懲役7年

一なんで。

視界が激しく揺れた。

幾重にも縛り付けた記憶の錠前が乱暴に開けられる音がした。

「…なんで」

なんでお前がそこに名前が書いてあるんだ。

「…提督、いかがなさいますか？」

大淀が対応策を聞いてきた。

「そうか。彼女にはただの女囚として映つてはいるんだよな。そういう意味での対応策を聞いてきてるんだよな。俺の過去を知つての発言ではないんだよな。提督、どうしたのですか？」

震えだした俺を不審に思う翔鶴の声。

身体を密着させているはずのその声が、遠く、遠く聞こえる。

俺は、俺は彼女を愛していた。

でも、俺は彼女を守つてやれなかつた。

彼女を暗く、狭い監獄に入れてしまつたのはこの俺だ。

俺は、俺は彼女の為に……！

……支える肩をいつの間にか手放していた。

「……提督さん!?」

五航戦の手から自分の身体がずり落ちていくのを感じた。

……前のめりに身体が倒れていく。

「提督!?」

「提督!?!」

全く受け身を取らずに固いコンクリートの上に顔から倒れ込んだ。

二人の声が被つてないなあ。

そんなどうでも良い事を気にしながら、俺は気を失つた。

目が覚めた。

俺の左目の前に、大きく白い制服の固まりが覆いかぶさつていた。

…あきつ丸の胸だ。

「…重い」

「大淀殿を心配させた罰です」

あきつ丸は大きな胸を押し付けながら、説教してくる。…サラシをした胸の感触がする。こいつの調子乗り属性は相変わらずだな。

「…でその大淀は何処に行つた？」

まだ酔気が残っているのか。身体は重く、顔の上の乳袋を払いのける程の力は戻つてない。

だが、動く右目の範囲内ではあきつ丸以外誰も居ない。

白い医務室の無機質な天井と何も変わらない外の風景が広がつていた。

「大淀殿は守高殿とE組の皆さんに挨拶周りに」

相変わらずマメな事だ。

俺の行動に相当感情を揺り動かされた後なのにコミュニケーションの機に敏などこ

ろ、守高と息ピツタリなんだよな。

「流石、政治家の孫」

宮崎北部が企業城下町で有り続けるのも大淀の祖父、夏田仁三郎の尽力の結果である。その祖父が見出した才覚は艦娘になつても健在、という事か。

「立ち直りも一流であります」

あきつ丸は偉そうに右人差し指を回している。

「なんでお前が誇らしげなんだよ」

「それはどうでも良いして」

「どうでも良くねえよ！」というツッコミは心の中にしまつておく。こいつと話していると飽きることは無い。

「なんでE組と言葉を交わしたんです？」

そう言いながら、自分の胸の上から俺の顔を覗き込んでくるあきつ丸。今までのおどけたような言葉遣いは消え、ナイフの様に自分の胸元に言葉を突きつけてくる。

「…ふん。武器を交わしながらじやなきや、伝わらない事もあるさ」

：答えになつてる様でなつていない。だが、自分の中の感情を言葉にするならこうであつた。その言葉に偽りはなかつた。：だが、

「本当の事言つてませんよね？」

あきつ丸は目を細めながら追求を辞めなかつた。

「…」

何故だ。俺の言葉は何故彼女には本当と映つていないのか。何にとつて俺の本当は彼女の本当足り得るのか。

：自分の顔は打つ手がない当惑がにじみ出てたと思う。あきつ丸はそんな俺の顔を見て、

「そんなのだから、提督殿は守高殿に畠の上では勝てないんですよ
大きな溜息をついて、そのナイフを下ろした。

「人には向き不向きがあるだろうが」

俺は腕つ節で、あいつは口で國に、綾はその両方で貢献する。そうやつてこの“防衛省海上女性職員部”は回してきたはずだ。今更そんな役割を変えるつもりは無い。
「はあ～」

そう聞いてまた溜息をつかれる。今度はかなり大きい溜息だつた。

「なんだよ、また」

こいつの俺に対する敬意の払わなさにはもう慣れたつもりだつた。まあこんなにも外行きの時はちゃんとした応対するから、まあこういうのもあきつ丸の味なんだろうけどな。

「本当に勿体無いですねえ。提督は英傑になれる人物だと思つてたのに：」

だが、時々見当違ひな俺に対する願望を胸に秘めている。

「俺は英雄なんかじゃないよ」

「提督、」

尚も言い募ろうとするあきつ丸。だが、俺に対する幻想ははつきりと否定しなければならない。

「俺は英雄にはならない」

その言葉を聞いた彼女の表情は、己の迂闊さを呪う様に天を仰いでいた。

悪いなあきつ丸。これが俺の生き方なんだ。

：：ところで胸をいい加減にどかしてくれ。

その言葉を飲み込みながら、代わり映えしない外の風景は春の終わりを告げていた。

乳白色の天井は無機質な表情をしたまま俺の前に立ちはだつて。戦いの疲れは自分の体を覆い、俺はソファーに身体を沈めながら天井を眺める。

この天井を取つ払えば、きれいな青空が見えるのになあ。そうひとり、天井に手を伸ばす。大小の切り傷擦り傷が痛む。だが、他の気絶させられた皆に比べればかすり傷もいいところだった。

「何か見えるんですか？」

海上自衛隊の黒い制服を着た眼鏡の女性が自分に話しかけてきた。海曹の尉官である彼女は年齢が同じくらいに見える。

「この天井を取つ払えれば青い空が出来るのになあと思つてたところ。ところであんたは？」

なんとなく彼女にならフランクに話しかけても良さそうだ。凜とした見た目に気安さが共存している見た目。その見た目に好感が持てる。

「私、私はですね、」

少しばにかんで、話に勿体つけてくる。

もしかして、彼女は艦娘なのだろうか。

(あの娘とはまた違つた眼鏡の娘だな)

「何か言つたか?」

そう言つて一人の壮年の男性が物陰からぬつと出てきた。

彼女の後ろ、この屋内自販機コーナーの入り口にもう一人男が居たのに俺は気づいていなかつた。

「おわつ」

驚きで一瞬声がうわずつてしまう。

「はつはつはつ、お前みたいな奴がそんな声出すとはな。後ろに控えてたかいがあつ

たつて奴だな』

そう言つてあまり大柄ではない海将は潰刺とした声を出す。その一種の馴れ馴れしさは鷹岡を思い出す。

「…何か用?」

彼の狂氣を知つてゐる身としては、その他人の懷に入るフレンドリーサは自らの気を許すどころか、警戒心を煽るだけであつた。

「そう身構なくて良いぞ」

目を細めながら、屈んで自分との視線を合わしてくる。その顔は端正、とまでは行かないが、その武骨ながら親しみのある顔はむしろあの『提督』の顔によく似合う。正直顔を反対にした方がいいんじゃないか?

「…何かしょーもない事、考へてるだろ」

なんだこの人工スパーか。

「ん、あの提督とあんたの顔、逆の方が似合つてるんじやないかって思つてただけ」

：別に隠す事でも無いので、そのまま偽り無く話す。そんな俺の言葉に山口海将は突然とした顔になつた。

「な、なんて事言うんです。提督にも山口海将補にも失礼です！」

そうやつて彼女は顔を赤らめて、怒つてゐる。その表情もかなり可愛い。

「ははは、まあ確かにあいつの顔の端正さは本当に俺には欲しい物だわな」

そんな俺の戯言に山口海将補は笑つて受け流す。その態度には鷹岡と明らかに違うものがあった。

「山口海将補！」

そんな鷹揚な彼の態度を咎める様に、と彼女はメッセージを発している。

「良いじやねえか。そもそもあいつは自分の奇麗な顔を無碍に扱いすぎだ」
だが彼女の苦情、山口海将補はそれをも受け流す。その行動には提督に対する本当の羨望が含まれているのが分かった。

「おつと自己紹介が遅くなつた。俺は防衛省海上自衛隊海上女性職員部渉外担当。要するに艦娘達の裏方仕事をしている山口守高だ。彼女は艦娘、提督の筆頭秘書艦の大淀だ」

そう言つて自己紹介する山口海将補。眼鏡の女の人はやはり艦娘だつたか。

「ここにちは、軽巡洋艦大淀です。どうぞ、よろしくお願ひいたします：

そう言つて彼女は深々とお辞儀をした。

「いや、そんなに畏まらなくて良いよ」

彼女の黒髪の頭に向けて、声をかける。これから色々とお世話になる人だ。年も同じくらいなのに慄怖すぎる礼は正直得意ではなかつた。

「いやいや、これからお世話をなる人に礼は失してはいけませんよ」

そう言つて礼したまま、左手を山口海将の方に向けて、ちよこちよこと手を招き始めた。

「まかり間違つてもこの人みたいに礼儀知らずの粗野な人には将来なりたくないですか
らね」

そう言つて冗談交じりで嫌味を言い始める大淀さん。

「なんだなんだ？ 鎮守府一の貢献者に向かつて、その言い草はないだろ？」

そんな彼女の当てこすりに、ニヤケ顔で返答する山口海将補。その本気にしていない
反応には彼女に対しての全面の信頼が伺える。

そんな二人のやり取りを、天井を眺めていたように、ぼんやりと眺めていた。

「山口海将補！ 大淀海曹長！ いらっしゃいますかー？」

とその時、外の廊下から女性の声が聞こえた。どことなく呼び方にぎこちなさを感じ
る。：そうか。ここは陸自の施設だつたな、

「はい！」に

大淀さんの澄んだ声がほの暗い施設に響きわたる。

「宇田川海将が目を覚ました！」

「分かった、今向かう！」

大きな声で返事を返す山口海将補。

その声の通りの良さは烏間先生の声を思い出した。

「スマン、もうちよつと話したかつたけど、またな」

そう言つてキビキビと立ち上がり、走るのかと思うほどのスピードで女の声の方へと向かう山口海将補と大淀さん。

そのまま二人は立ち去つて行くのか、と思つていた次の瞬間、彼女は振り返つた。

「鎮守府で待つてます！」

綺麗な黒髪をなびかせながら、彼女はそう言い残した。

そう言い残し去つた待合室には、自分一人だけが残つた。

：予想以上にユーモアのある人たちだつた。

そう思つてまた天井を見上げる。乳白色の天井は変わることなく目の前にあり続けた。

バスの走行音が沈黙の車内を響き渡る。

7月1日。

前期訓練を終えた僕たちは、秘密裏に富士の訓練場を出発した。E組を載せたマイクロバスは一般企業の研修の出入りに偽装され、海上女性隊員駐屯地、いわゆる鎮守府を目指していた。

：3年前の殺せんせー関連で報道陣に囲まれた事は未だに記憶にこびりついて離れない、が今回は入念な偽装もあり、そう言つた事は無かつた。そういうえば入営の時も全く報道陣が来ていなかつたな。

「うちらの事は新聞でもテレビでも取り上げられてなかつたし、本格的にあたしたちは居ないもの、として扱われるんだろうなあ」

中村さんが窓の外を見ながら、やれやれと言つた風情で語つてゐる。

「親にも口止め料払つたんだつけ？」

速水さんがいつもの様に隣に居る千葉くんに話しかける。

「殺せんせー殺した時よりはお金は支払われてないとは言つても、かなりの額を貰つたらしいぞ、うちの親」

千葉くんは呆れたような口調で言う。

千葉くんの坊主姿は未だに慣れない。自己主張の強い瞳はいつ見てもぎょっとさせられる。

「そこまでして、戦力が欲しいのかあ…」

杉野がそう呟いて、みんながげつそりした。

この3ヶ月は本当にきつかつた。

暗殺者と兵士は違う。

この3ヶ月でありありと思い知らされた。

容赦ない“指導”は鷹岡よりは強圧的ではなかつたが、自分自身E組の1年とは全く違う密度を持つて、僕たちの前に立ちはだかつた。

かつて殺せんせーは言つた。

(理不尽な事世の中にあるのは当たり前、それを恨んだり諦めたりする暇があつたら、楽しんで理不尽と戦おう)

…それは僕の脳細胞の隅の隅まで刻み込まれた、鮮烈な1年の教えの一つだつた。

「理不尽を楽しもうかあ…」

僕は声を漏らす。

「…悩んでる様ね」

一番前の添乗員専用の席に座つていた。美しい女性が話しかけてきた。

髪は自衛官に相応しいボブカットの黒髪で幹部自衛官の制服である白のワイシャツでスボンを着用した第三種夏制服を着込んでいた。

折り目正しいその格好はどこにもだらし無さがなかつた。

「ええ…まあ」

戦闘訓練の時の提督とは違い、渡された資料でこの女性が誰であるか事前に分かつている。

伊代野綾海将補。

防衛省海上女性職員部は1人の部長と脇を固める3人の幹部自衛官が運用されている。

宇田川信悟。

山口守高。

そしてこの伊代野綾。

宇田川海将補が艦娘の管理運用、山口守高は管理運営に必要な資金集めを行っている海上女性部。そんな部の中で彼女が担当しているのは艦娘の採用だ。

艦娘というのは、ただ女の子を適当にスカウトするだけではないらしい。基となる艦と名前が近かつたり、艦の名前の元になつた土地の近くに住んでいたり、先祖の1人がその艦に乗つていた（これは稀らしいけど）りするなど色々な条件を満たした女性のみが艦娘になれるのだそうだ。

：当然、手間暇かけて育ててきた人一人を国のためにとは言え、死の危険と隣合わせにある艦娘にするには必ず抵抗を持つ家族が出て来る。

その為に女性自衛官でも破天荒足り得るスピード昇進（その昇進は深海棲艦で消耗した海上自衛官の穴埋めという要素も多分にあつたらしいが）を果たし、防衛省ナンバー1ワンの容貌と彼女自身の剣道5段腕っぷしの腕前、そして宇田川海将補と同期であり親

しい間柄であつたことが彼女を今の地位に至らしめる理由であり、その持つてゐるスキルをフルに活用する事で艦娘達の保護者を説得せしめる大きな武器なのであつた。

「余り私から言おうとしても上から目線になるわ。防衛省として、また君たちを利用するという形にはなつたけど、それについて言つてしまふと逆に不誠実になつてしまふから」

そう言つて目を細める。

それは彼女の持ち味なんだろう。

その真摯さに少し、嬉しさを覚えた。

「…でも私から一言言えるなら、自衛隊に入るつてそういう事なのよ。理不尽も可能性も全て飲み込んでいる。そんな組織なのよ」

そう言つて首を横に振る。

「ただ、入営以外の決まつた区切りの時にきちんと自分達が関わるようにしてるのは、あなた達を悪く思つてない事は感じてほしいわね」

そう彼女は居丈高にもならず、かといつて柔らかくも言わなかつた。
憐憫の情こそ見えたが、それ以上に一線引くような感じだつた。

「…」

いよいよもつて鳥間さんみたいな人だなあ。

僕ははるか南方タイ王国に赴任している、かつての恩師の一人を脳裏に浮かべていた。みんなもそうであつただろう。

「ところで左手薬指のところに指輪をはめてるけど、結婚してるの？」
カルマが話題を変えたかったのか、その左手薬指にあるシンプルな指輪に言及してきた。

確かにこんなキレイな人だつたら、早くに結婚もするんだろうな……とも思つたし、それなりに遊ぶ事もしないのかなとも思つた。

「ああ、これ……」

伊代野海将補の顔が綻んだ。

今までの一線を越えられた気がする。

「守高から貰つたのよ。お前の50年これで買い取れるか？ つて言われてね」

今まで職業としての自衛官、伊代野綾を見ていたが、ここで人間、伊代野綾を見れた。

それは完全に惚氣であり、E組の下世話なみんなの格好の標的になる物だつた。

「おやおや、若くして海将補になつた人にしては、脇が甘いですねあ」

中村さんがいつの間にか伊代野海将補に接近していた。

こういう時の弄り倒しは彼女の専売特許だ。

直属の上司になる人物だろうが構わず、弄りに入る。・

「良いでしよう。私も守高と婚約するまでには色々とありました。その話を心行くまでじっくりと話しますよう」

正々堂々と打つて出る伊代野海将補。

えーっとざわめくE組一同。

軍隊らしからぬ、そう先生と生徒の様なおしゃべりだ。

まさか伊代野海将補があつさり一線を越えてくるとは思わなかつたなあ。

そう思いながらバスは神奈川県に差し掛かろうとしていた。

海上女性職員集合施設浦賀本所、世間一般からは鎮守府と呼ばれているその場所は京浜急行の浦賀駅から近い工場跡地にある。

高いフェンスと艦娘が出撃して入江の部分が見えないように完全に覆いかぶさつて
いる建造物の建て方は防諜を意識してのものらしい。

僕たちも横須賀中央駅で一度バスから降り、私服で3人一組になつて時間をずらして
行動していき最終的に合流するという手段で鎮守府に入つていくほどだ。

「まるでスペイだね」

一緒になつた倉橋さんがそうつぶやく程には鎮守府の情報管理は徹底されていた。

そう、ここ鎮守府には徹底された秘密主義を貫いている。

僕達もこれから入る艦娘の情報は提督との軍事訓練後に配られたが、一時だけ借りら

れるタブレット端末に入つての情報をメモも出来ずに記憶だけで百人以上の艦娘を覚えるというかなり難易度の高い作業をやらされて閉口することもあつた。

鎮守府に配属された後も寮は鎮守府の土地の中で、単独で外出はほぼほぼ認められないであろうとも言われている。それほどまでに艦娘という存在が外に出る事を極端に恐れているのだ。それは、反艦娘、親深海棲艦を掲げる団体が最近の出没する事や仮想敵国である他国に情報を把握させられる事を恐れているというのが、教官の解説であつた。確かに、反艦娘団体の勢いはニュースのヘッドラインで取り上げられる程の旭日の勢いであつた事を僕は覚えている。

提督以外の二人の職員と大淀という艦娘は少なくとも僕らを歓迎している事はカルマの証言で分かつた。提督が戦闘訓練で発露した物が全てであるとは思つてなかつたがやはり少し警戒するべきものであつた。

…やらされる事も僕らが積んできた経験にマッチしていた。

戦闘訓練を行い、有事には深海棲艦側についた占領された洋上の大陸・島を奪い返す、占領地の維持をする事と艦娘に関連する所で彼女らの勉強面のサポートをする事。それが僕たちに与えられたミッションであつた。

それ自体は別に不審な事では無い。暗殺者（アサシン）としての適正としての体力、みんな大学も最低でもM A R C H を越す実力の大学を受かった人が大半である。戦闘も

こなせる家庭教師とするなら十二分に実力を發揮出来るであろう。僕たちを戦場へと誘うことで艦娘に対する情報も外へ漏らしづらくなるだろう。

ただそこまでしてまで鎮守府が僕たちを欲しがつた理由がやはり裏があると思える。そもそもそういう事態になつても先生を雇う方が僕たちを無理矢理にでも引っ張り出すより適任であると思うし、それこそ教員免許を持つてる自衛官である鳥間先生は適任だつたであろう。

：その落ち着かない、消化不良みたいな費用対効果の薄さが僕らを取り巻いてる陰謀であろう。

落ち着いたら、今後の方針を決めたいな。

そう僕は思つた。

：全員集まつたのは日も傾いてきた時であつた。

「ようこそ、海上女性職員集合施設浦賀本所へ！私が第二秘書艦兼女性職員長を務める大和です」

僕より30cm近くも身長が高く、カルマと同じくらいで、赤色を基調としたスカートと白の胸当てのような衣装が特徴的な艦娘である。

こんな大きな女の人が存在したのか。

そういう感想が出てくるほど身長が大きい。

隣に居る霧島さんも長門さんも身長が大きい。隣りにいる平均的な身長であるあきつ丸さんが小さく見えるほどだ。

「これより一年間、私達の下で、戦力を奮つてもらう事をありがたく思います」大和さんは凛とした雰囲気をまとわせてそう言つた。

「おそらくそれぞれに言いたいこともあるでしょう。それでもそれを噛み締めてここまで来てくださったのは私達にとつてとても僥倖でした」

「3ヶ月で学んだことと地球破壊生物との学びを私達の施設で活かして下さい」

そう短くオーソドックスに「以上です」と纏め、大和さんは深々とお辞儀をした。

「次は提督からの訓示です」

隣に居る長門さんが肅々と場を進めていく。

末席に控えていた提督が前へと出てくる。

提督の身長は前述の3人より身長が大きい。190cmは優に超える。

(僕たちあんな人と戦闘訓練してたんだなあ)

「どういう事で紹介を受けたと思うが私は宇田川信悟海将である」

淡々とした言い方、という印象であった。

「我々海上女性職員部の力になる様、修練と補助教師としての業務に邁進してもらいた

い」

大和さんと同じ様にオーソドックスに簡潔な挨拶だった。

「諸君の健闘を祈る、以上！…と終わると思つたか？」

!?

いきなり雰囲気が変わった。

「よーし、E組の皆よ。良くぞここに来ててくれた」

その雰囲気の変わり方に驚く僕らを尻目に言葉を続ける提督。

「本当だつたら教師役だけに収めたかつたんだけどな。いかんせん内閣府がうるさくてな。軍の消耗率はーとか言い始めて本当煩かくてな。この様に折れざるを得なかつたんだ」

そう言い切つた。

「という事は…俺たちは前線に出なくて良い…？」

誰が発したであろう。多分岡島くんだつたと思う。

その言葉を聞くとみんなの緊張が一気に緩むのを感じた。

「おーっと、氣を緩めるのはまだ早いぞ」

提督の一言でまた気持ちが締め直す様に引き締まつた声を出す。

「そつは言つても軍事教練と若い艦達の教育はやつてもらうからな。明日からそのつもりで居るように」

そう締めた。

「はい!!!」
その声は希望であり、僕たちの前の一本道であつた。

そう応えて、敬礼をした。
悲劇の幕は上がつた。

第三話 「ダン・クイゼンベリー」

なんだ。まだ居たのか。

え？ 話を聞きたい？ なら先に言つてくれ。

…何度も言つてる？

すまんすまん。これに夢中だつた。

……

また言いにくい事を聞いてくるな。

いや、確かに良い子達だつた。しかし、今の荒んだ鎮守府を作つたのもまた彼らが原因だからな。

日向さんこそ言いにくい事を言う？

…まあな。そういう性分なのかもしけん。

死も生も表裏一体。

あいつらが歩んだ功も鏡の様なのかもしれないな…。

…手が動いてないが大丈夫か？ 私は一首できただぞ。

…聞かせてくれだと？ 仕方ないな。

先に行き

後に続くは

我が身かな

潮（うしお）の刹那よ

我が永遠

：どうだ？

日向さんらしい？

そうか。これと私達の首でいいつらに少しでも手向け出来るだろう。

え？ そんな後ろ向きな事を言うな？ 自分達は生きて彼らの功績を伝えよう？
：そうなれば一番良いんだがな。

（どうしてこうなつた…）

潮田渚は今まで無かつた事態に困惑していた。

目の前にはこれから自分らが入る部屋がある。

その傍らには耳まで赤くなつた茅野が自分の左腕に顔を埋めていた。

右隣にいる千葉くんと速水さん、左隣に居る杉野と神崎さんが各自の表情をしてい
る。

千葉くんは囁き立てるような素振り。

速水さんはそれを咎めながら、僕たちを心配するような顔。

杉野は苦笑い。

神崎さんは何か安心したような顔であった。

「ちよつ、ちよつと茅野」

完全にどうすれば良いのか分からず、とりあえず離れてほしかつたので声を掛けた。

「…カエデって呼んで」

だが、茅野は離れない。

「…へ？」

言つてゐ事が分からず、自分の眼が忙しなく動いたのが分かる。

「呼んで。そうしたら離れる」

か、母さん」と、父さん。

人間追い詰められたら何にでもすがると言うが、まさか戦闘にもなつてないのに自分の親を心の中で祈るとは思つてもみなかつた。

なんでこうなつたのか、30分前まで時計の針を巻き戻さなければいけない。

「という事で君たちにはこの防衛省海上女性職員集合施設の一員になる」

提督は明るい口調だったが、なにかのケリを付けるような口調で言つた。

「住居は将来的に艦娘の住む場所を充てる。何、心配するな、今の艦娘が2倍以上にならない限り、退去とかはありえん」

自分たちの表情の含意を察した提督が一言付け加えた。一度定住を決めたらまた場所を変えるのは心理的に大きな煩わしさを感じさせる物である。

自衛隊というのは転勤の数々であるとは聞いたが、少なくともそういう状況に置かれたくなかったので僕は少しだけほつとした。

「で、基本は一人部屋なんだが、カツプル向けの二人部屋もあるから、部屋は希望者優先な」

と提督は言つた。

「…良いんですか軍隊で」

片岡さんが口を開く。

規律が厳しい軍隊では部隊内の恋愛はご法度だと思つていたけど…。

「神聖隊の例があるしな」

と素つ気なく言つた。

…この僕たちに対する甘さはなんだろう。

徵兵されたという憐憫の情以外の何かを感じる。

「まあテーバイの神聖隊（ヒエロス・ロコス）は分かります」

世界史に詳しい磯貝くんが話に合わせる。

当惑が未だに拭えていないという調子だつた。

「…」

その言葉に提督は顔を渋くさせる、端正な顔が意図的に崩したような顔は醜悪に写つた。

その渋面を数秒で普通の顔に戻し、左右を見た。

「今更仕方ないでしよう。どうせ隠しても後でバレるだけですよ」

霧島さんがきつぱり言い切つた。

「人の口に戸は立てられませんよ。お上にもバレてるんですからパーツと行くであります」

あきつ丸さんが両手を上げてジエスチャ―をした。

「そうか…」

提督は一瞬観念したように目をつぶつた。

「簡単に言うとな。とある事情でこいつら艦娘と俺は大半と肉体関係になつた」

「…………は？」

一同が驚きで眼を見開く。

吹き出している人さえ居た。

そんな反応を見て、うーんと唸る提督。

「不徳の致す所だ…。ぶつちやけ俺が流されなければこんな事態にはならなかつたんだがな…」

提督はそう言つて首を振つた。

「まあ、しようがないですよ。ああしないと收まりが付きませんでしたし…」

大和さんが助け船を出す。

「ま、まあ嫁がこう言うし、話はここまでで：聞きたいことは後で俺に聞いてくれと言うことで…」

と、豪快に話をぶつ切りにした。

ここまで慌てる人だと思わなかつた。

それだけ痛い所だつたのかもしれない。

嫁発言もまあ気になるが、ここは提督の肩を持つておく事にする。

「まあ、そういう事で、提督の下半身事情は後で各自聞いてくれ」

「ここ」に来て長門さんが咳払いしながら口を開いた。

少し顔を赤らめている。

(この人も提督に迫つたりしたんだろうか…)

みんなが意を同じくしたのを感じる。

「な、何だその顔は…。この長門、提督に天地神明手を出したりしない！」

(出したんだな)

(出したのよね)

「出したんでしょ。顔に書いてるよ」

みんなが表情だけの会話だったが、カルマが言葉で追い打ちをかける。

「ぐぬぬぬぬぬぬ…」

(あ、顔が真っ赤だ)

長門さんの声は震えていた。

「長門、口ではこいつらに敵わないぞ」

提督が長門の肩にポンと肩を置く。

「という訳で」

どういう訳なんだろうと思いつつ、猫が暴れた後の様な状態のこの場を無理やり収めた。

「どうするんだ」

それは一種の熱狂を冷ますような冷却剤だった。

「僕たちは二人部屋を選びます」

気まずい沈黙を嫌い、いの一一番に答えたのは我らがリーダー磯貝くんと片岡さんだ。

おうつ！とE組その他一同は言うが表情は変わらなかつた。

「なら、こつちに来い。一人部屋には書いてもらう書類がある」

長門さんが平然とした顔を取り戻し、答えた。

「いいだろ？なつ」

磯貝くんは片岡さんの方を向いて言つた。

「私が駄目だと言うとでも？」

それがこの二人の答えであり、全てだつた。

「よし、磯貝が志望するなら俺たちも行くか」

磯貝くんの親友である前原くんが続いた。傍らに岡野さんが居る。

「別に良いけど、艦娘達にナンパするとかはやめてよね」

軟派な前原くんの悪癖を心配する発言が岡野さんから漏れる。

この二人の3年はきっとE組での1年と代わり映えがしなかつたであろう。

「千葉！」

速水さんが千葉くんを呼んだ。

「よし行こう」

二人並んで歩いて行く。

一緒に隣同士で歩んでいく。ここまで訓練で何かを掴んだのか。

「あいつらはやるとか考えてなさそうなんだなー。なんというか自分達の目標の最適化の為に同居する感じ」

菅谷くんがそう言い、周囲の人々が頷く。

ただ射撃を二人で高め合う。彼らの暗殺はまだ続いている様に思えた。

そんな輪の内から外れた所に杉野と神崎さんは居た。

「神崎さん、一緒に住もう！」

「ええっ！」

技巧派の投手らしくない直球勝負で彼女の心を突き動かしていた。

「好きの前にゴメン。でもこの機会を逃しちゃうとしばらく告白も出来ないと思えてきて」

そう顔を真っ赤にして涙すら眼から溢れ出る。

E組卒業してから3年。彼女を想い、甲子園の栄冠まで背負った杉野は今まで告白を出来なかつた鬱憤を晴らしていた。

「え、え…」

顔を真っ赤にさせしどろもどろになる神崎さん。

こんな神崎さんを見ることは貴重である。

「だから大好きだ！一緒に住んでくれ！神崎さん、いや、有希子！」

ひたすらに希うように、自分の胸の内をさらけ出す杉野。

ただひたすらに一途である。神崎さんの事をある意味では一切考えてない。

「…………」

神崎さんは無言になつた。うろたえて真つ赤であつた表情もいつもの様なおしとやかな表情に戻つた。

「…はい」

「やつたあ！」

杉野が喜びの声を上げた。

杉野の4年間の想いが結実した瞬間であつた。

「おう！ 杉野！ 甲子園に出たのにまだ告白してなかつたのか！」

提督が杉野に向けて声を掛けた。

その低く男らしい声は顔と不釣り合いながらも独特の美しさがあつた。

「はい！ 本当感無量です！」

なんで杉野の秘めた思いまで知つてゐるのか。ビッチ先生にでも聞いたのであろうか。

「お前と野球の話をしたいと思つてたぞ」

そう言いながら提督はオーバースローのモーションを軽くした。

指が完全にある右手での力感のあるモーションだつた。

「本当ですか!?」

そう言つて涙の後だから眼を光らせた。

さつきから杉野の顔色が目まぐるしく変わつてゐる。

「なんか…。なんか杉野がさつきから楽しそうだな…」

寺坂君が呆れたような感心したような口調で話している。

「あはは…」

僕は苦笑いするしかなかつた。

とその瞬間。片手をギュッと掴まれた。

「…?」

何事かと思ひ横を向く。

俯いた茅野が居た。

「どうしたの…?」

何故茅野が僕の片手を掴んでいるのか。

何故彼女が俯いたままなのか全く見当がつかなかつた。

「私…」

くぐもつた声で良く聞こえない。

「…?」

僕は意図が読めずに困惑していた。

そんな僕らを目ざとく、中村さんとカルマが近づいてきた。

「お～う王子様。ちょっとお姫様が求めてきてますぜ」

「おうおう渚く～ん。面白い事してるじゃないの！」

この一人に悪魔の耳が見える。

そして王子様、お姫様という呼び名、まさか…。

「か、カルマ呼び名が昔に戻つてるよ!?」

「そんな事どうでもいいっしょ。それより茅野ちゃんが何か言いたがつてるよ、聞いて

あげなきや」

と言いつつもその悪魔の耳は消えない。

僕の予感は予知へと変わっていく。

とその時、俯いていた茅野の顔を真っ赤にさせながら僕の顔を直視した。

「な、渚と一緒に住みたいの！」

そう茅野は大きく言い切ったのである。

「ええ～!？」

と、今に至るのであつた。

⋮あの後大変だつたなあ。

クラス殆どの人から囁き立てられ、提督と艦娘さん達には祝福され、後に退けなくな
るし、再度恥ずかしさが勇気より上回ったのか茅野は僕の腕から離れなくなるし。

解散。明日まで自由行動、となつた。

というわけであつた。

「でも今まで気づいてなかつたんだな。

杉野と同じ、場合によつては相手にすがり付くような烈しい恋心に。

あの時のバレンタインチョコもその恋心を伏せて渡したのであろうか。

あれから3年。世界が変わり、色んな物が変わり、人は自らの種の存亡を求め戦いを
続けても、変わらない変わるはずのない心。

そう思つたら自分が何をすれば良いのか、自ずと見えてきた。

「…とりあえず、中入ろっか」

それは部屋の中でしか出来ない事であつた。

「…うん」

そう茅野は返答したのであつた。

LDK部屋の中は殺風景な程何もなかつた。

辛うじて今日の寝床であるベッドがシーツの折り目正しく置いてあつた。

「…」

「…渚？…ンツ！？」

17

「声にならない叫びを上げる茅野。

その慌てをそのまま利用してベッドに押し倒す。

顔は自然と離れるが今度は自分の両手に組み敷かれる茅野が居た。

「な、諸…?」

怯えるような表情で僕を見つめる茅野。

「カエデ」

僕はそんな茅野を出来るだけ優しく声をかける。

「ありがとう」

茅野の顔が怯えの色が消えた。

「今まで気づかないでゴメン」

段々と顔が驚愕、感動と忙しく動いていくのが分かる。

そんな表情にただ自分の内なる衝動をただひたすらにぶつけて行く。

「これから2年間、いやこれから長い間になるかも知れない」

そう言つて、茅野の第三種夏制服を脱がしていく。

「でも、この一夜は忘れない物にさせる」

僕らは暗殺者。

今日の標的は恋人。

「はうっ…」

恥ずかしさと歓喜で顔を真赤に染め、蛇に絡まつた動物の様に身動き一つしない。
それをもう一度唇で魅了しながら、一つの木彫りの彫刻をゆっくり削るように茅野の服を脱がしていくのであつた。

「あーっ」

少し肩を傾け、あくびをする。

昨日の疲れが取れない。

「おやおや女みたいな外見と思つたらなかなかヤるもので」

「ゆうべはおたのしみでしたね」

そんな僕を中村さんとカルマがいじつてくる。

ここは鎮守府の一角である大会議室の一つであるA会議室である。

僕たちはその階段型の会議室で艦娘の到来を待ち受けていた。

今日は軽巡洋艦と駆逐艦との顔合わせであった。軽巡洋艦娘と駆逐艦娘は航空戦艦

の伊勢さんと日向さん、扶桑さん、山城さんが連れてくるそうだ。

これを経て、正式に彼女らとの「教師」と「生徒」の生活が始まる。

「まさか、渚が童貞脱出するとはなー」

寺坂くんがそこに加わってくる。

僕は昨日しでかした自分自身の大きな行為に自分をただただ穴に入つて恥ずかしさから回避したかつた。でも男と言われて悪い気分はしないのも確かであった。
…そして後悔していないのも。

「そーいう寺坂は童貞卒業したのかよ？」

カルマが絡んできた寺坂くんにもちよつかいを出していく。

「そうよ。じやいあんとぶたごりらだからどうせモテナイんでしょ」

わかばパークの時のあだ名、懐かしい…。

「ば、馬鹿野郎、俺だつてそのくらい…」

と狼狽えながら、寺坂くんはいつもの寺坂組の方に視線を移していた。その中には紅一点である狭間さんが居た。彼女の眼が一瞬ギョッと見開き、急にモジモジし始めた。見たことのない顔であつた。

「「え、」」

僕を含め、カルマと中村さんも驚愕の声を出した。

その声はその他の同棲していた人たちを弄つていた他のE組の皆さんまで届いた。みんなの興味は今、寺坂くんに向けられた。

(平和だなあ…)

絶滅戦争をやつてるのは思えないし、自衛隊に入つてるとも思えない。

上官が一切居ないこの広い会議室でE組達は気が緩み切つていた。

兵として前線が無いと知つたからであろうか。

とその時、

兵隊ラッパの音が鳴り響いた。

「な、なんだ!?

三村くんが叫ぶ。

そのラッパの音の出どころは通常の人では立てるはずではない、錐台型に切り取られた窓の切り込みである。

だが、僕たちは知識にはある知識が過ぎつていた。

〔妖精か…〕

鎮守府には提督と艦娘以外に人間は医者とカウンセラーと先生以外居ない。

艦娘を保守点検するのは人間では無いのだ。

：一年半前、艦娘と一緒に発見された物がある。

「どうやら…水雷戦隊のお出ましみたいだね」

カルマが冷静に周りを見回して一言言つた。

妖精。

妖精には装備妖精と工廠妖精と庶務を司る庶務部隊。

今音楽を鳴らしてるのは庶務妖精の中で音楽隊担当であろう。

いつの間にか、会議室外周に一周水雷戦隊が一帯を包囲していた。

僕らから見て右側の会議室の入り口から伊勢さんと日向さん、左側の入り口には扶桑さんと山城さんが駆逐艦の最後列から会議室の最先端に小走りで入ってきた。

「気をつけー！」

会議室の最先端に着いた日向さんが大音声を上げる。

それと同時に一斉に水雷戦隊がこつちに向いた。

水雷戦隊は極めて無表情に徹しているらしく、ここからでは表情が読み取れなかつた。

伊勢さんは沈黙を待たずにカツカツと僕たちの方へ歩いてきた。

そして列の一番前に居た僕の前に立ち、

「油断しそぎつ！」

とポケットから扇を取り出し、僕の頭を軽く叩いたのであった。

それより後は和気藹々と進んだ。

僕には軽巡洋艦の由良さんという神崎さん並におしこやかで気品のある子の担当になつた。

駆逐艦はくじ引きで決まつた吹雪ちゃんと霞ちゃんと望月ちゃんになつた。

吹雪ちゃんは元気のある子で、「最初の艦娘」もある。

霞ちゃんは気の強そうな子だ。

望月ちゃんは少し氣だるそうな子であつた。寝不足そうに見える。

「よろしくお願ひします！」

由良さんの挨拶で駆逐艦の三人が続けて

「よろしくお願ひします！」

「お願ひします」

「ふわあ…。よろしくお願ひします…」

三者三様の挨拶の仕方をした。望月ちゃんはやはり眠気をこらえきれなかつたのか、あくびをした。

「コラッ！ 望月ちゃん、また徹夜でゲームしてたでしょ」

その態度を由良さんが咎める。

「ゆ、由良さんすいません、で、でもさつきの行進こなしたじゃないですか！」

事前に分からぬ彼女たちのパーソナリティの部分がわかつて行く。
なるほど、ゲームが好きなのか。

「望月ちゃんはゲーム好きなんだな…。メモメモ」

「先生、何してるんですか？」

吹雪ちゃんが声を掛けた。

「これは備忘録みたいな物だね。少しでもみんなの役に立ちたいから…」

少し恥ずかしいが、これもいい先生になるための一歩だと思つて書く。

「わあ！良いですね！私も一杯メモしてもらうと嬉しいです！」

嬉しそうに手を合わせる吹雪ちゃん。

その満面の笑みはこつちまで笑みにさせられるような顔であつた。

「全く、バカみたい。そんな事で喜ぶなんて吹雪もまだまだおこちやまね」

そんな吹雪ちゃんを霞ちゃんは否定していく。

「う、つ、そんな事言わないでよ、霞ちゃん！」

そう言つて霞ちゃんに抱きつく吹雪ちゃん。

その両目には滂沱の涙が流れているが、あまり罪悪感を抱かない涙であつた。

吹雪ちゃんは感情が極まるとき相手に抱きつく…メモメモ。

「…吹雪、今のも渚先生のメモにされてるわよ」

そう言つて霞ちゃんはこちらへ指を指す。

「そんなん、恥ずかしい事を書くのはやつぱりダメです！」

そう言つて僕の胸にやつぱり抱きつく。

うお、柔らかい。

昨日の茅野も充分柔らかつたが、この娘でも柔らかい。

「あはは…仮にも男と女だからやめようか」

でも、自分でも驚くほどドギマギしない。それ以上を知つたからであろうか。

「ああっ、ごめんなさいごめんなさい」

吹雪ちゃんはその一言で即離れていく。この娘は提督の毒牙にかかるつてないのだろうか。

顔を赤くし、表情は焦りの表情だつた。

「全く忙しない娘ね」

霞ちゃんは呆れたように両手を上げるジエスチャーをする。

吹雪ちゃんの方が年上なのになんか霞ちゃんの方が年上のような気がしてくる。

「吹雪ちゃんは元気な娘だけど、少し、こう、一直線な所が…」

由良さんは望月ちゃんへの説教を終えて、会話に入つてきた。

筈のような形の良く分からぬジエスチャーをしている。一直線のジエスチャーな

らもつといい形あると思うんだけど…。

真面目で落ち着いた娘だと思ったが存外天然である。

「その良くわかんないジエスチャーなんなんすか?」

望月ちゃんはそんな由良さんにツツコミを入れてる。

「あーもう締まらないわね!」

霞ちゃんが明らかにイラついていた。

うーん気が強く性急な性格か。ここでメモらずに後でメモろう。

「霞ちゃん、そうカリカリしちゃだめよ。そういうのは勝機を逃す原因になるから、ね

！」

多分イライラの一因は由良さんにあるんじゃないかな…とそういうツツコミをしそうだつたが、それは喉に辛うじて飲み込んだ。

「まあ、明日から頑張っていこう！エイエイオー！」

とりあえず、この場を収める方便として鬨の声を上げる。

「「「おー！」」」

「という感じだつたんだ」

「ふーんそーなんだ」

と僕と杉野はキヤツチボールをしながら、話していた。

ここは鎮守府の野球場だそうだ。

かなり本格的な作りである。

左翼側のフィールド側が若干狭く、建物を避けた外野はフェンスがカクカクとした作りが特徴的だ。

フェンスは濃紺の色が落ち着いてる感じがする。

そしてフィールドの内野は土、外野は人工芝であつた。

「そつちは？」

「俺は阿武隈さんつて人と菊月さんと綾波さんと天津風さんの4人だつたけど、びつくりしたのは天津風ちゃんの服！あれ透けてるんだぜ!?」

「えーっ、マジー！」

取り留めのない事を喋りながらキヤツチボールを続けている。

この3年で杉野はかなりの成長を見せて145キロを投げる事が出来る。

武器の変化球も冴えを見せている。

甲子園も選抜で出たし、友達とは言え正直僕なんかがキヤツチボールして良いのかと思つたが、僕を選んでくれて面映かつた。

何故僕らがこんな良い球場でキヤツチボールしてるかというと、顔合わせの最後に伊勢さんから、

「杉野くんは終わつたら野球場に来るよう」と言わされたのであつた。

「しかし、良い球場だな、どこからお金取つてきたんだ？」

防衛費に併せてこういうのに金かけてたんだ……と思うとゾッとしないが、確かに口の所に諸企業の寄付のおかげですと言う定礎があつたような気がする。

「でもなんかカクカクしてるね」

「海の向こうのMLBだと、こんな球場あるつて聞くぜ」

「そのとーり！」

「伊勢さん、日向さん！」

「複雑な形をした外野ならAT&Tパークやファンウェイ・パーク、ペトコ・パークなどが複雰よ」

二人はユニフォーム姿で現れた。

色は白を基調にしたユニフォームで青のアクセントが印象的である。

胸にbullesoldiers（ブルーソルジャーーズ）とプリントされていた。
日向さんはキヤツチャーマスクと防具を装備する。

「そうなんで「やっぱり伊勢さんも日向さんも野球するんですか！」

「うわっ、杉野、野球小僧の押しが強い！」

「そうよ。戦艦の艦娘になると艦装の力に耐えられるようになるから、並の男より力があるわよ。そう習ったでしょ？」

「そう言つて手慰みの様にボールを回転させながらお手玉する伊勢さん。確かに、戦艦空母がかなり鍛えた男の人レベル、重巡洋艦と軽空母は鍛えた男の人レベル、水上機母艦や軽巡洋艦、潜水艦は成人男性レベル、駆逐艦は男子高校生レベルが最低だそうだ。」

「鍛えれば鍛える程、上も鍛えた男性の力はやすやすと超えるらしく、筋肉で出来てるサイボーグだなあと改めて思う。」

「本当つか？ 150 km/h とか出しちゃうんすか？」

杉野はそんな伊勢を煽つていく。

(…まあ自分の専売特許みたいな物だしな)

「自分より力がある女性がイメージ出来ないんだろうな…」

：僕はイメージ出来るけど。

「私はアンダースローだから 140くらい だけどね！」

確かに、アンダースローってオーバースローより球速が出ないんだつけ：。

僕は杉野の影響で野球見るけど、そこまで知識がある訳ではない。だが、彼女の球速は並外れて速い事は分かつた。

「マジっすか…本当男並みだあ…」

僕の心中と同じ反応をする杉野。

自分を超えるその能力の高さにすっかり感じ入ってしまった。
だが、次の言葉で自分の世界が揺れたのを感じた。

「ふふん。艦娘になつたんだからそれくらい楽しまないと」

楽しむ？

命がけなのに？

自分の意志で戦つてるとは言えないのに？

「…どうしたんだ」

「日向？」

そんな僕の動搖を見抜いたのか。日向さんがここに来て初めて口を開いた。
対照的に伊勢さんは何が起きてるのかさえわかつてない。

「…なんでそんなに明るいんですか」

…僕は口を開いた。その口は鉛の様に重い。

「ちょ、渚」

杉野が止めようとしたが、僕は意に介さなかつた。

「もつと艦娘になるつてもつと苦しいものだと…」

と思つてゐる引っ掛かりをそう伝えた。

それを聞いた伊勢さんと日向さんは少しだけ見合つて、こう言つた。

「…私は以前ソフトボールの選手だつた」

伊勢さんが語り始めた。

「…」

「でも全身を痛めて大学卒業とともに引退したわ」

艦娘の生態を知るという駐屯地の座学で知つたが、それらの怪我はたちまち治るという話だ。植物人間すら治癒させるという生命力の強さが艦娘には与えられるという事であつた。

「私はボルダリングの選手だつた」

だが、艦娘達自身でその事をどう思つてゐるのかは聞いてこなかつた。まあ出会つたのは昨日の今日であつたが。

「競技中の事故で歩くのを危惧されるほどの重症を負つた」
続いて日向さんが語り始めた。

「…」

ここまで二人の独白が続く。

それは艦娘である前の彼女らの苦難の人生がそこにはあつた。

「他にも競技自転車で自動車事故に遭つて車椅子だつた娘もいたわ、修学旅行のスキーデ雪崩に巻き込まれて植物人間が艦娘になつて回復した例もあるわ」

「それは習つたことがあります。強制的に健常者を作るという艦を動かすという意思に働いてるのでは無いかという事でした」

「だから、私は艦娘になつた」

日向さんはそう強く言い切つた。

「！」

僕ら二人はその力強さに言葉を失う。

「自分の身体の時が止まる事になつたとしてもだ」

艦娘の特異的な特徴の2つ目。

艦娘になつた者は肉体成長が一部を除いて止まる。
要するに歳をとらないのだ。

完全に歳を取らないという事ではないらしいが、とにかく成長のスピードが0にかなり近くなるそうである。

しかし、とある改装をすると成長が見込めるらしく、まだ艦娘の身体の構造には謎が多いとの事だ。

「…そこまでして健康な身体を取り戻したかつたんですね」

杉野が初めて口を開いた。

苦々しさを多分に含んだ言葉であつた。

肩を痛めた事は杉野の経験にはなかつた。

高校三年間は健康に過ごしたと、傍目から見て思つた。

「まあ、 そうなるな」

日向さんは素つ気なく言う。

「これからどうなるか分からぬ。 でも痛みと決別した自分を親に見せたくて艦娘になつた姿の写真を親に送つたわ」

伊勢さんもまた素つ氣ない。 だが、その一言は情念を限りなく抑えたものであつた。

「「「「…」」」

——艦娘になるだけでも一人一つの物語がある。

そんな言葉が浮かんだ。

：ん、四人？

「つてなんで提督と守高さんが渚くんと杉野くんに混じつてるんですか」

「うわっ」

伊勢さんの一言で僕らは飛び退く。

話にいつの間にか混じつている提督と山口海将補が居た。

「いや、四人がどんな話するのかなーって」

「まあそういう事だな。したら結構真面目な話をし始めて声をかけるのも…と思つてよく見たら提督と山口海将補は赤とオレンジのユニフォーム姿であり、そのユニフォームには Red Oceans (レッドオーシャンズ) とプリントされていた。そして山口海将補は捕手の防具を着用していた。

「提督と山口海将補、バッテリーダつたんですか！野球、野球しましよう！」

す、杉野、野球に関する事の切り替わりが早い！

「防衛大学校を神奈川大学野球連盟の1部に導いたのは俺たちだぜ？」

山口海将補がおどけるように言つた。

「防衛大学校に宇田川と山口あり、と言われて大学日本代表まで誘われたけど、本職はあくまで自衛官だし、校友会はあくまで自衛官生活のおまけみたいな物だったから、辞退したんだけどな」

宇田川提督が補足の様に付け足す。

「へ～そうなんですか」

大学日本代表。そなならば、かなりの実力を持つてゐるだろう。

「全く…。そななおふざけしてて良いんですかー？ヤンキースがコケてる間にナショナルズは今年こそワールドシリーズ制覇しちやいますよー」

「ダステイ・ベイカーに期待しすぎだろ。オールドスクール派だからコケる可能性もあるだろ。それよりKTウイズが色々とやばい。飲酒運転！名譽毀損！ちんちん擦りつて事でえ…」

て、提督がすごいフランクに話して。上司と部下という枠を限界突破して…。ちんちん擦りつて…。

そして何言つてのか分かんない…。単語が右から左に流れていく。

「何を！ま、ユ・ハンジュン大先生が全部なんとかしてくれるから…。ね、日向！」

「すまんが韓国の野球まで追っかけるのは私には分からない。せいぜいMLBまでにしてくれ」

か、韓国の野球の話をしてるのか…。

「なんだよー日向、つれないな」

山口海将補がぽんぽんと日向さんの肩を叩く。身長は日向さんや伊勢さんより気持ち小さいくらいだ。

「…で、MLBで一番期待しているプロスペクトは？」

Prospect…？予想、見通し、前途、展望。単語の意味は今ひとつ野球に繋がらない。

優勝チームの事かと思つたがそれだつたら聞き方は変である。

(渚:プロスペクトは有望な若手の事だ)

(なるほど。有望な【若手】って事ね)

(MLBは優秀な若手は順位付けする傾向があるんだ)

(という事は杉野あの4人の言つてる事わかるの?)

(わかんないよ! 基本野球部は暇あれば練習だから、徵兵された時の方が心にゆとりが持てたくらいだよ!)

(ええ…)

そう小声で言い合つてる間に日向さんが答えた。

最早話がディープ過ぎて僕も杉野の手にも届かない所に居る。

「リース・マクガイア」

「かーつ、捕手らしい上に渋いなー。もつと信悟らしくゲーリー・サンチエスとかよー」

「私なぞは守備職人で充分だ」

「そういう所あるよねー日向。日向も打つて守れる捕手なのに」

「…こいつ日本のOBだと、土井淳とか好きそう」

「…好きだが」

「かーつもう、かーつ」

小気味よく交わされていくいろんな選手の名前。

それを上手く咀嚼出来ずに僕らはただ途方に暮れていた。

僕らには知らない野球の世界があるんだなあ…

よりによつて自衛隊で思い知るとは…。

とそんな様子を見て、途中から話に加わつてなかつた提督が話に夢中になつてゐる3人の肩を叩く。一斉に首がこちら方向に向く。そして、山口海将補が謝りだす。

「すまん…こうやつてスポーツの事を忌憚なく話せる人がこいつらしか居なくて」

「だよねえ…。日本人野球と言つたら甲子園！NPB！つて感じで…」

「ヨーロッパ、アフリカ、アジア、南米の野球つて話が出来るのは、俺達が色々と布教した艦娘達しか話せなくて」

この人達、まだ底を見せてなかつたのか…。

もつと深い、海溝並に深い野球の世界がある…！

「山口海将補、これでサッカーと相撲も見てるし、アニメとかも好きなんだよね。どこにそんな時間あるの？」

伊勢さんは訝しむ。

「こら、こら。一人共これ以上は、潮田も杉野も置いてけぼりにするからやめとけ」
提督がまた仲裁する。この冷静さが艦娘達を率いて連戦連勝を産み出した原動力なんだろうか。日向さんはバツが悪そうに目をつむつてる。

「そう言えば提督、伊勢さん、ここで待つてろっていうのはやはり野球の事なんですか？」

「そうだつたそうだつた」
杉野がやつと自我を取り戻し、提督と伊勢さんに聞いた。

「そう思い出したように提督は言うと提督は後ろに置いていた鞄から、赤とオレンジのユニフォームを出してきた。
レッドオーシャンズの物である。

「俺の分ですか？」

「そうだ。制服の採寸と同じだからぴったりのハズだ。そして杉野！お前に一つ課題を与える！お前は次の日曜日に水雷戦隊のチームの一員として試合に出ろ、そしてヒット一本を打て！」

提督は指指して大きな声で言つた。

「唐突だなあ！」

杉野は頭を搔く。

坊主頭の髪が益々青く見えた。

「何、艦娘達の野球の実力は凄いぞ、俺はプロと対戦しても引けを取らないと思う
気づけば、杉野と提督は対等な目線で話している。

提督の凄さの片鱗を見ている気分だ。

「なるほど、それで、なんで打者なんですか？俺は投手ですけど…」

「ん？ それは俺が久しぶりに先発するからだ」

「ええええ！経験積ますんじやないの！？」

思わず僕がツッコミの叫び声をあげる。

やっぱりこの人性根が子供のままなのかもしれない。

「あ、渚。お前はとりあえず、筋トレの為の体質改善な」

あ、はい。

そして日曜日になつた。

「つて明後日じゃないですか！」

「そういう訳だ。しばらく投げてないのに、肩作ってる暇なんかなかつただろ？」

「一応キヤツチボールぐらいはしましたけど、実戦守備はしていませんから、守備は本当

わかんないつすよ」

そう杉野は提督に言う。

「大丈夫、この球場レフトが狭いので守る範囲もあんまり広くないぞ」
そう言つてレフトの方を見渡す。

曲線定規にチョークを引かれたようなフェンスが印象的である。

普通の球場に通常ある広告が無いのに違和感があつた。

グラウンドには審判4人が立つてゐる鎮守府に珍しい男の人だ。

「あの人達は鎮守府を守備してくれた隊員の人達だ」

年齢も提督より同じ、またはそれより上くらいだろうか。

審判という裏方仕事なのに嫌な顔ひとつしていない。

「そろそろ始めましょうか！」

提督が大声で審判達を促す。

「さーて、皆整列！」

「はい！」

艦娘達は声を各々出し、ベンチから飛び出す。

(しかし……こつちは水雷戦隊とは聞いたが……)

杉野友人は中学3年生より10cm身長は大きくなつた。

183cm。

野球選手と

しては平均的な体躯である。
……それでも顔を少し見上げる。

(向こうは最終兵器ですか)

大日本帝国海軍の切り札、連合艦隊旗艦。

その象徴たる艦娘、大和。

(そして、彼女が艦娘の大エースか)

大谷翔平もかくもあらん。

アメリカとの通信がいつ途絶するか分からぬ中、MLBを目指す若武者を、この女性はオーバーラップさせる。

まあ高校レベルなら…と思うがプロにも引けがとらないと言うのならば、その大きな体で打つ、投げる、守るをハイレベルにこなすという事だ。

「おねがいします！」

試合が始まった。

「さて、艦娘たちの球場、フリートガール・フィールドで行われるレッドオーシャンズとブルーソルジャーズの試合！」

明石さんが外野席の右翼側にある放送席でマイクを携えて放送を始める。何故か僕と茅野と神崎さんが明石さんと大淀さんの隣に座らされていた。周りには艦娘達とE組の一団が密集して座っている。

真反対には米軍の艦娘らしい見た目の女の人人が二人居る。

ただ「らしい」なので一応確認する。

「あの…そこに居る艦娘さんは…」

「ああ、そちらにいらっしゃるのは…」

「そんな敬語なんてN o ! N o ! N o !」

ブロンドヘアーでグレーのボディースーツを着た娘というには少し年をとつて居る彼女は口を開いた。

「私はアイオワ型戦艦の一一番艦、アイオワよ！こつちはレキシントン級空母2番艦のサラトガ」

そう言つて隣の赤みがかかつた茶色の髪の女性を指差し紹介した。

「H . i ! レキシントン級空母の2番艦のサラトガよ」

白のロングワンピースを着た美女は明るく言つた。

(艦娘さんは本当にキレイだなあ)

「まあ軍人だけど、そんなf o r m a l過ぎなくて良いのよ？ M s . 大淀」

「いえいえ、いかなる人物に敬意を怠るなは祖父のありがたいお言葉でして…」

そう、さらに言葉をうやうやしくする大淀さん。

もし立つて居るならば、屈んで礼でもしそうだった。

「まかり間違つて我が自衛隊のその他諸々を世話してくれた同盟相手に失礼なふるまい
できない、ですよね？」

そう言つて、僕らの方を向いた。

そこには大淀さんが僕らに「失礼な態度を取らないように！」という心の声で警告し
ているのがわかる。

「H u s h、まあ、色々とあるのね」

アイオワさんはその大淀さんの声を敏感につかんだのか、明るい声色を潜めた。

「それで、アメリカの艦娘さんがどの様なご用件ですか？」

茅野が口を開いた、僕らの気持ちを代弁したものだつた。

「A h， それはこの娘の着任挨拶よ」

そう言つて後ろの方を向き、手のひらを上に向けてスタンドに居た一人の艦娘を呼ん
だ。

「私はオーストラリア海軍の艦娘、Perth級軽巡洋艦Perthです。以後よろし
くお願ひします」

オーストラリア…。

そう聞いて少し心ざわめいた。

—現在、オーストラリアは深海棲艦の攻撃を受けて、国家としての機能を喪い、日本

に亡命政府を保つのみであつた。

「インドのオーストラリア難民の中に適合者が見つかつたのよ」

アイオワさんは極力感情を抑えた口調で言う。

約1年半前、ハワイで発生した深海棲艦は大きく2つの集まりに分かれた。

アメリカ西海岸を襲い、アメリカ軍の目線を引きつける役目。

そして主目的が多数の軍艦が沈んだソロモン海と珊瑚海の確保とオセアニア世界の占領だつた。

それを防ぐ為、国連の連合軍は珊瑚海に布陣して迎え撃つた。

一艦娘が見つかる二ヶ月前の話である。

：結果として国連の連合軍は大敗を喫した。それが結果としてあの3人の階級の昇格を早め、提督にとつてはあの日の遭遇に至つたのだから分からぬものである。

そして、国連が大敗したことによつて、オセアニアの大國、オーストラリアの運命は風前の灯になつたのであつた。

「オーストラリアのRecapture（奪還）の為に、一意専心で参りたいと存じます」

「：難しい日本語を使われますね」

神崎さんが反応する。

「：私に日本語を教えてくれた方が、様々な事を教えてくれました」

その後、オーストラリアは阿鼻叫喚、地獄の様相だつたと聞く。

まず飛行機で政治家と学者と富裕層が待機していた飛行機で脱出。

中間層が可能な限り、船でインドに向けて脱出。

：そして貧困層と覚悟をした者はオーストラリア大陸に置き去りであつた。
「大学の准教授で Department of Biology(生物学)を教えている
とか…。ここに来たのもインドで実地調査してるとか…」

そういう事であるから、彼女は少なくとも中間層以上の人であることがわかる。深海
棲艦はオーストラリア占領を優先して、逃げる船や飛行機の攻撃をしなかつた為、生き
ながらえた命であることが分かる。

：ちなみにその様な脱出行を成功させたのはオーストラリアとニュージーランドだ
けであり、パプアニューギニアやフィジー、インドネシアなどは住民の壊滅という結果
になつてしまつた。

「ちよつと待つた！」

大淀さんが声をあげた。明石さんと大淀さんが「んなバカな」という表情をしている。
「それつて、宇田川つて名乗つていなかつた？」
「…えつ」

僕らは声を出す。提督の苗字だつた。

「A h」, もしかしたらと思い、Business cardなら持つてきています」

本当に流暢な喋り方をする。そう思いながら、パースさんが差し出した名刺を見る。

「立教大学理学部生命理学科准教授、宇田川信理」

「やっぱり…」

明石さんが口を開いた。明石さんと大淀さんはその手の中にある名刺に目が釘付けであった。

「この人、提督の父親なんですか？」

僕は質問した。

「そうです。義絶状態とは聞いてましたが…」

大淀さんは声を震わせながら言つた。何か、敬愛する上司が義絶された、だけではこの反応は不可解だ。驚愕というか恐れているというか。

「なんでそんなに恐れているんですか？」

「ギゼツ？ ギゼツとはなんですか？」

僕の言葉をパースさんの言葉が遮つた。

「義絶とは、Familyのrelationshipをvanishする事ですよ」
サラートガさんが説明する。

「良い説明ですね。東アジア的な観念を上手く説明できます」

大淀さんはいつもの調子に戻っていた。

「東アジアの家族主義は西洋じやわかりづらいですしねえ」

明石さんも同じくいつもの調子に戻っていた。

「…」

こういう時、穏やかな性格で殺せんせーとかのツッコミをしてこなかつた茅野や神崎さんだと弱い。

なにか落ち着かなさを抱えながらも追求はしない。

「今の反応なんだつたんですか？マトモな反応じやなかつたですよ？」

僕は口を開く。

「それは…」

大淀さんも明石さんも目を逸らす。

そして周りの艦娘やE組が一斉に僕の方を見ていることに気づいた。

(…?)

なんだ、と思った瞬間にドーンと解説席の日除けの屋根にボールが飛び跳ねた。

「大鳳、先頭打者ホームラン！」

「ワーアー！」

艦娘達やE組も歓声を上げた。そういえば大淀さんと明石さんはこの試合の実況を

するんだつたな、完全に違うことに気を取られていた。

バツクスクリーンの部分でカメラを回している青葉さんから通信が入った。

「一球目のホームランですよー！」

「ブルーソルジャーズの大鳳選手！なんと宇田川提督の初球を打つて右翼中段へのホームランです！」

大鳳さんは自分の放つたホームランを信じられない顔をしてライトスタンドを眺めていたが、やがて受け入れたのか回り始めた。

⋮時は少し遡る。

1番バッター、先頭打者として左打席に入つた大鳳は悩みの底に居た。

(提督)

愛しい提督。

人生生まられてはじめてここまで好きになつた人は初めてだつた。

この鎮守府に来て3週間経つても変わらない。

⋮その愛がすぐ届くものであり、一生届かない物だとも知つた。

(そんな提督の前に私はどういう顔をして打席に立てば良いの？)

⋮ソフトボールは小さい時からしていた。一時それで食べていこうと思つたことも

ある。だが、私は農業の道を志した。

：自分の生きた轍が走馬灯の様に見えてくる。

(私は…)

あの人と戦う決心がまだつかない。

「…」

山口守高は真に傑物たる捕手であつた。

肩力、ブロッキング、リードを支える思考、バッティング。

そして観察眼。

彼はプロでも一流の成績を納め得る野球選手であつた。

そんな彼がなぜ海将補の地位を得たのか、それは彼の人生の難解なところであつたが、今はこの観察眼は対人関係に活かされており、彼の働き無しには鎮守府は成り立つていないのであるが、今回はその本来の捕手としての役割に活かされている。
(完全にルーティーンが乱れてる、心ここにあらずって感じだな)

そう大鳳の構えを評した。

(ソフトボールは垂直へ落ちる球は無かつたはず)

(ボールになるフォーカスで行くぞ)

大学時代から今に至るまでの相棒であり、上司でもある宇田川にサインを出す。宇田川は首を振る。

大きく振りかぶり始めた。

(よし、決まる)

第六感がそう告げていた。

夏の甲子園をベスト4、防衛大学校野球部を神奈川大学野球連盟一部まで連れて行つた捕手だけが得られる物であつた。

と、同時にふと思いついた。

(なんで監督の金剛はこんな状態の大鳳を一番センターラインに置いたんだ…)

と思つた瞬間に今までの第六感が違うものへと塗りつぶされていく事が分かる。

金剛はそんな事とつぶに見破つている。

(ヤバい)

ボールは120km/h台のスピードで抜ける回転をしながら手元の少し前で落ちる。

バットがそのタイミングに合わせて地面に激突する下から上に出ている。

かなり低い球を打ちに行く為、左膝が地面に着くか否かと言うほどにまで曲がつていく。

パン！

軟式野球かと思うほどミートの時間が長かつた。こういう場合、回転が死んでしまい

遠くに翔んでいかない場合が多い、だが、彼女の打球は違った。
腕の力だけでライナーに持っていく。

艦娘の、人の形をしながらも船の力をもつ娘の有り余るパワーがここで爆発する。
ライトスタンンドへと一直線に打球は消えていった。

「入った…」

「なんで、わたしあんなボールを…。」

ライトスタンンドに消えていつたボールが何か夢の様に見えてくる
自分の本能が、感覚が、自分を自分で信じられない。
愛する人を……打つた。

「ヘーイー！大鳳！」

…？ベンチに居る金剛さんの声だ。

ブルーソルジヤーズの監督、金剛さん。いつもはブレイングマネージャーらしい。
といつてもチームの分け方はその試合毎にかわるらしいけれど。

「ナイスLOVEデース！」

そう言つてサムズアップした。

「…？」

良く分からぬが、自分の揺れてた感情が収まつたような感覚がする。

これが愛なのか…今まで金剛さんの心中を聞く余裕が無かつた。でも今なら聞けるかもしれない。金剛さんはナンバー2なのだから。

レフトに居た杉野は大鳳のホームランの一部始終を目撃していた。

(あれが、艦娘)

すごいパワーだ。体勢が崩れてでも無理やりバッティングフォームのスマーズさと力で持ち込む。

提督も長らく野球をしてなかつたとは思えないフォーカルボールのキレだつた。

(…これから野球に触れない時があるかも知れないから提督から色々と聞いとくべきかもな)

ただでさえ野球は4ヶ月ぶりくらいだ。

野球場に居る楽しみを謳歌しながら、この試合の後のことを考えるのもまた一興。

(…ヒットを打つという課題が課されてなきやなし。最低限のスペックだけ聞かされてるけど…。プロでも居ないよ。あんな選手)

そう思い、ライト側に居る神崎さんの顔が見たくなる。

横目で見ようとすると見えない。

そう感じて内に次の打者への投球を提督が始まようとしていた。

(おし、集中集中)

「ドンマイ！・ドンマイ！・元気だしてこー！」

そうやつて外野から声を出すのであつた。

「Oh！大鳳すごいですね。あの球をすくい上げてホームランにするトハ」

アイオワさんは感服しきつた様子で大鳳さんがダイヤモンドを回るのを見ていた。

「…でも、MeならもつとExcitingなPlayが出来るねー」

そう言つてるアイオワさんは子供のような目をしていた。

「うふふ。アイオワはまだまだ子供ですね」

サラトガさんは対照的に大人の雰囲気を崩さない。

日本語もアイオワさんより上手のようだ。

(みんなのお姉さんみたいだな)

「…」

そう思つていたら、茅野が指でつづいてきた。

「どうしたの」

「大人っぽい女の人が好きなの…？」

あつ。

「いやつ、そんな訳じやなくて…」

慌てて弁明しようとすると、上手い返しが思いつかない。

：確かに見惚れてたのは事実であるから。

「カエデちゃん…」

「あらあら～」

「あらまあ」

「oh…」

「ah～、彼女はJealousy、つまりヤキモチをやいておられるので？」

五者五様の反応が帰ってきた。

サラトガさんが悪戯っぽく笑いながら言う。それは自分の鈍感さを妬いたくなるものであつた。

「かもしだれませんね。渚と一緒になれたのも一週間も経つてないですし、得れた物を喪うのが怖くて」

茅野はそれに動搖せずに淀みなく答えた。

「…」

僕はそのひたむきな様を見て、彼女を幸せにしたい、そう思えた。

「あかり」

本名を呼ぶ、茅野が耳まで真っ赤になつた。

—ずっと僕のことを見守つてくれてたんだね。

その感謝を僕はまだ伝えきれてなかつたのかもしない。

(そうイエバ、なんで彼女は名簿にPseudonym(偽名)があつたんでス? Sta
ge name(芸名)の事は書かれてましたガ…)

アイオワさんが耳打ちで大淀さんに話しかけている。

(まあ、色々とあつたんですよ)

大淀さんがものすごく雑に片付けてる。

そう言えば、米軍にはE組の事をどの辺りまで話してるんだろうなあと思いつつも…

僕は茅野の手を取つた。

「ちょ…渚、みんな見てるから」

茅野が精一杯の抵抗を見せる。

でも僕は意に介さない。

僕は茅野の手にキスをした。

更に真っ赤になる茅野を、僕はそれを喜ばしいと思う。

「「「「わ〜」」」」

「あらまあ男の子ですね」

「でもmuscleの量は少ないけどネ」

「羨ましいです」

「なあに、これから思い出を作つていけばいいんですよ。神崎さん」

「なんか周りがうるさい…。」

「さてラブラブになつてカップルは置いておいて、一回の表は2番古鷹がフルカウントです」

明石さんが氣を取り直して、という感覺実況を始める。

「試合見よう」

「う、うん…」

赤くなつた茅野を一通り味わつた後に促す。

茅野との野球は高3の時に杉野の春のセンバツに見に行つた時以来である。：野球は良いものである。一体一の真剣勝負。鮮やかなる走塁や守備。一球一球の全力プレー。

杉野に釣られて見てるけど、筆舌に尽くしがたい物がある。

「さて6球目、提督投げました。高速シンカーが内角に決まる！」

「古鷹、ここはあえなくボテボテのショートゴロ！」

「ショートの初雪が華麗にさばいてワンアウト」

次は：誰だつけ？

流石に球場にはスコアボードは無いので、みんなには事前に配られた紙にスタメンが

印刷されていた。

ブルーソルジャーズ

- 1 中大鳳（右投左打）
 - 2 遊吉鷹（右投右打）
 - 3 一赤城（左投左打）
 - 4 投大和（右投右打）
 - 5 三加賀（右投右打）
 - 6 右千歳（右投両打）
 - 7 左千代田（右投右打）
 - 8 捕秋津洲（右投右打）
 - 9 二加古（右投右打）
- レッドオーシャンズ
- 1 右川内（右投左打）
 - 2 二深雪（右投右打）
 - 3 捕山口（右投左打）
 - 4 投宇田川（右投右打）
 - 5 一吹雪（右投右打）

6 中那珂（左投左打）

7 三白雪（右投右打）

8 左杉野（右投右打）

9 遊初雪（右投左打）

次は赤城さんか…。

体格も艦娘の中でもしつかりしてゐる方だ。と言つても体格は中学生時代の茅野と同じくらいであつた大鳳さんがあのパワー見せたし体格は當てにならない。というかあの体格でのパワー出せるなら更に上背がある赤城さんだとどうなるか。

「…！」

と思つたら2球で終わつた。高速シンカーによるサードゴロ。

赤城さんは悔しそうに天を仰ぎながら、ゆっくりと左打席から一塁に向かつていつた。

そんな赤城さんの姿を何も感慨も無く、提督は眺めていた。

「なんか、淡々としていますね…」

「あれが淡々として見えますカー？」

と同時に後頭部に胸の圧力が。

「I o w a さん、近いです」

いつの間にかIowaさんが後ろに移動してきていた。

西洋人らしく、女性的なフォルムが強い為、胸が柔らかくてたわやかだ。

「あのAdmiralはブルドッグネー」

「ブルドッグ？」

「負けず嫌いってコトネー」

なるほど、秘めた闘志つて訳か。

言われてみれば、感情を表に出すと艦娘に不安をもたせかねない。

なので、投球も自然とそうなるつて訳か。

：しかし、キスをした後にこれでは示しがつかない。

「提督つてどんな投球するんですか」

神崎さんが明石さんや大淀さんに質問した。

そう言えば、神崎さんは度々杉野から野球の試合観に来ないかと誘われて、そしてそれなりの割合で野球を見てた。もしかしたら艦娘達の野球知識の深さについていけるかも知れない。

「一言で言うならハードシンカーボーラーですね」

大淀さんが答えた。

「ハ、ハードシンカー？」

神崎さんの声が上ずつた。

あ、やっぱり付いていけないんだ。

「ハードシンカーってなんですか？・シンカーなら聞いたことがあります
僕は大淀さんに聞いた。

「日本とアメリカの変化球には呼称に違いがあるんですよ」

大淀さんが片目をつむり、人差し指を立てながら説明する。

「日本だと利き腕側に沈む変化球は全部シンカーですが、アメリカだとハードシン
カーって言つて速球扱いになり、速球に近い速度で利き腕側に沈むのをシンカーにする
んですよ。日本語で言うと球が動くつて形容されます」

「へーそうなんですか」

初耳だ。

「アメリカではパワーヒッターが一時期隆盛を極めましたからね。打者のバットの芯を
如何に外す方面に進化していった姿ですね」

大淀さんが更に付け加える。

「なんでアメリカの投げ方をしているのですか？」

野球のことは詳しくない茅野が聞いてくる。

「それは日本ではやってないからですよ」

大淀さんが答える。

「日本の高校野球は金属バットで使われてて、芯を外さなくともヒットが打てるからその影響が大きいんだよね」

明石さんも言葉を挟んで来た。

「そうなんですか」

「なるほどハードシンカー・ボーラーっていうのは、木製バットならではというピッチングスタイルなのか。」

「でも提督はそれを逆手に取つて、木製バットになる大学からハードシンカー・ボーラーに転向して活路を見出したんです」

大淀さんはとこう付け加えた。

「野球好きなんですねえ」

「H u ↗ m, 面白い事が聞けましたネ」

アイオワさんが僕の頭に胸を押し付けてきた。

かなり胸に体重をかけている為、頭にずつしりアイオワさんの肉感がある。

「…重いです」

僕は抗議の声を上げる、これ以上体重を載せられると潰れてしまう。

「S o l d i e rとしてまだまだ m u s c l eが足りないわね」

：アイオワさんは日本語の文法を正しく使つてゐる。

でもわざわざ語彙は英語にするのは、なんでなんだろう。

「最近はbaseballも総合力の時代よ！セイバーメトリクスは知つてゐるカシラ？」

そう僕に胸をボインボインと押し付ける。

うわ～頭が揺れる～

「ちよつ、アイオワさん渚が！」

「アイオワ、それも日本では一般的では無いし、それより渚くんが氣絶してしまはるわよ」とサラトガさんがアイオワさんを引き剥がし、開放される。

気持ち悪い…。

「ただ、提督はハーデシンカーボーラーになる前の高校時代は弱小校とは言え、145km/hのストレートを放つ日本でもそこそこ出色な投手で、プロのスカウトは調査書が出された程なので、その路線変更は神奈川大学野球連盟でも下位に居た防衛大学校の勝利の為でしようねえ…」

大淀さんは感慨深く眺める。

「さて、野球の試合に戻らせていただきます」

明石さんが試合の実況に無理やり引き戻した。

「一回表、ツーアウトランナーなし、打者は4番の大和です」

⋮

この時をずっと待っていたのかもしれない。

中学生の時を思い出す。

誰よりも早く二次性徴が来て、誰よりも先に身体大きくなつたから、俺の球を取る捕手をしてくれた事を俺は忘れない。

あれから幾星霜、俺たちの道は分かたれて、また一つになつた。

お前は人を超える力を得てだが。

だからこそ今、知りたい。俺が勝利を得るため捨てた真っ向勝負をお前はどう見る？

俺の愛をこの球に乗せて、打ち取る！

⋮

「ボール！ツーボール！」

審判の声が高らかに空に響く。

「おーっと提督、2球続けてボールになりました！」

明石さんが大きく声を張り上げる。

提督の「俺の嫁」との対決は闘志を抑えて冷静に努めているのがわかる2球である。

「ちゃんとしたりードですね」

「あ、分かりますか？」

僕の一言を大淀さんは敏感に受け取る。

「全艦娘の中でも有数のパワーを誇る大和さんに球は動くとは言え、甘い球は禁物。先ずは空振りがとれそうな変化球で様子を見た…こうですね？」

僕は少し逃げ足にも見えるリードに、慎重な一人の意識が見える。

「渚くん、捕手経験者らしく理にかなつた分析ですね」

明石さんが僕の見識を讃えてくれた。

「今投げたのは空振りを狙いやすいスライダーとフォークですし、ランナー無しで一番結果として高く付くのはホームラン。慎重になるのはやむを得ないかと」

大淀さんは補足を付け加える。

「もう一本ホームラン打たれると二点差ですしね。ここは慎重にならざるを得ません」
実況に戻った明石さんが解説する。

「とは言え4球ボールだと今度はボールファウルになりますね。それだと次のカガを抑えないといけないです」

サラトガさんがその路線の問題を突きつけていた。

そう野球は慎重に行き過ぎても負けなのだ。

しかもボールのコントロールはそう簡単じやない。一握りの選ばれた選手でしか、思

う体調で思つたとおりの球を投げられない。

だからこそ、この球はストライクを取りに行かないと提督側に不利に働くのだ。

「という事は投げるんですかね？」

僕はあえて聞いた。

「ハードシンカーですか？」

大淀さんは趣旨を理解し聞き返す。

「そうです。話に聞くと速球に近い球ですし、強振してきた打者の芯を外すつてパターンを意図出来るわけですよね」

僕は自分の考えた事を話す。かまないよう、相手に伝わるように意識した。

「そのとおりです。でもそんな事は大和さんも百も承知」

大淀さんはそう言つて、僕の方を向いていた顔をグラウンドに移す。

「あの…なんで変化球3球じやダメなんですか？」

茅野が聞いてきた。

「それも作戦としてはアリですが…」

大淀さんはそこで切る。

「あの提督が四球というリスクと全球変化球という慎重過ぎる攻めは両方とも嫌うかと」

明石さんがその二の句を継ぐように言つた。

(…提督は慎重もリスクも嫌う、か)

僕はその部分を噛み締めた。その意識が艦娘全体に行き渡つてるのであろう。

466日。

提督が提督になつた日数である。

提督が今まで率いていた艦娘達は誰一人として沈んでいないのである。攻勢に晒されてるアメリカやヨーロッパだと一ヶ月に一人は最低沈んでいる艦娘が出でているらしい。

アジア諸国への救援戦が多い日本、防衛戦が大半のアメリカとヨーロッパとの違いはあれ、これは快挙と言つていいものだった。

(提督の思考傾向は間違ひなく、僕ら全員を無事に日常に帰らす鍵)
(あの提督の言葉だけが全てが決めるわけじやない)

—この小さな青年は聰き目で冷たく現実を見据えていた。

…どうやつて生き延びれば良いのか。それは自分たちの結束に正しく影響するか。

それを考える力があつた。

「変化球は直球よりコントロールしづらいですかね」

そう言つた大淀さんに茅野は納得してない顔をしている。

(…なんだろうその顔)

「あの、大淀さん明石さん…。ハードシンカーも変化球じゃないんですか？」

あ。

「確かに…」

僕は大淀さんと明石さんの話に無自覚に合わせていたが、確かに素人目には変だ。
変化する直球。

なんとなく分かるんだけど、それを素人に理解させるのは難しい。

「速球、つて言えば良かつたですね」

明石さんが訂正する。

「なるほど」

僕はそれなら納得する。

速球といつても変化しないわけでは無い。

「日本では速球＝直球になりがちですよね。反省します」

「と、話してゐる間にツーストライクツーボールになりました！」

明石さんが実況モードに戻った。

「ヤマートは一度もスイングしてないですね」

先程の話に介入してなかつたサラトガさんがこの間の投球を教えてくれた。

(…)

ハードシンカーを2球ストライクに続けたが全くバットを振つてこない。

捕手の守高はこの打者大和の沈黙を奇妙に思つた。

(迷つて いるのか、いや そうなる訳がない)

大和の過去、その結果。そして戦艦大和になる糺余曲折。

(…俺はお前らに幸せになつてもらいたい)

そう言つたのも遠い過去の話ではない。

(今はお互い背中を預けながら戦つている夫婦であるが二人共根本は戦士だ)

そう思い、ボールを提督に返す。

(何らかのアクションを起こしてくるだろう)

—それを変化球で避ければ良い。分かりきつた事であつた。

大和は未だ一人の戦士かも知れない。

(だが、アイツは立派な提督だ)

兵は詭道なり。

それが分かつた今は、正面衝突を避ける術を覚えたのであつた。

(誰も沈めない、誰も殺さないために。俺が出来ることはその背中を後押しするだけだ)

そう思いサインを出す。

(カーブだ。外角、ボールになるコースで)

提督は首を縦に振る。

(緩急差でバットを出させる)

ストライクにしないのは「保険」だ。

(これが狙いだとしても精々ヒット止まりだ)

他にも提督は緩い変化球はチエンジアップが投げられるが、チエンジアップは精々目くらまし程度の変化量だった。しかし守高は悲観しなかつた。

(充分だ)

メンタリティも強いし、体格も優れてる。

プロでも充分やつて行ける。

だが、「野球の才能はいつも守高に及ばなかつた」といつも言う。

提督は投球モーションに入る。

(でも、俺はお前の方が恵まれてたと思うぞ!)

そうして提督はカーブを投げた。

「…」

ここまで出会いから30分と満たない間にアイオワさんはその天真爛漫さに心がほっこりさせられてきたが、アイオワさんは急に神妙な顔つきになつていて驚いた。

「アイオワさん、どうなされたのでしようか」

大淀さんは慎重な口ぶりで聞いていた。

「…」

アイオワさんはそのまま神妙な顔つきをしていました。と思つたらいきなり「全て分かつた」顔をした。

「O h, I see.」

「なにが分かつたんですか?」

得心が言つたアイオワさんと何がなんだかわからない僕らという構図になつた。

「I o w a、どういう意味ですか?」

サラトガさんが更に聞く。

「A h、この勝負ヤマートの勝ちですネ」

I o w aさんはそう断言する。

「ミナサン、提督の変化球を一回ミテミマショウ」

そう言つて、皆に配られてる双方の選手の簡単なデータが乗つていてるチラシを見せた。

宇田川 信悟 右投げ右打ち

ストレート（ハードシンカー）フォーク、カーブ、スライダー

「この中で速度の遅い変化球はどれデース?」

「この中だと:カーブです」

神崎さんが答えた。

「簡単に言うと、宇田川Admiralと山口Rear Admiralの考えすぎな
のよ」

Iowaさんはそう言い切り、バッターの大和さんを見る。

「多分、ミス金剛とミセス大和が二人で考えたコトなんでしょうネー」

「Iowa、結論をそろそろ言わない」と

何が何だか分からぬ僕らに助け船を出すサラトガさん。

サラトガさんはこの思わせぶりなアイオワさんに注文を付けた。

この二人はかなり仲が良さそうだ。

「Oh, ソウデシタネ」

「簡単なことデス。ツーストライクになるまで大和に見逃させたのデス。 そうすると何
を投げるかがわかるのデスカラ」

「あつ:」

大淀さんと明石さんが何かを察した。

「どうか、ハードシンカーで押せない:!」

明石さんがハツとした。

「ハードシンカーだけで打ち損じを期待するという戦法をするのには回が早すぎる！」
大和さんの美しいスイングから放たれる鋭い打球が右中間へと飛んでいった。
「打つたー！ 大和の流し打ちは右中間を一閃！」

明石さんが実況を始める。それはアイオワさんの予言通りのヒットだつた。

二塁に到達した大和は予想通りの結果に驚きと歓喜の半々であつた。

愛する人を打つた。それは心の底から分かり合おうとする行為そのままであつた。

(…上手くいったみたい)

金剛さんからアドバイスの通りだ。

久しぶりの野球実戦。

いくら一流の野球選手と言つてもおそらく2年近く実戦から離れていた捕手だ。頭
がニュートラルの位置のまま動いてないだろう。

「ハードシンカーで押すという発想までには至れない、か」

パワーヒッターである私に変化球を先行させて直球は後からストライクゾーンを攻
めていくというのは特に不思議は無い、という事である。

(金剛さん…あなたは…)

金剛四姉妹は全艦娘の中でも古株である。戦艦艦娘の中でも最古参である。提督に

なつた彼の苦悩と激情を知つてゐる。

年齢も自分や提督と同い年である。

(私の知らない信悟を知つてゐる)

それでも彼女は信悟の心に気づき半歩退いた。

(まああくまで半歩なんですけどね)

心の距離が開けていた自分の背中を押したのも彼女であつた。

そして今の鎮守府を作つたのも――

「初球ハーダシンカー打つたー！」

明石さんの実況が鳴り響く。
うおつこつち来た！

レフトの俺は背走して打毬の下へ向かう。
フェンスに当たる！

ジャンプしても届かない事を確認してバウンドを待つ。

「こういう時、キレイな曲線してないフェンスはめんどくせえんだ！」

そう恨み言を言いながら、不規則に跳ねるボールができるだけ早く取り、中継の初雪ちゃんに送球する。

初雪ちゃんはその送球を華麗に受け取り、素早くバックホームした。

「うおつ！」

この素早さをもつてしても大和さんのホーム帰墨は間に合わなかつた。

加賀さんは2墨で止まつた。

「加賀！ツーベース！」

「やりました」

感情の並が少なく、大きな喜びを見せることが少ない加賀が短く言い切つた。
「…」

内角低め、ハードシンカーとしての生命線をきれいに打たれた。

いとも簡単に引っかかった赤城とは対極的にしつかり変化を見極めてから打つてき
た。

自分が職務の片手間に教えていた艦娘達が俺を、俺たちを越えようとする。

「ハーハツハツハーハー!!!」

「ん？」

守高と一緒に笑つていた。

なるほど。

この失地を面白いと思えるか。

やつぱりお前はいい相棒だぜ。

「笑つてますよ。あの二人」

大淀さんが呆れたような感心したような声で言つていた。

僕らもその二人が秘めてた闘志を思い知る。

「あれが提督……」

僕が感嘆した声をあげる。

「鳥間さんとはまた違いますね。あの人は静かに笑いそうですし」

「そうだね。なんというか困難の向かい方が違う感じ」

神崎さんと茅野が感銘深くあの二人を見る。

（ああいうのも女の子ウケするのか……）

（僕は一生程遠しだけど）

僕はその二人の姿を複雑な思いで見ていた、

（……？）

そう言えば3人が何も言わない。

「……」

「……」

「……」

あつ。

そこには恍惚とした明石さんとアイオワさんとサラトガさんが居た。
…恋する乙女だ。これは間違いない。

「…あの大淀さん」

「はい」

「あれって…」

一応確認する。

「はい…あの三人も提督に惚れています」

「あの三人“も”？」

「あの人には私も頭が上がりません…すけこましです…」

そう大淀さんは複雑な顔をしながらお手上げのポーズをしていて。
「もー、そんな事言つて大淀だつてぞつこんの癖に」

恍惚とした顔をもとに戻し、ふくれつ面で大淀さんをからかう。

彼女らは「はじまりの艦娘」を支えてきたメンバー達である。

半艦娘だった時期を経て、軽巡洋艦大淀、工作艦明石となつたのである。

(提督のカリスマ性は本当高いなあ、付き合つて長い人までああやつて魅了させるなん

て)

「…で、アメリカ艦の二人までなんで鼻の下伸ばしてるんですか」

僕は呆れたような、アメリカ軍人に抱く精強さとは程遠い。

…まさか。

「あのAdmiralのd??はbigらしいワヨ」

「やだ…私のP???がwetになるー」

僕らはあの一年でビッチ先生にスラングは教えられた。

何を言つてゐのかはつきりと分かる。

この二人、猥談してゐるぞ…。

「あの、男の人の前でその様な話は…」

僕は一人に口を挟む。

「あら、理解出来るノネ」

「あらやだ、私Iowaに感化されちゃつて…。はしたない女ですいません…」

そつけないアイオワさんと恥じらいを見せるサラトガさん、対象的であるけど、サラトガも取り繕つては居るけど、充分酷い。

「実践的な英会話つて罪ですねー」

明石さんがあつけらかんとして笑つてゐる。

「もうこの場がめちゃくちや過ぎて部屋に帰りたいです…」

大淀さんは大きなため息をついていた。

茅野と神崎さんはシモネタが得意じゃないので、引き笑いをするだけであつた。

「おつと実況を忘れてました」

明石さんはそんな混沌とした空氣を意にも介さず実況を再開する。

「千歳は見逃しの三振です」

(ポテンシャル見てるにリードオフでも出来るはずだが：何考えているんだ)

提督は千歳の顔をじっと見つめる。

艦娘に多い、女性的なフォルムの彼女。

その美しい顔は愛している提督の前でも仮面を崩さなかつた。

(何か俺を打ち負かそうと考えているな)

警戒しなければ。

提督そう思つた。

(だが今は2点を取り返す方が先だ)

そう思いながらマウンドから全力疾走する。

高校の時からのルーティーンである。

自衛隊員足るもの、全力疾走をモットーとせずに何となる。

「さて1回裏になりますが、大淀さん、ここまでレッドオーシャンズはどうやつて取り返すんでしょうか？」

明石さんは回の間の話を始める。

「軽巡洋艦、駆逐艦のパワーは戦艦空母のそれに明らかに負けてます。ですが、技術とかにはヒケをとらないと思いますので、どんどん打つてくると思いますね」

筋肉で出来たサイボーグは伊達じゃない。僕らがあの一年間で付けた技術を一ヶ月とまた取得してしまう。運動技術に対する取得スピードは常人を遥かに超える。

「駆逐艦なんかは余暇の身体動かす遊びが野球ですかねえ」

なるほど、それがあのハイレベルな攻守なんだな。

「凄いですねえ、色々と」

僕はそう言つての守備交代を見ている。ブルーソルジャーとレッドオーシャンズの選手たちは提督に倣つて、全力疾走でキビキビと交代していく。

(提督は、自らの背でみんなを引っ張つていく、か)

こんな人材が自衛隊には居るんだなあ。

烏丸先生はあまり自衛隊の話をしたがらなかつた。学校生活を優先させたいという心遣いがあつたのかもしれない。

「どうせ軍に居るんだから、烏丸先生とビッチ先生に会いたいなあ
ふたりとも前線に居るから会えることは稀であろう。

「…会えますよ。きっと。そのために私達が居るんです」

サラトガさんはそう言つた。

：だが、その願いは意外な形が叶うことをここに居る全ては後で知ることとなる。
1回の裏、レツドオーシャンズの攻撃。

「♪♪♪」

打席に向かう川内は歌つていた。

「…」

秋津洲はその姿を横目で見ていた。

「三水戦、すぐいうれしそうかも！」

秋津洲は明るい口調でからかう。

「ああ、これ？那珂が作ってくれたんだ」

川内は屈託なく言う。

「三水戦は水雷戦隊の華なり！初回の失点なんてすぐに取り戻しちやうんだから！」

と川内は高々と宣言しバットをぐるぐると回しながら、打席へと入る。

「…仮様だ」

マウンドに立つ大和さんの姿を見て僕はそう感じた。
大きな身長。

孔雀が羽ばたいた様なクラシカルワインドアップが千手觀音に見える。

そこから腕の動きが素早く横から出てくるが、その動きは緩慢にすら見えた。

「サイドスロー！」

「ストラーアイク！」

蛇のようなストレートが外角低めに決まつた。

「…ヒュー！」

川内は感嘆の口笛を吹く。

その反応を見る事なくテンポよく次の球を大和は投げてくる。

「相変わらず球の威力は5本の指に入る…わね！」

そうして川内はバットを横に構えた。

「凄い…！」

僕らは感嘆するしかない。

外角に外れた球と思つたらそのまま左打者である川内さんの身体めがけて曲がつていく。それを見た川内さんはバントの構えをする。

「おーっとセーフティバンントの構え、つてああああああ!!」

明石さんが実況しようとしたが途中驚愕で叫んだ。無理は無い、川内さんはバントの構えから、ダッシュしてくるファースト、サードの一航戦のアタマを超す打球を飛ばしたのだから。だが、その虚を突いた作戦も赤城さんは冷静に後ろにジャンプして好捕し

たのである。

「普通バントであそこまで飛ばしませんよ」

大淀さんが感嘆したような呆れたような声で言う。
「手首の力だけでファーストの後ろに持つて行つたんですか、普通手首が壊れちゃいますよ」

茅野は何か起きたのか説明する。

変化球とは言え、かなり直球に近いスピードが出るスライダーである。

その鋭く変化するボールをバントの構えをする。左手をバットの先に、右手をバットのグリップに持つ模範的なバントの構えだつたが、その構えを見て一塁の赤城さんと三塁手の加賀さんの高速チャージの体勢に入つた。それをあざ笑うかのようにバットを左手で弾くように下から上へ引っ叩き、ファーストの背を超えた後ろに打球を落とそうとした。

だが赤城さんは素早く反応、優れた跳躍力もあり、見事にキャッチしたのであつた。

「雪村さん、よく見えてますねえ」

明石さんが驚きを持つて言つた。

「確か身体能力検査でも反射神経はこここの3人、特にあかりさんは男性陣抑えて1位でしたしねえ」

大淀さんが補足を添えて説明する。

「…首にあの反物質の触手突っ込んでたんですね。雪村さん」

明石さんが爛々とした目を茅野に向ける。

うつ、新発見をした時の奥田さんと同じ目をしている。

「未だにその強化が生きてるとするなら、かなり興味深いです。その目、試合が終わった後で調査させてください！」

「な、何させられるんですか私!?」

「なあに、MRI取つて視神経を司る脳のチェックをするだけですよ？」

「それ結構時間取られるやつですよね!?」

小気味よい会話が流れてくれる。

「また脱線していますね。2番の深雪は一球投げてワンボールになつてるとこです」

大淀さんがまた逸れてた道を戻す。

「あのスライダー凄かったですね。あんな速度とキレを両立出来るなんて」

「あれだけじやないですよ」

そう言つて大淀さんは向こうを指差した。

丁度2球目が投げられてる最中だつた。

「うおつ！」

ど真ん中に投げられた球が鋭く変化し、深雪ちゃん、右打者の腰を引かせていく。

「あれは、シューートボール?」

僕は更に驚いた。スライドする様に右打者の内角へとめり込む。

「あのシューートとスライダー、合わさればかなり武器になりますね」

僕はあの変化球が大和さんの投球の生命線であることが容易に見て取れた。

「相手打者を向かっていく変化球で腰を引かせて、ストレートや相手から逃げていく球でストライクを取つていく」

「なら、それに slowなボールがあれば少なくとも投球にアドバンテージ出来るわね」

アイオワさんはそう話に割つて入る。

「それも、もうありますよ」

大淀さんはそう言つてまた指差した先はワンボールツーストライクと追い込まれた
深雪ちゃんである。

「深雪ちゃんに何かあるんですか?」

深雪ちゃんに何か弱点があるのだろうか。大淀さんが続けていう。

「深雪さん、走者が居る時は考えて打つんですけど、こういう状態になると熱くなつて前のめりになるんです。だから……」

「大和さんの球なんか怖くないぞー! 来いやー!」

深雪ちゃんが叫んでる。

そんな深雪ちゃんに對して眉一つ動かない大和さん。秋津洲さんのサインを見、肅々と投球モーションに入る。

「ん？」

投球モーションの腕の振りが違う。

「あつ、スローカーブだ！」

右打者の肩あたりから大きく弧を描く遅いボールが投げられる。それを深雪ちゃんは綺麗な程までに空振りをする。

「ストライクバッターアウト！」

「あんな感じに緩急に弱くなるんです」

大淀さんはため息を出した。もう何回も見たのであろう。

「深雪ちやーん！今度はもつと球を見るのよー！」

大淀さんが慰めとも励ましとも思えない呼びかけをする。

こういう大声も出すんだな…。そりや軍人だしな。

次は3番の山口陸将補だ。野球選手としては身長がそんなに高くない。

(まあ僕が言えた口じゃないけどな…)

「渚、なんか言つた？」

「い、いや、なんでもない…」

右投げ左打ち、三振をしたことがほとんど無いというほどのバッティングセンス。「ジョー・マウアーミたいですね。構えもそつくりです」

サラトガさんがそうなぞらえた。

「ジョー・マウアー?」

神崎さんが聞き返す。僕も名前だけ聞いたことがある。

「右投げ左打ちのキャッチャーですね。高校時代三振を一個だけだつたというほどのコンタクトスキルが高い打者ですね。MLBでは今、ファーストにコンバートされてます」

なるほど。

「ただ、heightが全然違いますね。ジョーが6フィート5インチに比べて、山口Rear Admiralは6フィート行かないくらいですし…」

そつかアメリカ人だからフィートになるのか…」

「えーとマウアーリーさんは約195cmですかね? 山口少将は175cmだつたはずだから5インチ8フィートくらいですかね?」

明石さんが自動的に変換してくれた。

「変換Thanks. それほどの身長の違いは打撃にどう出るのか見ものですね」

大和さんは大きなワインドアップからサイドスローでボールを投げていく。
初級真ん中に来た球が山口少将の膝へと食い込んでいく。

「凄いな。変化の始まりもモーションも打者を完全に欺かせられますよ。これ」
直球と変化球にはモーションの違いという物が生まれる。

投手の経験が短い投手などは、その辺りのモーションの違いが大きすぎるので早く矯正しないと解析され滅多打ちにされる。

なのでその差が小さい上に球のキレがあるとなると、高いレベルの選手も対応しづらくなる。

「ボール！」

そんなボールを、少し腰を引いて見送る山口海将補。

「…」

(大和の投球術というのは内外角を全部使う投球だ。高めはあまり投げずに打者の腰以下で勝負する)

山口海将補は頭の中で大和の特徴を反芻する。

(…で、この食い込むスライダー、逃げるシューート。それらを活かす為にストレートを一定数混じらせなければいけない)

そう更に反芻して大和に正対する。

(だが、そんな事は分かつてははずだ。秋津洲は横滑りする球をぶれずにキャッチ出来るから起用したに過ぎない。リードは自分でしてははずだ)

大和は慮外の戦術を好む。

まあ彼女の生まれ育ったバツクボーンがそうなのである。

歴史の影に埋もれた一族の出身。

(という事は次来る球は：)

大和はモーションに入り、球を投げる。

(高めのスライダー!)

淀みが無い美しいスイングである。

高めのインコースに入つたボールは山口海将補によつて打ち返され、ライト方面に飛んでいった。

「打つたー！ライトバツク！ライトバツク！」

明石さんが実況に戻つている。

目の前のライトは千歳さんである。打つ前は定位置に居たはずなのに、打球が打つ前にはかなりバックしていた。

「あの守備範囲はなんだ!?」

打球を放つ前にわかる守備反応の良さ。

打球が強いライナーになる事を察し、一気にポジショニングを取つてきた。
更に俊足であり、フェンスにはあつという間に到達した。

後はフェンスに直撃する打球を取るだけだ。

千歳さんはフェンスに向けてジャンプした。

「たーあつ！」

気合を入れ、声を張り上げた上でジャンプ。
だが、それをあざ笑うかのようにボールはフェンスに直接ぶつかることになる。
そしてボールはその反動で僕らの目の前へとスタンンドインした。

「エンタイトルツーベース！」

「おおおおおおおお！」

僕ら観客とレッドオーシャンズのベンチは沸き立つ。

（良かつた、千歳のあの守備センスじや俺の脚でも2塁は狙えん）

そう思いつつ、一塁を小走りで守高は回つていった。

(…)

提督は無言でバツターボックスに立つ。

（秋津洲の後ろにそらさない性能は高い）

そう思つた時に大和のライダーが外角低めのボールゾーンに投げられていた。

(いくらでも変化球を見せ球に使えるつてわけだ)

そう意図を察する提督。

(俺は炎、お前は水だからな)

魂は似通つても頭脳は反対の事を考えられるようにそう訓練された。だからこそ、あいつは今俺のとなりに立つてているのだ。

3球目。インローのストレートを綺麗に振り抜いた。

「行つたー！ 文句なしのホームラン！」

打球は綺麗な弧を描き、バックスクリーンに吸い込まれていった。スタンドとレッドオーシャンズのベンチの興奮は最高潮になる。

水雷戦隊のベンチは提督を歓迎している。

「提督のホームランでレッドオーシャンズが同点に追いつきました！」

クリーンナップになりたいというエゴでなるんじやない、純粹に技術が艦娘の中に入つても抜きん出でいるから二人は3・4番に並んでいるんだ。そう思わせる攻撃であつた。

5番の吹雪ちやんは外のスライダーで空振り三振になり1回表は攻撃終了になつた。

⋮その後3回まではお互い譲らずにノーヒットで回は進んでいった。大和さんの球は唸りを上げて空振りを取り、提督の球は低めに集まりゴロになつて行く。

最初に動いたのはブルーソルジャーズだつた。

提督は4番大和にスライダーを合わされてあわやホームランというフェンス直撃の打球だつたが、当たりが良すぎたのでシングルヒットになつた。

提督は次の打者の加賀を三振に抑えるも千歳さんの打席に入ると露骨に制球を乱すようになつた。

「ボール！ フォアボール！」

「おーっと提督、初めての四球が出ました」

外野席から見て、提督の表情は変わらないように見える。

「少しリリースが乱れ始めていますね」

大淀さんがのんびりお茶を飲むかの様に言つた。

「あら、ミス大淀はタイゼンですね」

サラリとガさんは指摘する。

「まあ点を取つた後は明らかに待球作戦でしたからね。いつガス欠するかかの問題でした。まあしばらく投げていなかつた事を考えるとよく頑張つた方ですが……」

サラリと言いのける。

待球作戦。

なるべく投球を稼ぐ為に打つていく作戦。

それは提督の投球に残酷に的確に付いてくる作戦であつた。

「ファーストスイングをしないでずっと投球を待ち続ける作戦ですか？」

茅野はじつと提督を見つめていた。

勝つためには何でもする。

どんなに愛してようがこういう些細な勝ち負けも手を抜かない。
そこにはだらけきつた男と女の関係は想像が出来ない。

ここに来るまでどれだけの試練を乗り越えて来たのだろうか。

「揺るがないんですね。みんな」

僕は囁みしめるように言つた。

だから戦いに勝ち続けられる。

「…だからこそ、大鳳さんには覚悟を決めて欲しいんですけどね」

大淀さんはブルーソルジャーーズのベンチを見ていた。

：大鳳さんはあの以後もなんというか霸気が薄かつた。

色々と話は聞いたのであろう。

だが、それでも気持ちが揺らいでるんだろう。

第二打席は糸が切れたようなバッティングフォームでシンカーを打ち損じた大鳳さんはファーストゴロであつた。

打席には千代田さんが入っていた。

3球目の変化球を叩いた打球は三遊間を割つた。

「うおおおおお！」

レフトの杉野が猛チャージする。

三塁走者の千歳さんはそれを一瞥もせず三塁線を一気に曲がる。

（マジか！）

投手は安定して18・44メートル先を投げなければいけない。

だから須らく投手は肩力が優秀でなければいけない。

だが、千歳さんはそれを理解してははずなのに本塁を陥れようとする。

「させるかよお！」

俺は思い切り走る勢いでバックホームをする。

だが、この杉野友人には2つの誤算があつた。

1つ目は強肩だけではバックホームは務まらない。

正確な送球も必要なのだ。

戦前から戦後にかけて巨人、阪神、毎日で活躍した呉昌征はバックホームも名手と言われた。

それは強い肩よりも、どんな場所からでも安定してワンバウンド出来るコントロール

を併せ持っていたからである。

2つ目はその事を3ヶ月間ですっかり忘却の彼方にしてしまったことである。

「杉野のバツクホーム！山口海将補は若干それたボールをキヤツチしすぐに、クロスプレーに入る！」

キヤツチした瞬間に千歳さんは滑り込む。

「セーフ！」

そう言いながら球審のジェスチャーは大きく横に広がった。

「ブルーソルジャーズ勝ち越し！」

ブルーソルジャーズのベンチは沸き立つた。

その歓声に膝を屈する杉野。

（しまつた～勢い付けて投げすぎた～！）

自責に囚われる杉野。

（そりや逸れるよな～）

「すいません山口さん…」

大きな声で捕手に向けて言う。

と、そこに提督の横槍が入る。

「杉野ー！ 気力に缺る勿りしか、だぞ！」

と、言う提督。

「は、はい」

杉野は膝を上げて、敬礼でもしようかと思うくらいに直立不動になる。

「ゴセイネ」

アイオワさんは笑つて言つた。

五省（ごせい）日本海軍時代から受け継がれてきた教えの1つだ。

「昨日教わつたばかりなんですけどね……」

そう鎮守府に来るまでは僕らは陸の所轄だつた。

教えや流れる文化も違う。

「まあ、みんなに教えられたけど、まだ慣れてないかなあ」

茅野はそう恥ずかしそうに言つた。

「そうですね。みんな、暗記でスラスラ言えるのには驚きました」

神崎さんが応える。戦いの連続でそういうのを疎かにしてないんだな。

「生きて帰るにはまず教育からがモットーですよ。だからこそあなた達を学習補助要員として採用したんですから」

本当、提督は教育を重視してゐるなあ。

「さてワンアウト2・3里ですが秋津洲かあ……」

明石さんが腕を組む。

「あー…」

前の打席の彼女のアプローチを見ると待球作戦下といえども打つてくださいとも言える甘い球でも地蔵のようにバットが出ない。

追い込まれて焦ってハードシンカーに手を出してしまうという感じだつた。
(僕から見てもバッティングセンスを感じられない…)

そう思つてしまふ。

「かもっ！かも、かも！」

案の定今度は変化球に空振り三振だつた。

「三球三振…」

あちや～と声を出しそうな面々である。

「o h…あれは t r a i n i n g のしがいがありそうね！」

カラカラと笑うアイオワさん。

「あれは…まず h a p p y z o n e (ど真ん中) の打ち方から学んだほうがいいです
ね」

他人の大失敗に苦笑い。そんな表情なサラトガさんがそれに同意する。
次の打順は加古さんだ。

「はいはいはい。上位までつなぐよ～」

バットを軽く地面に数回叩きつけて、バットを寝かせて持つ。

「はいっ！」

2球続けた変化球を捉え、センター前へ持っていく。

「ブルーソルジャーズ一点追加！」

「どんなもんだーい！古鷹見てくれた!?」

男勝りの加古さんは姉の古鷹さんにアピールする。

温厚な古鷹さんは拍手をして祝福している。

「さて、大鳳さんです」

ネクストバッティングサークルからゆっくり歩いてくる大鳳。

(おお、男子三日会わざれば刮目して見よやな)

そう守高が思つた。雰囲気が違う。

(思わず男で例えたが、女だつたな：)

そう横目で見ながら、自らの譖謔の無さを恥じ入る。

(…!)

僕はスタンドでその霸気を感じ取つた。

「おつとようやく本気になりましたか」

明石さんが一言言つた。

「金剛さんは何を言つたのでしようねえ？」

金剛姉妹はブルーソルジャーズのコーチングスタッフに徹している。

一番上の姉の金剛さんは監督を、次姉の比叡さんは一墨コーチャーを、三姉の榛名さんは三墨コーチャー勤めている。末妹の霧島さんはヘッドコーチである。

「結局、最初はガタガタなのにホームランを打ち、その次は沈んでいて提督の思うつぼ、3打席目はやる気ですか…提督もどうなるのか見ものですね」

明石さんは煽るように実況していた。

(…もしかして)

そんな中大淀は一筋汗を垂らした。

(あの事話したんですか…!?)

(アレは提督の父親よりも秘中の秘ですよ！鎮守府でも、政府でも限られた人しか知らないやつです！)

声にならない叫びをしていたが、他の誰にも伝える訳にはいかなく、ただ悶々とするばかりであった。

「…」

聞いてしまった。

もう本当に戻れないんだな。

恋した気持ちは渾渾の如く広く、深潭の如く深い。

(迷つてゐる場合じやない)

そう思い打席に入る。

(提督、遊びも悔いが無いようにしてゐんですね……)

そうなつたら迷いが無くなつた。いや、消した。

(最高のプレーを……)

バットを持つてたあの時の感覚が分かる。

ソフトボールは投球距離12・19メートルの競技である。野球の18・44メートルの投球距離よりかなり近い、反射神経の競技である。

あの反射神経を体で思い出せ！そうすれば第一打席の再現が出来る……！
確信があつた。

提督を打てるという確信が。

「たああああ！」

沈むハードシンカーを点ではなく、落ちていく軌道ごと捉えていく。

「打つたー！」

高く上がっていく打球。

ライト方向へ飛んでいった！

大きくジエスチャーする大鳳。

それは往年の名選手カールトン・フィスクのように、強く入れという願いであつた。

「入るか！入るか！入るか！」

ライトは川内であつた。

フェンスをまるで床のように駆け上がる。

（上空に向かい風に変わつてゐる……）

打球の勢いが風で殺され始めてるのが見える。

「よつ！」

風に捲られて落ちる帽子。

髪の毛も揺れています。

軽く背伸びをして、グラブの中にすっぽりとボールが収まつていく。

「すごい……！」

こう漏らしたのはそう、神崎さんだつたか。

「川内！ホームランキヤッチのナイスプレー！」

球場全体が沸き立つた。最後まで諦めない気持ちが産んだ好プレーに敵味方問わずの歓声であつた。

「スリーアウト！」

明石さんは明るく言い切つた。

「大鳳も良い打球でしたが、運がなかつた。風があそこで吹き戻すとは」

大淀さんはそう分析する。

屋外野球は気候の競技である。

乾燥した空気はボールが飛ぶようになり、雨で湿つたボールは飛ばなくなる。
追い風、向かい風にも影響される。

今回は大鳳さんに天気は悪い目として出たのである。

(まあ：投入初戦、魚雷一本で沈んだ空母だしなあ…)

そういうバックボーンは彼女にこれからついて回るのであろう。

それが艦娘。人間の形をした船。

「4回表が終わつて4—2とブルーソルジャーーズがリードしました」

「ここまで提督と山口海将補しか打つてませんけど、水雷戦隊もこんな物じや終わりま
せんよね〜」

明石さんが大淀さんに話を振る。

「そうですね。そんなやわなあの娘達では無いでしょ」

大淀さんはそれを肯定し、やさしい瞳を向けている。

「信頼しているのですね」

サラトガさんが聞いてきた。

「そらもう、あの娘達は色々なものを背負つてきましたから」

：記憶はそう古くない。

2014年の春。あの時発表した海上自衛隊の自衛隊員が提督だつた事を思い出す。

そして、あの時の艦娘はあのグラウンドに居る娘はあの4人だつた。

「色々なものを背負つてきたんですね」

彼女らの背中が大きく見える。

深海棲艦がここまで世界を席巻した理由はその兵員としての総量もあるが、それより重要なのはその再生能力の早さである。

普通の銃弾ではマシンガンの如く滅多撃ちにして、再生能力が上回るスピードの殺し方をして、初めて深海棲艦を足止め出来るのである。

既存の武器で完全には殺せない事、それが深海棲艦の大きな強みであつた。艦娘はそんな実弾で殺せないという欠点を彼女らの砲が解決した。

その事が分かつたのが約1年とちょっと前である。

そこからは艦娘の適正がある女性を探していき、その技術は大国同士のパワーゲームにもなつた程である。

(結局、全世界に艦娘の技術が拡がったんだけど、日本はかなりお金を得たんだよな)

そんなたつた4人から今は全世界で1000人に近い艦娘が拡がって行っている。

海上自衛隊海上女性職員部。

それは国民、いや全人類の希望の拠り所であつた。

2番の深雪ちゃんがバッターボックスに入る。

「どりやああ！」

高めの球を引っ張つて打つ。

三遊間に飛んだ打球はショートの古鷹さんが飛びついて、ワンバウンドの打球をキヤツチし、一塁に投げようとするも、深雪ちゃんは一塁に駆け抜けた後だつた。

「深雪、内野安打！」

古鷹さんの守備能力は高い。だが、ソレより深雪ちゃんの執念が勝つた。

「ノーアウト一塁で山口海将補です。チャンスを広げる事は出来るのか」

(…、覚悟か)

山口海将補はバットを叩き、構えた。

(ここ)の全ては俺が生きてこそ支えられている)

「オラッ！」

スローカーブでストライクを取つてきた球をライト前に持つていく。

(千歳は瞬発力が艦娘の中でも上位だ…)

現に今の打球もスライディングしたら飛球をキャッチ出来るチャンスがありそうな守備であつた。

(大和、大鳳、島風みたいにバッカグラウンドがあるなら納得行くんだけどな…)

前者一人は野球またはソフトボールの経験があり、島風は日本における女性陸上選手の最高傑作と言われた元選手である。

「…」

だが、千歳はその類に入つてない。確かに中学生までは運動部だったが、高校以降は特に部活動等をやっていた形跡はなかつた記憶がある。

その考えが頭をもたげ、一墨に到達後、千歳の方を見る。

千歳はその視線に気付いた。

「私が何かー？」

右手を口の横に添えて俺に話かけてくる。

普段気にしないで居るが、あいつへの好感度の高さは上位10人に入る。艦娘は体力勝負であると同時に、すり減るメンタルのケアを如何にして行えるかがミソである。

あいつが艦娘を沢山抱いている理由の7割くらいこの部分が大きい。別に立場を利用了したみたいな無理矢理でもなんでも無いのだ。どうしても不定期かつ娯楽の無い戦

いの連続は艦娘としての強化を加えても色んな欲望に戸立てられない。まあ、その抱く行為を初めてしたのは先発の大和の入部が原因だつたりする。

後の3割は結果的にこの用に男女の仲になつて良かつたという意味である物だ。正直俺にもまださわりの情報しか教えられてないものだ。正直後付でもかなりヤバい状況なのであり、理由を持たせそつと良かつたと言わざるを得ない。

「千歳は練習したのが分かるな、判断の一歩が違う」

俺は褒める。アイツが得意な事である。

「知つてます？ 愛は盲目じや、この鎮守府はやつてられないんですよ？」

「そうか」

彼女はどんな事でも自己鍛錬を怠らないんだな。ちゃんとアイツの教えは守られてる。

その事が言いようの無い嬉しさを感じている。

それを聞いたのか、大和はずつと保つていた真顔を崩し笑顔になつた。

「良いですね。私が見込んだ男がこうやつて慕われてるのに嬉しく思います」

そう言つて投球モーションに入る。

「だからこそ、勝利は譲れませんよ！」

そう叫んだ大和はクイックモーションで提督に投げていく。

スライダーは内角高めから斜め下へ滑空していった。

「！」

提督は吸われていくようにスイングをする。

(凄い。あのスライダーは今までで一番打者を騙せる軌道だ)

ベンチの杉野はその軌道に感銘を受けた。

杉野は速球派ではない。

カットボールを主体にしながら変化球で凡打を誘う、完全な技巧派である。

体型も大きくなつたが速球のスピードが頭打ちであり、今でも速球派が簡単に乗り越えていく一種の踏み絵である 150 km/h には届かない。

(羨ましいなあ)

大和さんの速球は人間をやめているから出せるのだ。一般的な女性のストレートは 120 km/h 超えれば凄いと言われているのである。

人間を辞め、機械と一体になつた女性。

(でも、大和さんも苦労してそだよなあ)

艦娘になれる人間は潜水艦になる人間以外は人間時代そのままの体型である事が多い。 187 cm という男でも大柄な部類である。(あんな大きいと何かしら言われるんだよなあ)

人間、目立つという事は良いことも悪いこともやつてくる。

：少し会話をしたが、本当やまとなでしこに身体のデカさを付け加えた感じである。

俺はたおやかな美しさの神崎さん。そんな神崎さんに肉体美を付け加えたのが、大和さんであり、東洋的なおしとやかと西洋的な身体の発達を両在させた女人である。

（そんな奇跡みたいな人が居たんだなあ：）

と羨むような、気の毒のような、定まらない自分の心の異物を感じた。見ることをやめたいのに、ずっと大和さんを見続けたい気持ちだと錯覚させられる。

そんな奇跡の様な存在を娶ったのはあの提督なんだよな。

提督はどうやって大和さんと付き合う事にしたんだろう。

「空振りの三振！ 提督、ランナーを動かす事ができません！」

明石さんの実況が響く。提督は失敗したという顔を一瞬見せたが、切り替えたのか次の打者である吹雪ちゃんに耳打ちしている。

「何か話していますね」

「ああ：二年経つてないのに何故か懐かしいですね」

大淀さんは少し笑みを浮かべていた。

「吹雪さんは打ちますよ。きっと」

：大和さんの投球は凄い。

右打者にも左打者問わず内角外角を自由に支配する。

約5ヶ月前に大和さんは鎮守府に入ってきたそれからわずか5ヶ月でこの投球スタイルを確定させてきた。

打席に入る。

「アイツ、俺に対して直球を使わず、変化球で空振り取つたから一球目は変化球で行くはずだ」

「えつ、なんでですか？」

「あいつの思考ルーティーンは戦艦になる前から知つてゐる。ここで直球を選択という真つ直ぐな投球をするつもりは毛頭ない」

「と言つても変化球つていくつあるか分からんじや…」

「吹雪、お前の長所の一つにお前は四球を選べる辛抱強さがある」

「はい」

「ならボールゾーンで勝負してこない。ゴロ狙いでシユートを投げてくるはずだ」

「そうですか」

「じゃあ行つてきます」

「よし、打てよ！」

「…」

私は艦娘の時のように電探を耳にはめてないので今は小声の会話は聞こえない。

「…」

戦艦大和になつてから提督がしてきたことのあれこれを知つた。

鎮守府の財政事情から事務のやり方、艦娘達の良いところを見つけ。悪かつたところを優しく諭していくなどやる気を維持させ、娯楽を絶やさない事、一人ひとりをモノ扱いせず、見ていくことだつた。

私は秋津洲さんにサインを送つた。

「かもっ！」

秋津洲は驚いた。

正直自分の事なんてボールをちゃんと取つてくれれば良いと思われていると思つていた。

最初は確かにそうだつた。

だが大和はピンチになつてその方針が変わつた。プロテクターの中で驚きが隠せない。

——大和さんはマウンド上の王様であることをやめたのだ。

「…」

何か提督と吹雪ちゃんの間で何かかわされていたのは聞こえていた。

4回1アウト1・2墨。

外野の間を抜ければ同点である。

(譲れないのかも?)

負けるわけには行かない。自分の考えは全て読まれている。

：それでも提督の育てた物に勝つ。

(大和さんのアレコレは私が入ったのが大和さんのほとんど変わらないから知ってるかも……)

そう思いながらサインを出す。

大和さんはそれに頷く。

(凄い殺氣の発露……)

私は完全にマウンドに行くのを諦めた。

もしかしたら一つの嫉妬かもしれない。

(でも、無理だつたんでしょう……)

サインの交換を終え、クイックモーションで投げる。

それは、過去との決別に他ならなかつた。

「あいつ、変わつたなあ」

俺は秋津洲のサインを見て、感慨深くなる。

「あー、あとで吹雪にメシ奢らないとな」

大和は独り相撲をする行動が見られていただけあって、ああやつて臨機応変が出来るのは喜ばしくある。

白雪はそんな俺の隣に来て、呆れたように言つた。

「これでダブルプレーになつたら、私達にも奢つてくださいね?」

「…お前も言うようになつたなあ」

「司令官の成果ですよ」

(…まああいつが自分自身の考え方の偏りに気づいてるって事はこれも経験だ。いろんな思考ルーティーンを覚えていく事は喜ばしい事だ)

吹雪さんは2ボール1ストライクになつていた。

(最初はストレートに慌てちゃいましたけど、空振りさせようとするスライダー2球でした)

「あーなるほど変化球で空振りを取つて、追い込まれたらシユートにするんですね」

僕の疑問は氷解した。大和さんがいきなり秋津洲さんにリードを任せた理由が分かつた。

僕と大和さんは戦い方が何故か似通つてるような気がしてくる。

とにかく正面から戦わない。高精度のボールがあつても信じるのは相手の裏をかく方法である。秋津洲さん的方法は違う。裏をかくのは最後だけにしようとしてる。

(シユートを使わないか)

ダブルプレーを狙うなら低めを使うのはあのシユートは有用であつた。秋津洲さんは何を狙うのだろうか。私は右打者における弱点にありがちな外角に逃げるスライダーを苦にしない。

(一二塁の走者が居るけど、全く意に介さない感じがするリードですね)

まあ大和さんのスペックを考えるとそっちの方が正しい。

正面切つて戦う実力があるが、邪道に走ろうとする。

(それが意味してるのはなんだろう…)

自衛隊員になる前、高校生の時には勉強や遊びの合間に教育の事は調べていた。簡単に言えば、明治時代から教育の根っこは変わらないのである。

ナンバーワンは上に汲み取りつつも、強者になれない人でも最善の「兵士」足り得る統一感や最低限の能力を詰め込むのであつた。浅野校長はその形を意図的に崩し、弱者を作り、強者の量を増やそうとしていた。殺せんせーはそれを認めつつも自分の考え方として弱者の戦いを覚えさせながら、長所を活かさせ、新しい道へと導いた。

大和さんの投球はその弱者に推奨される投球なのである。

どんな教育を受けてたんだろうか。

秋津洲さんくらいの様な思考みたいに然るべきタイミングで裏をかくという、リードが適切なタイミングをもつて普通の人に対して普通の人が適切な裏をかくというのが、野球である。

「吹雪選手がスローカーブを打ったー！一二塁間を抜けてヒットです」

正直方法面ではどつちか上下とか無い。相手を騙せれば良いのだ。そう考えると大和さんはこのタイミングでの露骨なリード変更は下策と吹雪は思った。

「大和さんと秋津洲さんのリード変更するタイミングがわかりやすかつたのがダメでしたね」

僕は思つたことを言つた。2対1のババ抜き（但しアドバイスは可能）みたいな物である。

その2の強みを捨ててしまつたものは1が有利になるは必定だつたわけだ。

「そうですね。ただ、ちゃんとお互いに尊敬しあげれば良いんですけどね。日向さんだつたら怒つてますよ。アレ」

明石さんが大和さんの行動を呆れながら言う。見方によつてはイケイケの時は自分の好き放題やつてピンチになつたら頼るようなものだ。

「まあ、秋津洲は戦いの時は守られてる方だし、アレくらいやらないと元が取れないです

けどね！」

と言う軽口は秋津洲さんとは共に戦場で艦娘の修理を行つてゐる明石さんらしい発言である。

「まあそれでも良くやつていますね。明石だつて兵装に頼らない武術、あれ完成させてないじやない」

大淀さんが咎める。

へーそんなの編み出そうとしているのか。

「あれはいかに致命傷を負わず、一発で交戦を離脱するやつだから、自分の手を潰さないとイケない時間が必要だし……。腕怪我したら入るドツグも必要で、秋津洲や夕張とかに仕事を負担させないといけないからしょっちゅう出来ないし……」

確かにそれは頼みづらい……。

「うーん、あの二人も別に悪くないけど、工業的な部分は全部知つてゐるのは明石しか居ないのも確か。提督と話し合う機会作りましょう」

大淀さんはそう、結論を締めた。

打席には那珂さんが左打席に入つていった。

「よーし！応援団のみんな～！私の応援歌お願ひ！」

そう言つて外野席に居る第四駆逐艦に向けて、コールをする。

「イエーイ！ かつせ！ かつせ！ なーか！」

第四駆逐隊の4人が一斉にスタンドの一一番上から応援しだす。

僕から見て、右から嵐さん、萩風さん、舞風さん、野分さんである。

「集団応援は盛り上がりりますね」

神崎さんは表情を緩めて言つた。

那珂ちゃんは艦娘になる前からアイドル志望だつたらしい。

自分で色んな振り付けを作つて、ファンと一緒に踊つたりする。

ものすごいマイペースかつ外向的な性格らしく、E組での担当の中村さんとワイワイやつていたらしい。

バツティングフォームも常にバットが微動しているモーションだ。

(あ、あれ…。タイミングを取るんじゃなくて、応援にリズム合わせているぞ)

何から何まで彼女はアイドルなのである。どんな時でも誰かが応援してると自已認識だけは誰にも負けない。

「ボール！ スリーツー！」

那珂ちゃんはそんな芯の強さを發揮しながら、フルカウントまで持つていった。

「凄いな、際どい球は全てカットしてる」

最初の打席は空振り三振だが、目がついてきたのか。

逃げるボール、身体に向かっていくボールも尽くカットしているのである。

「…」

（甘い球にはしたくない…）

大和はそう考えた。

これ以上打線が繋がるのを防ぎたい。

（スライダー、内角低め）

クイックモーションで投げた球は、美しく左打者の膝下に入していく。

「それ、ウイニングショット頂き！」

那珂は叫びながらその球をスイングしバットに当っていく。

（！）

「打つたー！」

あんな際どいコースで引っ張るのか！

「ライトバック！ライトバック！」

千歳さんが背走していき、ライトのフェンス前で止まつた。

「犠牲フライには充分の距離だ！」

走者がボールの行方を見ていた。

右翼手の千歳が球を落とさずキャッチする、と同時に2、3塁走者は走り出し、3塁

とホームベースを通過した。タツチアップだ。

「那珂！犠牲フライ！一点返しました。なおもツーアウト1・3塁」

那珂は自由にやらせるのが一番だ。

軽巡洋艦の中でパワーは劣っているが、ケース打撃の判断力は優秀だ。
一航戦の守備能力だと転がすと何でもダブルプレーにされるからな。
「いつもありがと～！」

ライトスタンドの第四駆逐隊にねぎらい、一墨線から離れていく。
自由な奴であるが、自由にさせるだけの価値がある。

そうベンチで佇み、提督は思った。

あの一件以来お互いに腹を割つて話せたしからな。

アイドルも艦娘も諦めない、その覚悟が見えてくる。

「良いぞ、那珂！」

俺はベンチの前でハイタツチを促した。

と言つても身長差があるため、俺の肩と並行に伸ばした。

「はーいタツチ！」

そう言つてバットを片手にタツチする。

「よくやった」

「ありがとうございます！お仕事遂行しました！」

那珂の笑顔は満面で堂々としている。

二人でベンチへと戻っていく。

「後続は白雪と杉野くんですね」

今日は杉野にレフトの座を譲っていた神通がベンチでつぶやく。

その言葉を耳にしながら、提督は神通の隣に腰を下ろす。

「どうだ、俺が見てない間でも練習や試合してただろ？ 杉野はともかく、白雪は打てるんだろう？」

「杉野くんに課題与えたのは提督なのに、その態度はどうかと思いますよ」

うつ、神通の若干棘のある言葉が刺さる。

彼女は左翼手で出場予定だったが、ねじ込まれた杉野に追い出されてしまった。生真面目に一週間前から用意していた彼女にとつては青天の霹靂だった訳だ。

「来たばっかりのあいつらを信頼してないか、か？」

「……」

まあ、そだらうな。

一応色々と根回しはした。

だが、俺たちは大きな隠し事をしている。

それはこの世界を搖るがす程の秘密だ。

「ここにいる艦娘と政治家と自衛隊のごく一部しか知らない。

「…あのまんま放つておいても、可哀想なだけだし、まあ知られた時は知られた時だ。こうやつて聞こえないであろう距離でも聞き取れるやつが居るかもしけんぞ」

そう俺は言つた。政治家や内閣府の中のパワーバランスの中で、防衛省、警察庁、海上保安庁の間で乗り気になれない競争が起きてしまつた。だから2月の暮れに貧乏くじを引いたのである。こつちはこつちの秘密を守りながら、相手を鎮守府に2年過ごしてもらうという、虫のいい計画である。

「…私はただ、」

「分かつてゐる。それでも俺たちは、ここまでかすかな前への道を手繩り寄せて來たんだ。あいつらを戦争に連れ出した人間は何かしらを狙つてゐる。それは恐らく最低俺たちの足を引っ張る為だ」

「最低は、かあ：。最高は提督の無力化でしょ？そんなに悠長な事言えるの？」

川内は横から会話に入つた。彼女もやはり気をもんでいるようだ。

「…そうだな、おそらくE組を送り込んだのもそいつの手なんだろうなあ。ならまだ俺と大和までだ」

「…それでも、『その先』はあるんですね」

神通が眼を伏して靴の紐を結び直しながら返答した。

「…まあな。他言無用というか信じてくれる可能性すら薄い話だ」

そう言つて自分用に用意されたゲーミングチエアに腰を下ろす。
：息抜きにパソコンゲームする時用にゲーミングチエアがあるが、それよりはやっぱ
り座りやすい。

まああるだけあり難い。疲れ始めていた身体には染みる物がある。
「色々懸念材料があるのは分かる。というか本当あつさり逃げ出す、とかしてくれた方
が確かに良いんだけどな」

俺はライトスタンドに視線を向けた。メディア席の周りにはこの試合を観に来てい
るE組と水雷戦隊の主だった艦娘達が雑居して座っていた。

「…俺らが言えた口では無いんだが」

一言ぽつりと話した。

今まで喋っていた二人は恥じ入ったように口をすばめた。
と同時に控えに居た夕張が荒い声を出す。

「全く、そんな過ぎたこと言つたつて仕方ないでしょー」

「…夕張か。お前俺の後やろ」

そろそろブルペンに行つておいて欲しかつたのだが。

「（ご）心配なく。五月雨ちゃんと今行くつもりです」

…さみだれ？

「あのドジっ子具合とあの体格で捕手務まるのか？」

俺は疑問をぶつけた。捕手はかなり注意力の要るポジションである。

五月雨はそういう注意力に欠けてるようだ。

「小型艦に捕手志望少ないですし、座らせる程度には出来るように仕込みました」

小型艦は確かに捕手をしづらいだろう。的が小さいので、ボールを止めるプレイの難易度が高いのだ。

「色んなチームの分け方出来るかと思つたがキャッチャーだけはどうにもならんか…」

「今回は山口さんで良かつたけど、一昨日艦娘になつた秋月さんは駆逐艦でも体格良いですし、捕手やらせてみれば良いと思います」

神通が冷静に進言してくる。

「確かに秋月は軽巡洋艦並の体格がありますけど、あの姉妹は13人に居るから他の姉妹が出揃うまで待つたほうが良いのでは？」

吹雪型、陽炎型、綾波型、夕雲型：姉妹同士のつながり、艦娘は姉妹を、更には上位の艦艇を敬慕する。そういう風に出来ているのだ。

「白雪が打った！」

右中間への流し打ちが決まった。同点の三塁ランナーがホームイン、一塁ランナーが三塁、白雪は一塁に到達した。

「次は杉野だ。勝ち越して欲しいが」

提督はそれまでの話を打ち切り、杉野の一動作を凝視し始めた。

「提督：そんな名探偵うざこちゃんみたいな目線じゃプレッシャーになりますよ
神通が嗜める。」

「ううつ…凄い視線を感じる…」

俺はそう背筋に薄ら寒い物を感じていた。

(まあ…そりやあそういう目線だよな)

提督の眼力に強さに慄きながら、打席に立っている。

大和さんとの対決は1打席目三振であった。

(変化球を見せられると頭の中に入っているはずのストライクゾーンがめちゃくちゃになる…！)

シユートもスライダーの投げ方にわかりやすい癖があるなら苦しんでいない。完全に錯視の世界である。正直プロ野球でも飯が食える、変化球のレパートリーである。

(！)

内角ショートだ！

「うおつ！」

すんでのところで腰を思いつきり退いて回避した。

（手加減無し…）

ツーアウトだから投手も捕手も全開だ。

右打者のショートはホームベースから離れて俺を立たせようとしている。
ということは外角で勝負してくるはずだ。

次の球は思つた通りに外角に来了。

全力でバットを振る。

ところがボールは振ったバットの根本に向かつてショートしてきた。

「うおー！そっちか！」

ミートスポットの根元に当たる。

と、同時に木製バットにヒビが入り、打球が前に飛ぶ。

俺はバットを放り投げ、一塁へと全力疾走する。

（うおーっ、もつと良いところに転がれー！）

投手の右横へ勢いよく転がつていく。

「ショート！」

打球速度は根元に当たつたにしては速く、大和さんは反応が遅れた。

「させない！」

古鷹さんが素早い足運びでボールに近づく。失速していく打球をグラブの持ち手じゃない右手で掴んでそのまま身体を独楽みたいに大きくファーストへ投げた。自分の全力疾走との競争。同じタイミングかと思つたが、墨審はアウトのポーズ。

こうしてレッドオーシャンズとブルーソルジャーズは4回裏が終わつて、4—4の同点であつた。

5回の表になつたが提督はアウトより四球が多いという有様であつた。

ツーアウト満塁。

打者は千代田である。

「あーっ、押し出し！押し出しです！」

初めてストライクが一球も入らない押し出し。

5点目がレッドオーシャンズに入つた。

(…限界か)

そう思いマウンドに向かう山口。

この回3回目の四球。

草野球だから何度も行つても違反では無いのだが、試合を長くしたくない。向かいながら一塁側のファウルグラウンドに目線をずらす。夕張が五月雨を座らせて投げている。

（大丈夫そうだ）

「宇田川海将！」

下の名前で呼んだりはしない。大勢が見ている前、彼自身のイメージを悪くする前では特にだ。

「もう降板したほうが良いみたいだな」

提督の声色は明るい、だが顔の表情に余裕がない。悔しさを必死に噛み殺している。

「この悔しさは次の試合に活かそう」

信悟の周りには内野陣が集まっていた。

「司令官……」

始まりの駆逐艦達は四人四様の顔をしている。

不安そうな吹雪。

いつもの通り笑顔な深雪。

無表情で感情を表に出さない初雪。

至つて冷静沈着である白雪。

どれも目をそらさずに俺を見ている。

尊敬されているのである。

だから、自分の遊びにまでにも全力で挑んでくれるのである。

俺は英雄にならない、だが彼女達を導かなければならぬ。

俺たち3人はその為に居るのだ。

「よし、白雪ショートに移れ、サードに吹雪が入つて、俺はファーストになる」

自分の降板による打力低下を防ぐ為に一番打撃力が劣つている初雪をベンチに下げる。その代わりに守備力が下がるが負けている今には必要なリスクだ。

「夕張！頼む！」

その声を聞きながら夕張が走り寄ってきた。あまり俊足の類ではないので、全力疾走である。

「はーい、夕張さん到着、今からブルーソルジャーを抑えますよ！」

普段は緑色の髪をポニーテールにしているが、試合に支障をきたさないようにしてい るのか今は妙高のような編み込みの髪である。五月雨にそうしてもらつたのだろうか。

「じゃあみんな、定位置に就いて再開だ」

「おー！」

と言つて俺らは変わつたポジションへと散開していく。

「レッドオーシャンズは投手が夕張に変わりました」

実況の明石さんが高らかに実況した。

夕張さん。兵装実験で産まれた軽巡洋艦。小さめな身長は日本で一番小さな軽巡洋艦という部分での再現だろう。と言つても大鳳さんや瑞鳳さんよりは大きく、茅野より。そんな彼女はメンバー表に左投左打と書いてあつた。

「夕張さんはどんな投手なのですか?」

僕は大淀さんに聞いた。

「サイドスローからクロスファイヤー、スライダーとナックルカーブ、ナックルが武器です」

淀みなく大淀さんは答えた。

「3つの武器がありますね」

僕は彼女がどういう投手になりたいかがわかつた。大和さんの投手の技術を取得しながら、ナックルという自分の理想を両方とも詰め合わせた物だ。

先ずクロスファイヤーはサイドスローの問題である反対側の右打者を料理するため、スライダーは左打者に限らずクロスファイヤーで腰を引かせた右打者の膝元に狙えれば有効だ。ナックルカーブもナックル習得のついでに二つとも覚えたのであろう。それにしてもナックルボールは手の全部の指の力を使い、大きなボールを掌全体で捉えな

いと投げられないボールであり、日本人の手の大きさではナックルを十分に扱えない事が多い。近年山崎康晃が極稀に投げるが、それ自体を武器にしてはいない。

「おー、夕張、初端から挨拶代わりのナックルですか」

明石さんが感嘆した声をあげる。無回転で重力によつて下に落ちる球に秋津洲さんは為す術もない。

あつという間に三球で三振をとり、エンジである。山口海将補のキャッチング能力はここでも冴えている。

「ナックルに対応が出来るのは凄いですね山口海将補」

ナックルの最大の武器は無回転ということでコースの予測がしづらい事だ。それは捕手にも言えることであり、上手な捕手でもキャッチが出来ず後ろに逸らす、いわゆる後逸が多くなる。

(…ん？秋津洲さんならストレートでも大丈夫なのに…)

なんでの満塁時にナックルを…？何故、山口海将補はそんなことを…？

(…)

ベンチに走りながら戻る山口海将補は無言であつた。だが眼はギラギラと光つているように見える。

(印象を植え付ける、これが1つ目の仕事)

「山口さん本当キヤツチング上手いですね」

夕張がいつの間にか横に並走していた。

右手のグローブで顔を隠しながら話しかけてきた。

「佐賀にジョー・マウアーあり、それに名前負けしないようにはしてるぜ」

「やっぱりナックル投げさせたのは狙い通りでした？」

流石夕張だ。その辺の智囊は持ち合わせている。

「そりやあ、まだ試合では三回しか投げてないんだろ？向こうにナックルの影を印象付ける意味合いだな」

俺は出来るだけ声を潜めて言った。

(提督の下でこの人が居るというのはやはり大きいわね)

夕張は2ヶ月前の事を思い出す。

何度もある艦娘を仲間に入れる為に提督の心の穴を埋めるべく必死だつたあの時間を考え出す。深海棲艦と戦つて勝利を得る方がはつきり言つて簡単だった。

(それが今度は学習補助という名のある種のお客様、ですか)

ベンチが見えてきた。提督がベンチ前に立つて、他の野手達を出迎えている。

「不甲斐なくて済まない。だが、また反撃可能だ。行くぞ！」

提督が発破をかける。

「私が最初の打者ですね」

夕張が左打席に入る。

大和の一球目は外角を逃げていくシユートボールを何の臆面も無く打ち返した。だが、打球を遠く飛ばせるバットの芯の部分に当たらなかつた。ボトンと三塁の前に転がっていく。加賀は猛ダツシユでボールに近づき、ベアハンドキヤツチで一塁に投げた。

「あーっ、夕張選手の足は遅い」

そういや忘れていた、夕張は足が遅いんだつた。

夕張の足はあつさりと加賀のストライク送球を前にして敗北を喫した、その後も三者凡退になり大和は5回裏を投げ終え、勝利投手の権利を得た。

「大和さんは結局マウンドから下ろせなかつたか…」

（段々と集中力が上がつてゐるな…）

俺は大和の顔を見た。

（脳は動くが、身体が動かなくなる境目のあたりだ）

（だが、）

俺はその事に嬉しい物がある。

（最初はあの身体持て余していたからな）

そつか、あの時もあいつは強かつたからな。

(もしかしたら、彼女の可能性を理解できてないのは俺なのかもな)

そう思いながら、6回表のファーストに走つていく。

6回表は打順1人目の加古がレフト前のヒットを打つたが、大鳳を三振、古鷹をダブルプレー、赤城を三振に討ち取つた。

6回裏は好打順である。

一番の川内がクロスファイヤーのストレートを痛打。ライトフェンスの直撃の单打で、次の打者深雪がバントを三塁手の前に送つた。ところがその送球がファーストの赤城がジャンプしても届かない程の悪送球。ネットにぶつかって、その向こうの海に到達せずにポトリと落ちた。ファーストの赤城と投手の大和がダッショウでボールに近づいていく。一塁側のファールゾーンは平均的な広さだが、ファールゾーンの向こう側には、海に面する一塁側のスタンドとライト側のスタンドを繋ぐ、細い道しか無い。そのネットに当たり、落ちていくボールを獲つたのは赤城であつた。川内は三塁、深雪は二塁に到達した。

「同点のチャーンス！ここはクリーンナップの山口海将補と宇田川海将が控えています！」

(…大和は総力を尽くして俺を止めに来るであろう)

ノーアウト2・3塁。敬遠しても次の信悟に対してノーアウト満塁という危険な状態になる。

（じゃあ、抑えるしか無いよなあ！俺をなあ！）

アドレナリンが吹き出る。バットを持つ手袋に汗がにじむ。力だとほぼほぼ勝てない、だが俺には技がある。大和がセットポジションからクロスファイヤーのストレートを投げた。秋津洲はここに来て賭けに来た。

「おつーと、三塁の川内が走っている！スクイズだ！」

バットを横に構えて、屈んで視線をストレートに合わせる。そしてボールを一塁線へと押し出すため、バットを僅かながら短く構えた。打者側から見て狙うポイントは投手の右手前。大和の加速力の無さを狙う！

⋮コツツ。

同点を狙うバントは転がつた。

「⋮なんだと！」

俺は驚愕した。ボールが転がる先にセカンドが、加古が居た。

「あーっと！なぜそこに居るセカンド加古！」

左手のグラブで掴んで、即座に捕手へグラブトスする。

川内もホーム直前まで来ていたが、後戻り出来なかつた。川内は本塁で憤死すること

になる。秋津洲はその動きのまま前進を止めて、一墨に戻っていた一墨手の赤城に投げてアウトとなる。

「ダブルプレー！」

「おおおおおおおお！」

ノーアウト2・3墨がツーアウト3墨に変貌してしまう。
大歓声が巻き起こる。

「oh! Amazing!」

「Excitingかつgraceなplayでした！」

大きく声を挙げて称賛するアメリカ艦の一人。

(確かにあのバント、一二墨間へ行くボールだったけど……。多分少しでも投手よりに転がつたら大和さんは反応できたと思います……)

だが、そこに行かなかつた。

なんという技術力だ。

だがそこに転がつたボールはセオリーに反したセカンド加古の超反応に負けたといふ事だつた。

「…」

提督、宇田川信悟は嬉しかつた。

正直自分の趣味を押し売りしたような物であつた野球が、みんなのおかげでこんなにレベルが高く、そして楽しめている自分が居た。

そう、一瞬過ぎた心をバットでヘルメットをつけて軽く叩いた。

(喜ぶのはまだ早い)

どんな勝負でも負けない。その心を埋めるためならなんでも良かつた。自分の好きなものを選んだのは自分の勝手な願いだつた。

彼女を打つ事になるとは、その時は露程も思つていなかつた。

(遠く打つ必要は無い)

ツーアウトだ。フライ気味に打つのは最適解ではない。ホームランを最初の打席は打てたが、それは心の隙を突いたものである。

(今の大和はどうだ…?)

今まで一番自然体の様に見える。

(打たれて疲労した分、無駄な力が抜けるところもあるが、こつちの意図もバレバレな場面を考えると…)

と考えると高めのボールゾーンにストレートが来た。

「ボール!」

審判は予定調和的にボールボイスをする。

(アマチュアの審判も兼ねてているだけあつて、ボールゾーンが一定だな)

そして、秋津洲は自分の予測と大体同じにしてくる。だが、最後は外してくる。
(そこまでに打つ必要がある、が…)

2球目はど真ん中から逃げていく高速スライダーであった。

今までにはストレートと同じ投球フォーム、近い球速の球であった。

だが、今の球は疲れを誤魔化そうとして自然と腕を伸ばしたと言うより、やや意識的且つ無理に伸ばしている。そのようなズレは俺の目には騙せない。若干の投球モーションのズレはコントロールの乱れに繋がる。

(やつぱり…!)

今の大和が投げた球は先程より数センチ俺の内側に投げ込んでいる。それならば外角のコースの右下を振り込めば打てる!

「打ったー！」

明石が叫ぶ。だが、俺は自分も疲れている事に気付いてなかつた。

「速度がありますが、打球は上へとあがつて行きません。センターライナーー！」

(きちんとした角度で打球を叩けなかつた)

そう思い大和の顔を見る。ほつとしていた。が、俺の顔を見ると少し控えめで嬉しそうな顔をしていた。

(お前はいつもそうだな)

と思いつつ俺は自分のベンチへと戻る。大きな優しい大和撫子。

(俺の最初はこの人で良かった)

は、いかんいかん、打てなかつた上、更にこの後はファーストの守備がある。早くベンチに戻つて帽子とファーストミットを…。

「司令官…」

控えになつた初雪がファーストミットと帽子を持つてきてくれた。

「お、ありがとう」

俺は両手で差し出されたその2つを取り、代わりにバットとバッティング用の手袋を渡す。

「…」

初雪はなにか言いたげだ。引っ込み思案とまでは行かないが、基本はインドアで表情を顕にするのも少ない。無口で自己主張しないタイプだ。

「…どうした」

言いたい言葉を引き出す為に声をかけた。

「…野球つて案外楽しいんだね」

そう言つて、伏せがちな目を起こして話した。

「そうだ。俺は自分の経験で野球を推した。他のスポーツでも似たような感動が得られると思うぞ」

赤心なく言つた。正直ここまでハイレベルに戦い合う。そう分かつて作つた球場も無駄にならなそうだ。

「そうじやない…。野球だつたから良かつた…、司令官のマウンドでの姿が、か、かつこよかつたから…」

初雪は真つ赤である。ここまで自分自身の気持ちを晒したのは恥ずかしいけど、言いたかつた事なのであろう。

「…そ、うか。じやあ勝たないと格好がつかないな」

俺はそう言つて初雪の頭を撫でた。それを初雪が嫌がる。

「恥ずかしいからやめて…」

そう言つて頭にある俺の右手をどかそうと掴む。

「おつと」

そう言い、右手を離して、グラブと帽子を身につける。

「この一試合くらい勝たなきや、天下の恥だよ」

と俺は後ろ斜めに向き直し一塁へ走つていつた。

9回裏になつた。お互にヒットを打ち合うものの、点になつたのが7回に夕張さんが赤城さんに2ベースを打たれて、点差が1点差から2点差に開いた。と、なると伊勢さん日向さんが出てくるであろう。

「さて、最終回の裏！レッドオーシャンズにとつてはまだ追いつく点差でしよう。大和に変わつてクローザーの伊勢が出てきます。捕手も秋津洲に変わつて日向が出てきます」

伊勢さん、日向さん：

今思い返して、何故自分があの感情になつたのかがあの時は分からなかつたけど、落ち着いた今なら分かるかもしね。まだ自分には艦娘という物を理解してなかつたのだ。まだ彼女らの事を普通の人間だと思つていたのだ。彼女らは海での栄光も敗北も知り、どんなものでも貪欲に勝利をひたむきに追い続ける姿なのだ。筋肉を増強した肉体、様々な装備を持つ機械もある艦娘はその戦いを強く刻んだモノなのだ。そして人であつた頃の思い出はあくまでも記憶として昇華しているだけなのかもしねない。

「…」

「…どうしたの、渚？」

…もしかしたら、ボクは演技も配慮も必要をしなくなつた「茅野」を茅野と呼ぶことは無くなる日が来る、そう思った。

「なんでも無いよ」

と言つて笑顔で返す。そうやつて杉野はそんな艦娘たちに混じつて野球をしている。

(そうだ、期待されているんだな、杉野は)

2点差開かれたレッドオーシャンズ、先頭は提督の打席である。

「日本のダン・クイゼンベリー」 そう自分を形容した伊勢。

投球練習を始めるが、投球フォームが確かに日本人のアンダースローじゃない。

(確かにクイゼンベリーと同じだな。利き手の右の方に流れていく)

アジア人のアンダースローは腰を傾けて、マウンド前の地面と“一体化”するが如く傾ける。

それに比べるとダン・クイゼンベリーの傾きは浅い。下から投げて行き、左足を踏ん張る事はせず、体は利き手の方へと流れていく。

(投球練習で投げているのは全部直球：)

アンダースローで見てもかなり速い。直球のスピードが出づらいアンダースローでこの速さは出色だ。

(変化球を見せないという手段か、猪口才な)

「プレイ！」

審判が試合を再開させた。伊勢は振りかぶり、投げた。

(外角に直球…)

何も変哲もない速球に見えた。ところが、その速球は一気に自分の身体に向かって曲がつてくる。

「ストライク！」

「おーっと、伊勢選手の武器、高速シユートが出ました！」

(くっそ、明らかに様子見に来た俺をおちよくなつてんな)

もう一度伊勢の投げられる変化球を思い出す。

(シユート、スライダー、カーブ、シンカー…アンダースローで投げる球なら何でも投げられるな)

昔、一回だけアンダースローの投球を見たことがある。下から上に投げる為、球が下から上への浮き上がるよう見える。この投げ方において変化球は独特的の変化をする。(まあ、前に対戦した投手は力不足だったから、ホンモノのアンダースローってのは初めてなのかもしけん)

伊勢は捕手から返球を受けたらすぐ身構えた。

(考え方せる時間を与えさせないつもりか)

伊勢は振りかぶり、また下から上へと投げる。球速は直球と変わらないスピードだが、勢いよくブレーキしていく。

(これは……やばい、ストレートじゃない)

それはMLBで見られるパワーカーブという球種であった。

そのボールはまるで最適解を求めるように外角低めのボールゾーンに收まろうとする、しかし、そう感じるより先にバットが出てしまっている。凡打を避けたい俺にとつては当たないという回避方法しかなかつた。

「ストライク！」

なんとか当たらないように振り、空振りとなる。

「くつ…」

(ここ)まで完全に手玉に取られた…)

日向が捕手になつたのもこの辺の観察眼も鋭いからである。変化球のキレを投球練習の中で見せない事によつて俺を追い込んだ。

こういう場合はこの一人のペースに乗らないことだ。ここで三球目のストライクは來ない。次のストライクにする球質が良くてヒットを打てる確率があがるからだ。

(…と思うだろうな)

日向はそういう氣の緩みを許さないであろう。外したとしてもあのシュートを内角に向けて伊勢に投げさせてくるだろう。
(あのキレのシュートは見たことが無い)

大和から投げ方を教わったのであろう。直球との見極めが難しい上できつちり曲がるシユート。

その思考を知つてか知らずじや伊勢は投球モーションに入る。
(ああつ畜生、どうにでもなれ)

結局三球目は何を投げてくるかの思考が定まらず、伊勢は投げてくる。
(ストレート!)

内角のストレートは上手にコントロールされていて、審判によつてはストライクとなるだろう。だから当てるしかない。

「打つたー！」

明石が叫んだ。

「くつ…」

振り切りが甘い。風もあるのでグラウンド内にしか飛ばないであろう。その懸念はその通りとなりレフトヘとフライが上がっていく。レフトの千代田は当たり前のよう

にフェンスの前でキャッチした。

「千代田取つたー！ワンアウトです」

明石さんが叫ぶ。レッドオーシャンズの敗北が残り2アウトへと迫ってきた。
「……そういういえば杉野くん、まだヒット出ていないですね」

神崎さんが言つた。

「あつ」

僕たちは提督が杉野くんに課した課題を思い出した。

「どうか下手すると打順も回らないのでは…？」

大淀さんが言つた。杉野の打順は8番、4番の宇田川海将が倒れたので少なくとも二人の出塁が無いといけない。更に2点差を考えても2人出ないと同点に追いつけない。

「Mr. Suginoは何されるのですか？」

サラトガさんが聞いてきた。

「提督にこの試合でヒットを打つように、一昨日言われて…」

僕は一昨日の事を言つた。提督はこの試合に出場し、ヒットを打つように言われていた事を言つた。

「言われて？」

サラトガさんが聞き返す。

……あつ。

そう言えば艦娘から打てなかつた時の事を提督は話をしてない。

「あれ？ そう言えばヒット打てなかつたら何されるのかを聞いてないですね」

僕の顔だけじゃなく、茅野も神崎さんの顔にもクエスチョンマークが浮かぶ。

「個人的に話をしたのでしょうか？そういうタイミングつてありました？」

明石さんは僕の顔を見る。

昨日も一昨日と大して変わらない一日だつた。艦娘のそれぞれの勉強に対する意識のデータは自衛隊からもらつて登録済みだつたので、どこまで覚えているのかの試験やヒアリングをして午後15時には艦娘毎に作戦、野球、その他鍛錬に向かい、僕らは集計し、来週の授業へのファイードバックの用意をしていた。だが、全員では無い。その例外の一人が杉野であつた。

「…なるほど」

その理由を聞くと大淀さんも明石さんも答えに辿り着いたような顔になる。

「何か分かつたんですか？」

茅野が大淀さんに聞いた。

「そうですね。多分提督は…」

そう言つて大淀さんはホームベースの方に目をやつた。吹雪ちゃんが打席に入るところであつた。

(…勝ちたい)

私はその願いだけを持つて打席に立つた。

大きく深呼吸をする。丹田の大切さを説いたのは榎本喜八だつたか。下腹部に力を

入れる。伊勢さんは速球を投げてくる時が狙い目だ。

「打つたー！レフト前にヒット！」

「おおっ、吹雪ちゃんが打つた！」

俺は喜んだ。チームの活躍を喜ぶ時はちゃんと喜ぶ。俺は野球選手として過ごした時間が何をすべきなのかわかる。どんな時でもチームを鼓舞することである。

あと一人のランナーが出れば、俺は打席に立てる。俺はこの試合、大和さんには全く手も足も出なかつた。だが、その事を詰るような娘は居ない。ベンチは明るさ7：3諦めであり、満足という実感である。水雷戦隊の自分たちでも大型艦相手でもスポーツなら互角に戦える。その事が誇りなのだ。

那珂さんが伊勢さんの蛇の様な速球をライト前に運び、白雪ちゃんは三振した。

よし、俺の出番だ。

(伊勢さん、日向さん、勝利は俺たちのものだ)

そう思い、ネクストバッターズサークルから打席へ行こうとした俺に提督が後ろから肩を叩く。

「え、まだ打席終わつてませんよ」

俺は最初、提督が俺にプレッシャーを与えて来たのかと思った。だが、提督は俺の予想とは違う言葉をかけられた。

「野球、楽しいだろ?」

「…へ?」

このタイミングでこういう事を言われるのは意外であつた。

「安心しろ。特にここで負けても、罰など与えん」

「…」

どういう事であろうか。

「こうすることでみんながどんな艦娘か分かつただろ?」

：確かに。昨日一緒に練習したのは金剛さんとその姉妹、伊勢型の姉妹や川内型の姉妹であつた。

金剛さんはリーダーシップと提督に心から愛情と敬意を持つ古参の戦艦であり、次女の比叡さんはそんな金剛さんを尊敬する妹であり、元プロバスケットボールの実業団の選手である。三女の榛名さんは絵本作家で艦娘である今も暇がある時も絵本を描いているとか。四女の霧島さんはシステムエンジニアで、日本で有数のＩＴ企業で前途を期待されていた。

川内さんは鹿児島の高校生で祖父と父親は漁師だったとか、神通さんは富山県の高校生で、薙刀部に入っていた。那珂さんは見ての通り、茨城県でアイドル志望だったが、親に反対にされていたらしい。

「まあ…そうですね。特に大型艦のことを聞けたと思います」

俺は昨日の練習の事を思い出した。

「ああそうか。提督は艦娘を理解して欲しいのだな。

巷に溢れている艦娘の色んな流言飛語を聞かなかつた日は無かつた。艦娘を探す為の検査はデタラメで政府は美女だけを預けて提督に性的な行為をさせている。深海棲艦という敵は居ない、大国の自作自演だ。

でも、前者が大凡本当なのは驚いた。だけど、そんな堕落した淫猥な雰囲気はこの鎮守府から感じさせない。

「だろ、2年は長くて短い。そんな中でも一緒に同じ釜の飯を食う事は素晴らしい物だと俺は信じている」

この人は信念に生きる人なのだろうな。俺たちを戦場に行かせない。その上で艦娘の生き方を見せたいのだろう。その事で相互理解を深めていく。それが彼の方針なのだろう。

「…分かりました。俺がこの試合の主役になつてみせます」

「そうだ。やつてこい！」

「…」

金剛はその風景をとても羨ましく思えた。

(ああ…ヤマトが見たかつたものがワタシにも見えマス。ワタシはあの人の艦娘で良かったデス…)

伊勢が連打で打たれているのは心配だけど、何となく心がざわついて言葉に出来ない。首を下に曲げて葛藤していた。

(どうすれば…)

「どうしました?」

いつの間にかヤマトと比叡が隣に居た。それだけ葛藤で周りの見えてなかつた事に気付く。

「……私らしくナカつたですね」

そこでヤマトは考えたことを察したらしく、

「勝ちましょ。ちゃんとその事もお互いの思いをちゃんと話しましょ。：大和（わたし）が出来なかつた事ですから」

大和はそう言つた。

「それくらいじやああなた達の紳は、千切れる事は無いデスネ」

と言つて立ち上がつた。

日向はもう伊勢の元に向かつてゐる。ワタシもそうするべくマウンドへ行つた。

マウンド上、金剛さんは何かを伊勢さんに話している。おそらくは今までの打席の内容についてだ。俺は伊勢さんの投球を見ている。スライダーをまだ投げてないが、あのスライダーを打たないと勝つた気が起きない。

下から上に上がつていって斜めに滑空していく軌道を見せてくれたのは昨日の練習だった。軍から帰つたらアンダースローに転向を考えるほどに鮮やかな変化である。しかもダン・クイゼンベリーのように投げたら、左横に移動する。その動きは右打者の球筋とスライダーの浮き上がりで見えない様になつていてある。その動きで左から浮き上がりしていく軌道が一瞬見えないのである。それでいて一気に右打者から遠ざかつて行く。

(俺はあるの球を打たなければならない)

右打席のバッターボックスの中、鳴り響く心臓は早まつたりも、遅くなつたりもしない。一拍は1秒、その間を $1\text{3}5\text{ km/h}$ は通過する。見失う球の軌道を予測するしかない、きつちり外角低めに曲がつていく。ある意味では伊勢さんと日向さんのリードを信じる事になる。

(この打席は艦娘たちがやる野球の可能性と俺の打撃技術の可能性との戦いだ)

伊勢さんはダン・クイゼンベリーを真似て、そのダン・クイゼンベリーより先へと昇つていく。そんな野球の神に魅入られた艦娘、いや人を、人間として留めて置きたい。

——何故か？　俺はやっぱり綺麗な女の子だけ、じゃ嫌なんだよな。どうしても女神が地上で俺を見ているのが好きなんだよ。

そうだろう？神崎さん、いや——有希子。

長い話が終わつて、金剛さんはベンチに戻つていく。自己陶酔はここで終わりだ。伊勢さんが最強の決め球を放つ事を信じる。俺の「勝ち」はそれだけだ。提督にああやつて言われたけどな、俺は野球バカだから、こういう事の堪え性はゼロなんだ。

伊勢さんが投球モーションに入る。目は燃えているが如く、キヤツチャーミットから目を離さない。

「！」

シユートだ！しかも内角高め！

「うおつと」

きちんと計算し尽くされたボールである。顔の前に通過させ、相手の意欲を削ぐ為だ。提督も大和さんもやつていたが、正しく同じことをする。

(どつちかから、影響されたんだろうなあ)

大和さんも伊勢さんも本質はかなり近い投手だ。様々な速球や変化球を使い、最終的には変化球で最後のストライクを取るのだ。

「ボール！」

ストレートを外角に投げてきた。左右の揺さぶりに対する意識を高める為の一拍である。

(次は速い変化球だろう、パワーカーブ使つてきそうだな)

パワーカーブはペドロ・マルティネスが使つていた。球速の初速から急速にスピニングがかかり、右打者のアウトローにぴつたり收まるという強力な変化球である、ある意味ではスライダーより手強いが、かなりコントロールに腐心している節が見ていて感じた。多少少しでも指の位置がずれると行きつく所が悪くなるのであろう。

(やつぱり)

スライダー軌道とパワーカーブ軌道は明らかに浮き上がり方に違いがある。パワーカーブの浮き上がりはかなり高く、一瞬伊勢の身体より高く見えるのだ。

(確信は無かつたが、読みは合つたようだ)

伊勢さんのパワーカーブは完成に見えるようでその実制球に苦しんでいる。

(外角低めに決まれば確かに価値あるが…)

「ボール！」

やつぱりそうなるか：決め球にスライダーを使つてくる可能性は高くなつた。

(…これも振らなかつたな)

日向は一人この年下の男の意図を掴みそこねていた。伊勢は野球が大好きで、このダ

ン・クイゼンベリーの投法を取り入れた。僅差の点差を守り切るストッパーという役目も自分で立候補したものだ。

お互いの出会いは別々の大学から同じ大手スポーツ用具メーカーに勤めた時だ。大阪の埋立地にあつた会社で同じ営業で隣同士の机で色々と助け合っていた。だが、深海棲艦による第二のドウーリトル空襲と言われた関東大空襲の衝撃は関西にも伝わってきた。この時まで遙か南洋で自衛隊の艦が敗北して沈んだという事実においてそこまで一般市民にはまだ理解されてなかつた。だが、今回の空襲はそれを覆すものであり、全日本国民を恐怖に陥れ、國民達は限られた人間以外は海に近づくことを禁じられ、私達の会社も急遽大阪の内陸に移転することが決まり、その移転が済んで変わらず営業を続けようとする矢先に、私達に艦娘の適正があるという知らせが来た。

（その後は思い出すまでもない）

その時私達二人共、スポーツで受傷し、その後遺症に悩まされていた。だがその苦しみから開放される事、提督もその下の海上自衛隊員も元野球プレイヤーで色々と野球について詳しい事は好感が持てた。私達は命がけの道である艦娘の道を選ぶことにした。

（こんな感じで野球やるとは思わなかつたけどな）

サイン交換が決まり、伊勢が投球モーションに入る。ランナーを溜めた勝負上、伊勢はセットポジションからの投球である。クイックモーションは完璧であり、走者の小細

工を許さないようになつてゐる。

(まさか、あのスライダーを狙つてゐるのか)

あのスライダーは変化のタイミングが遅く、ベース上で上がつて変化するという特殊な軌道を描き、完全に三振を取りたい時に使うものである。制球もパワー・カーブよりも低めに、何より投げた後の体重移動で下から上への変化の最初の数秒が分からぬい。だが、それは大きな弱点を抱えている。それは二度目以降、此の球は通用しないのである。確實に身体と被つてしまふから、である。ストレートも伊勢の身体に被るが、右打者の外角、左打者の内角に投げる球ではないと見えづらくならない。

(となると、金剛の読みは当たつてゐるのかもしれない。)

伊勢のスライダーの完成はその特徴を逆手に取つて見える、見えないを自在に操る事である。まだ私達はスライダーの投げ方で微調整をずつとしていたのであつた。
(仕方ない)

だが、サインはもう決まつており、ストレートを投げる事で決まつていた。

「ストラーアイク！」

やはり、杉野はスライダーを待つてゐる。

伊勢よ。最後のスライダーは投げた後のジャンプをしないで投げるのだ。その心にある憧憬を振り払うのだ。ダン・クイゼンベリーに憧れた投球モーションではなく、自

分自身に合つた投げ方にモデルチエンジをする必要がある。それはお前の、伊勢という一人のアンダースローの投手として一人マウンドに上がるのに必要な事であつた。逆に言うと僅かな試合とは言え、伝説の選手を仮託していたのは伊勢の野球知識が豊富な事で抱えている弱さであつた。

伊勢は首を振らなかつた。これで球のコントロールを喪うとホームランになる可能性がたかくなる。逆転サヨナラになる可能性が高くなるという危険を知りながらも日向の意図を完全に察したのである。

(よし、投げてこい!)

伊勢の顔はいつも通りの顔であつた。そしてモーションをアメリカ人的な「身体を屈まず下から投げる」形ではなく、「しつかりと身体を屈して投げる」形へ。

雄叫びを上げながら投げる伊勢。そこから投げられるライダーはパワーカーブみたいな速さは無い、だが前述の通り、伊勢のライダーは下から上へ変化してまた下へ滑空するのである。

「うおおおおおおおお

自然と声が出ていた。一旦高めのボールゾーンに一度浮き上がるのが見える。

(もうバット振らなければ)

低めじゃないと信じて振るしか無い。自分に与えられた、唯一の任務だと信じて。

「打つたー！」

「おおお！」

僕達は雄叫びに近い歓喜の声を上げた。この外野から見てもこの試合で一番不可思議な動きをした変化球を捉えたことによる衝撃が一番を占めるものであつた。

右から左へ流れて行くライナー。ライトスタンドに向けて真っ直ぐにこの放送席まで飛び込んで、そして神崎さんの左手に収まつた。

「逆転サヨナラ3ランホームラン!!!」

どの声が誰の声かが分からぬほどの大歓声。

「なんとドラマチックな事でしよう！彼氏が彼女に届けた殊勲打！」

明石さんはその熱に浮かされたように叫びながら実況する。

近くに居たE組が放送席へと流れ込む。

「すげいなあ！杉野は。神崎さん（彼女）にサヨナラホームランを捧げるとか、そんなのドラマでも見たことが無いぞ！」

磯貝くんが興奮を抑えて僕らに話しかけてくる。

感情が遅れてやつてきたのか神崎さんは顔を赤くしていた。目立つのをあまり好きじゃなかつた。彼女はみんなから言われている事への恥ずかしさなのか嬉しさなのかが自分でも説明できなくなつてゐるような顔である。

「ホラホラ、みんな神崎さんだけじゃなくて今日のヒーローを褒めないと見かねて神崎さんに助け舟を出した茅野が居た。

「あなた達だつてラブラブだつたじやないの、そんな事言えるの？」

中村さんがからかうように話しかけてくる。

「そ、それは…」

言いよどむ茅野。自分でも余り意識してしなかつたが、遠慮がちな彼女の手をぐんぐん引いていた気がして確かに少し恥ずかしい。

「ま、まあそれは後にして…」

僕はそう言つてその話題を遮ろうとした。その時、

「おつ、杉野がこっち来るぞ！」

誰が発言したか覚えていない。

話している内にチーム同士の挨拶が終わり、杉野や提督、水雷戦隊のみんなが、戦艦や空母の人たちがスタンドへ挨拶しに来た。

「今日のヒーロー、杉野友人くんが来ました！」

明石さんが明るく紹介した。

拍手が巻き起ころ。みんな彼女へ飛んだHRへの事を煽つてゐる。

「みんな、観戦ありがとう！」

そんな中、それに気圧される事無く、僕らに向けて声を出した。僕らは静かになつた。

「僕らの視線が杉野へと向かう。

「有希子！・やつたぞ！俺はやつたぞ！」

杉野は喜色を隠さず愛するものへ満腔の喜びを表した。

それに対して艦娘も含んで拍手したり手笛を吹いたりしていた。

「本墨打はおろか、彼女がキヤツチ出来る打球を打つとか持つて『いるなお前』

提督が肩を組んできた。今日は色々な提督の感情が見られたが最後に特大の笑顔が見ることが出来た。

「：提督、割と感情表現豊かですね」

僕はそんな提督を見てそう思つた。

「あ、気づきました？あの人の素は熱血ですよ？」

大淀さんが答えた。

「あ、そりなんだ：」

なんか納得した。戦功を上げる将軍はなんというか磯貝くんが冷静な

「まあ、あれでも戦いの指揮は冷静だし、頼りになるんだなー」

明石さんがフォローする。提督が愛される理由が良くわかつたような気がした。

「…ふう」

伊勢は静かに息を吐いていた。

「なんだ、杉野に妬いでいるのか？」

私はからかうつもりで伊勢に話しかけた。

「ふーん、日向にはそう見えるんだ」

予想外に伊勢は落ち着いていた。

「意外だな。流石にもう少し悔しさとか見せると思つたが」

思つて いるそのままを話す。ストッパーという役割はまだ経験が少ない上に救援失敗は初めてだ。自分の不甲斐なさで怒るとか、気まずさで誤魔化したりとかも言つても別にそこまで驚かなかつた。

「完敗よ。少なくとも半年間の努力は彼の過ごした野球経験には叶わなかつたわ」

伊勢は そう何かを悟つた顔をして いる。

「…艦娘は人間が機械の魂と繋がる為に筋力を強化し、その身体を消耗から防いでいる説を義臣から聞いたことがある」

だから、伊勢のスライダーを巡る戦いはもしかしたら野球の何かしらの魂とリンクしてしま う可能性があつた、私は そう思う。

「私達は肉体で出来たサイボーグであつて、シャーマンなのかもしけんな」

そう伊勢に問う。

「確かに。今ならヨツシーの言葉が分かる気がする。アンダースローとして理想という見えないモノを追う事。それは人類の見えない理想を背負う器になつたのかもしれない。

（そういうえば、人々が望む器には人間はない、と言い切つたアニメがあつたな。だが、艦娘なら可能にさせるものなのだろうか）

「日向！ほら、ぼーっとしないでみんなでグラウンド整備しなきや」

伊勢がそんな思案に夢中な私の手を引っ張る鎮守府の皆が助け合つてグラウンド整備をする。それが鎮守府の野球チームの決まりであつた。

「すまん、その前に話したい人が居る。杉野――！」

そう言つて、伊勢の手をほどきながら杉野を呼ぶ。

「はーい、なんでしようか？」

神崎と潮田と雪村を連れていた彼は、傾き始めた陽に少し日焼けした顔が赤らめたようを見えた。

「野球…楽しかった。また伊勢と、いや、鎮守府のみんなと野球をやろう。そして、私達の戦いに手を貸して欲しい」

そう言つて私は手を差し出す。

「そんな事言わなくとも、俺は覚悟決めていますよ。野球バカですからね！」

そう言って私の手を握り、これ以上無い笑顔をした。

「そ、うか、心強い」

そう言つた私の顔も緩んだような気がした。

第四話 「奥田さんと赤羽くんの話」

え、あたしが話しするの？…ああ、飛鷹が体調崩しているのか。こればっかりあたしもどうにもならないし、アレでさえ、結局あたし達の反抗心を削ぐつていう計画であつたら、十二分効いてるし。戦艦勢で話しかけやすい人達、日向さんくらいだろ？もう悲しみと憤りで情緒不安定になつてゐるし。かく言うあたしも薬飲まないと寝られなくなつたよ。みーんな死んじやつたものね。の割には元気そう？お酒飲んでも酔えなくなつちやつたから飲んで無いのよ。酔つたらみんなの顔を思い出して、お酒の気分じやなくなつちやう。

あの幕府なんて時間遅れのバタ臭い政治体制を復活させようとしているの、本当はもう、深海棲艦との戦いに全く興味無いんだろうな。そ�だらうな。今上の命を握れたんだもの、もう権力の使い放題でしょ。自分の権力を作るのに夢中になつてゐる。あと東京という都市に対してルサンチマンを抱えているな。ありや、幕府を復活だー！みたいな事言つて京都か大阪に作るでしょ。そうして強権をもつて日本を…、畜生！なんで前の戦で功績を上げずに中立という名の傍観していた野郎があんなでかい顔してられるんだ！消耗したあの人達を追い出して乗つ取つたアイツが憎い！どの面さげて、あたし

達に「死んでこい」なんか言えるんだ！宇田川提督はそんな中でもそういう命令を取り下げようと動いていたのに！畜生！…………ハア・ハア・ハア…、ごめん。・青葉、帰つてくれないか。とにかく、とにかく！

朝礼に参加するのは億劫である。

俺は中学まではそういうのには基本参加しなかつた。中学3年のあの忘れられない1年で、俺は朝礼を出ないという決断をしなくなつた。だが、朝はそんなに強くないので、やつぱりどうしても億劫な物になつてしまつてゐる。

(・・・こういう時に起こしてくれる人が欲しいなあ)

艦娘とE組での朝礼、小学生相当の駆逐艦が集中出来るように短めにしているらしいが、俺にとつてはそれでも退屈に近い。

「我々はこれから戦略展開をすべく、作戦の立案を行う。鍛錬を絶やさず…」

そう提督が言いかけた瞬間、俺の後ろから音が聞こえた。

「奥田さん！」

片岡さんの声が聞こえる。その一瞬に自分の身体が目覚めるのを感じた。

：氣づいたら彼女を介抱していた。

顔色が鈍色のような暗さで、目の下は真っ黒であり、睡眠不足なのは明らかであつた。

「保健室、連れていくよ」

片岡さんは驚いて「へえッ!?」みたいな素頓狂な声を出したけど、すぐに元に戻り、「私も連れ添うわ」

と言つた。責任感が非常に強い彼女らしい声だつた。拒む必要は無かつた。

「おーう、E組の子たちだな、もうベッドの準備は出来てゐる。彼女を休ませなさい」

そう医師の横野駿（よこの・はやお）は言つた。艦娘やこの鎮守府で働くひとへの医療は全て彼とあと3人、桜庭成美（さくらば・なるみ）、永島多尾（ながしま・たお）、藤村英美（ふじむら・えいみ）の女医たちが支えている。その内、防衛医科大学校の出身は横野と永島のみで桜庭と藤村は外部からの招聘らしい。という事は、横野さんは俺たちより尉官は最低でも上である。

「はい、ありがとうございます！」

誰が俺たちを見ているのか分からない。普段は勤勉で実直のつもりで過ごしておきたい。そう思いながら奥田さんを下りるように促した。背中の感覚で意識を取り戻しているのに俺は気づいていた。

「カルマくん、ありがとうございます」

そう言い、迷彩服のまま布団にはいった。

「…で、寝不足になつた原因は？」

横野医師が聞いてきた。まあ医師として聞かざるを得ないよなあ。表情にはどこかで体験した「見る」表情に似ていた。

「私は海上女性職員研究所で研究の手伝いがほとんどで艦娘さん達の教育は免除されていたので、身体動かさなかつたし、研究所はまだ人員不足で特に化学は定時に帰れない時があるほど、凄く忙しく、身体も脳も夜を忍んで筋トレしながら勉強していたのです」

「なるほど…。それで奥田さんは毎日…」

横野医師は怒るわけでもなく呆れるでもなく真摯な顔つきだった。

「私は研究所員みたいに扱われて、みんなと一緒にやなくて朝から皆が寝ている夜までずっと研究所で、みんなに置き去りにされそうで…」

そう聞いて、俺は彼女の孤独な心に痛みを感じた。

(誰も寄り添つてくれなかつたんだな)

と言つてもまだここに来て一週間である。ここまで消耗しているのは相当である。と、思つていたら、医務室の片引戸が開かれた。そこには山口海将補と海上女性職員研究所の小山田義臣所長の姿であつた。山口海将補は怒り気味で小山田所長を見ていた。

「あのさあ、幾ら彼女の能力が高いとは言つても18歳だぞ、博士号も持つてないのに最初から研究を投げて残業させるの、アカハラかよ…。人が少ないのでそういう事するのやめろよ…」

山口海将補がタメ口である。いつもの調子から崩れている。怒りと呆れの声であつた。

「す、すいません…本当にみんな近々の研究で手一杯で…」

年下である山口海将補にズケズケ言われているのは、小山田所長である。一応仮の、らしいが、本来の所長は別の仕事があり、秋にならないと就任出来ないそうだ。提督とは知り合いというかいわゆる「近所のオタクなお兄ちゃん」だつたらしく、自作PCやアニメなど色々と教えてくれたらしい。こう見えても研究者としてはそれなりの貫目があるらしいが、とてもそうとは思えない。まあそりやあ、身長も山口海将補の方が100cmくらい小さいもあるだろう。そんな人間が小さくてその上で年下の人間に詰られて背中を丸めてみると威厳の欠片もない。身長の高い人間はこの辺、態度を弱くすると尚更弱く見えてしまう。

「竹林くんの方はきちんと防衛医科大学校まで遠距離通学して、一週間をこなしたのと天と地との違いですよ。本当」

俺たちが居るのに気づいたからか、山口海将補は丁寧語に変えた。そして、奥田さんには近づいて頭を下げた。

「申し訳ない。監督不行き届きだつた」

山口海将補はびつちりと最敬礼をしながら言つた。続いて小山田所長も頭を下げる。

その姿を見ると奥田さんを追い詰めた研究所に対する怒りが薄まり、少しからかってやろうと思つた。

「へーえ…そんな謝罪だけで良いのかなー」「え？」

小山田所長は理解が出来てない返事をしている。

「今から週刊誌の会社に徴兵した事とかブラック労働してたつてバラしちゃおうかなつて…」

「また碌でもない事考えている…」

片岡さんが俺の性格を思い出したような顔しながら呆れている。奥田さんがその事を聞いて慌て始めた。

「え、そ、それはマズインじやないですか…?」

(…まあ通用しないだろうけど、脅すだけ脅そう)

言葉遊びをしかけても山口海将補には通用しない。なんでもない顔になんでもない表情。野球では情熱を見せ、訓練場では鷹揚さを見せた。その脅しをどう捉えるか。

「それは無いだろ?なんだかんだお前はE組の事を大切に思つてingる。彼らの意見なしでは動かそうとも思わないだろ?」

(鷹揚さが有りながら、冷徹さがある)

「きちんと俺らが居るうちは悪いようにはしない。あまり我々を試さない事だな」

(…提督は威厳がありそうで、意外とフランクであり、山口海将補はフランクなようでいて冷徹。その辺の解釈を間違えると、えらい目に遭いそうだ)

「…奥田さん」

俺は奥田さんに對して話しかけた。

「俺たちも奥田さんの悩みに気づけなかつたことを謝らなきやいけないな」

「そうね」

俺たちE組は誰かに踏みつけられた記憶を共通の記憶としている。その黒い情念が俺たちを後ろに向かわせずに前へ挑み続けたモノなのである。それが他人に踏みつけられている仲間に気付かなかつたなんか、凄くカツコ悪い話である。

「ちゃんと俺も気づいてやれなかつた。スマン」

「ごめんなさい」

奥田さんは頭を下げた俺を見ていた。と思つたら顔を一気に真っ赤にして、布団の中へ潜り込んでしまう。

「そ、それ程でも〜!!」

布団の中に入り込みながら焦つたような、俺は一瞬、理解できなかつた。

奥田さんを見て、横野医師は言つた。

「ははあん、さては頭下げる赤羽くんに惚れたなあ？」

そう言いながら、横野医師は顔を崩した。ニヤニヤと見る。奥田さんが…俺に…？
「またそんな下世話な…。カルマくんもなんか言つてあげて」

と、そういうデリカシーの無い発言が嫌いな片岡さんが俺に反論させようとしている。だが、俺は頭の中が整理出来ていない。…奥田さんは友達だと思っていた。俺のような人間に臆さず、怯まず、自分の意見をぶつけられる。芯の強い娘だと思つていた。だが、そんな娘が俺を…？

徵兵されてからの今までの事を思い出す。確かに奥田さんが俺に話しかけてきた機会が結構多い気がする。そうか、俺はずつと見られていたのか。中学3年生から今まで。大淀さんを見て何故か心が動いたのは彼女の事を思い出したからか。

「…そつか、そうだつたんだな」

膝立ちで奥田さんとの山口海将補の顔が更に真に迫る顔になる。小山田所長は何がなんだか分からずに俺と奥田さんを交互に見て いる。

…きちんと自分でケリをつけなければならない。今までの自分を殺して。

「奥田さん」

俺は返事を聞かず、布団を剥がした。迷彩服を着た迷える子羊が居た。

「はい…」

消え入りそうな声をしていた。顔は真っ赤である。

「これから俺たち二人の未来を想像する。俺はこの仕事が終わつたあと、大学を経て官僚になるであろう。彼女は違う大学に行くことが決まつていて。そして彼女は間違いなく大学院に行き、研究者の道という彼女にとつて、シンデレラのガラスの靴のようである。そうなつてしまふと互いに互いを干渉しあう、恋人という関係は果てしなく維持が難しい。

「……俺たちが付き合つても、幸せな未来を築けるとは限らないよ？」

「……カルマくん」

片岡さんは磯貝と付き合っている。高校では一人でのんびり出来なかつたみたいで、部屋でいちやついているとの専らの噂だ。大学で分かれようと近い道だからまたどこかで交われる。

俺たちはあはなれない。自らの道は全く違う方向で、その先にお互いに良い人が居るはずなのだ。

「分かつています！」

奥田さんが大きな声で叫んだ。

「私は研究者！カルマくんは官僚！行きたい道は交わらないって！」

奥田さんは涙を流している。お互に考える事は同じである。頭では分かりきつて

居るのだ。この恋は実らない。段々と会えなくなり、冷めていく恋愛である。

「奥田さん、落ち着こう！私と話をしよう！」

片岡さんは奥田さんに抱きついた。女性だから出来る業である。奥田さんを抱きしめながら、片岡さんは言つた。

「すいません、私が女同士で話をしますので、一度出ていいつてもらえますか」

「分かつた」

山口海将補は短く了承した。確かに男には分からぬ話なのかもしれない。

「えつ良いのですか？暴れたりしません？」

小山田所長が異議の声が出た。完全に女性のコミュニケーションが分かつていな。

「小山田所長、あんた女性と付き合つた事ないでしょ」

「な、何故それを!?」

心の中で大きく嘆息する。

「山口海将補、とりあえずこの所長連れて外出ましょう」

「…そうだな」

「俺は隣の診察室に居る事にします」

横野医師はそう言つて診察室に帰り、医務室は片岡さんと奥田さんだけになつた。小山田所長はやつと理解出来たのか、犬が怯えたような姿で俺たちと一緒に外へ出た。

小

：外には提督と渚と艦娘が二人居た。飛鷹と隼鷹という名前だつたか。

「…なんかあつたみたいだな」

提督は静かに口を開く。山口海将補が報告する為、人払いされた。残りの隼鷹、飛鷹と小山田所長と渚と俺だけになる。

「カルマ、なんか元気ないけど、片岡さんや奥田さんと何かあつたの？」

渚は心配そうに聞いてきた。

「うーん、奥田さんが俺に好意を持つていてるらしくて、その時ちょっと取り乱したから片岡さんに見てもらつてる」

渚は他のE組と違つて口は堅い。とは言え、丸ごと100%ありのままを伝えるか、それは流石に逡巡した。

「…一人とも行きたい道があるからだね」

渚も分かつてゐる。友達同士としての間柄は有名だつたが、どちらかが恋心を抱くのもありえる話であつたから特に驚きもしない。そして二人が描きたい未来の交わらなさも分かりきつていた。

「なんだ、なんだ？：青春の話か？？」

隼鷹さんが話しかけてきた。お酒が大好きな豪放磊落な艦娘である。仕事している時はお酒を一切飲まないらしく、正直意外に思つてしまふ程、休みはお酒を飲んでいる。

そして絡み酒をする。女の福島正則みたいだな。

「……」

「二人ともなにその目：そんなに隼鷹さんが信頼出来ないかあ」「あんたを通すと碌でもないって思われてはいるのでしょ。実際その通りだし」

そう声を上げたのは姉のようでいて妹でもあるという姉妹艦と呼ぶには複雑な関係の飛鷹さんが声をあげる。実際二人とも同じ年であつたらしく、気のおけない関係つて言うのはこういう関係なのであろう。

「そんな～隼鷹さん大ショックだよ～」

そう言つて飛鷹さんの胸に頬をつけて、芝居臭く泣く。自分に課されている評価をも分かりきつた演技。その隠し刀は見破れない人間に無能さに安堵させるだろう。小山田所長なんかはもしかしたら隠し刀を理解出来てないかも知れない。

「あはは～。隼鷹さんは本当喜怒哀楽はつきりしているなあ」

渚が困惑しながら二人の丁々発止を見ている。見ていて限り彼女たちは良いところのお嬢様であるから恋愛経験はそこまで多くないはずだ。今は提督と身体関係を持つてているらしいが～。

「ま、箱入り娘のオネエサン達よりは俺のほうが恋愛していると思うし、正直彼氏が居る片岡さんの方が今は良いかな」

「……」

小山田所長は黙っていた。目の前に見えない壁があつて話に入れない。自分の居場所が無い、そんな感じに見えた。自分の頭にリフレインしていったものがある。

「あの、」

「義臣さん、本当感情表現苦手というか、コミュニケーション苦手だよな」

隼鷹が俺の声掛けを遮る。

「ほつとけ、俺は女の子にも惚れられず、研究から脱落した落伍者だよ」

そう言つて所長はそばにある来客用の椅子に腰掛ける。

「良いんじやない？ 提督が言つてたけど、こき使うところだつたんだろー？ 正直言つて日本の過多なコミュニケーション重視は良くないわ」

隼鷹さんはそうやつて小山田所長の前に立つた。諭すような口調で軽い言葉を使う。そのちぐはぐさがあるので違和感が無かつた。

「だけど」

小山田所長は力強く言つた。

「秋には本来の所長が来る。あくまでつなぎだけど、それでも社会へ戻してくれた信悟の期待は裏切れない。だから俺も反省したい」

その言葉は心から出た言葉であつた。不器用だけど一途だな、と思える言葉だつた。

「カルマ」

提督が後ろに来ていた。

「提督、話し合いは終わつたの？」

そう俺は問いかけた。

「ああ、お前に用件が有つて、ここまで来たんだ」

「…何の用？」

なんか良い予感がしない。

「お前らを大臣全員の前に見せに行くつていう任務だ」

「…なんで俺と渚が選ばれたの？磯貝とか片岡さんの方が向いてそうだけど？」

悪い予感は的中した。総理大臣も他の大臣も居る前に立つという、二度と無いイベン
トだが、俺たちに目をつけた犯人が大臣の誰かかもしれない。その可能性を考えると俺
らの殆どは上手く行つてている情報を与える事になる。

「お前ら宇宙行つただろ。その件で目を付けられているんだ」

「あーそれかあ…」

俺たちは納得した。宇宙体験は政治家ですら体験していない。二重の意味で俺たち
は丸裸にされるのであろう。

(断れる可能性は…無いな)

国会では自衛隊を新日本軍にするべく、憲法改正や法整備が進められている。深海棲艦が陸上を占領していることが確実に分かつた今、今まで自衛隊に与えられていた「防衛戦」だけでは、「自衛隊」という名前は逆に枷になつてしまふ事があきらかになつたからだ。

(俺たちを兵として集めたのはその内意がきつかけだろう)

…で、俺たちは何故ここに居るのかを明らかにする必要があつた。これから自分たちは「深海棲艦達と戦う魁」になるのか。それとも「功績を一切明かさない謎の部隊」にされるのか。

「分かりました。いつ伺うのですか」

敬語を使う。ここからは公式の場に出ることを意識しなければいけない。流石にダメ語はまずい。

「明日の火曜日だな」

「…早いですね」

「正直、霞が関は避けたかった。俺らに干渉してくる省庁は幾つもある。結果なんて幾つも出してきたのだが、どうにかケチを付けてくる可能性がある」

提督の弟は内閣府の若手の官僚である。山口海将補は彼と二人で政治家へのロビー活動や鎮守府で必要なものを決めて予算に入れる折衝を続けていた。

他にも祖父が政治家の艦娘、野党の党首が叔母の艦娘。その様なバツクボーンがある艦娘も政治家との折衝や交渉に役に立った。

現在の日本とアメリカとの間を繋ぐのは北側周りだけである。制空権も完全では無い上、深海棲艦が占領している島があるため、軽巡洋艦以下の艦娘の任務はその航路の安全を守るのが大半である。中華人民共和国はここに来て完全に悪夢であろう。追い出した政体の違う国の方に艦娘が居て、自分たちには艦娘の恩恵をもたらさないと分かつたからだ。かといって周辺諸国に頭を下げるというのは出来るだけ避けたい。幸いにもフィリピン付近で日本とアメリカが深海棲艦を防げているので、最悪の事態を防げているという綱渡りを続けている。台湾（中華民国）は数人程度の艦娘が輩出されたらしく、シーレーンを守る為の訓練をしているらしい。東南アジアはタイがアメリカ、日本の庇護を、ベトナムは中国の庇護をそれぞれ受けている。タイにも艦娘が居る可能性は限りなく高いが現在はまだ発見には至っていないらしい。

日本の目標としては奪われた東南アジア、オセアニアの奪還、深海棲艦の拠点になつたシンガポール、スリランカとソロモン海、珊瑚海の奪還をアメリカと作戦しているそうだ。

「提督さんの苦しい立場は分かりました」

渚が口を開く。多分俺と同じ考え方であろう。

「取り敢えず、一回皆と話し合いたいと思います」

同じ考え方であつた。

「まあ、拒否出来る立場じやないことは分かるので、ここだけで勝手に決めないようにしたいのです」

「分かった」

提督は躊躇いなく返事をした。

警察と内閣府：、はあ。後ろの人達も立派な体格をしていますねえ：。

柳沢さんの事ですよね。はい、あの人の症状も聞いています。全神経に不可逆な損傷があり、自分で寝返りすら出来ないです。そんな人間がこの施設から逃げ出すのが驚きです。誰かが連れ去つたとしか思えないですが、生命維持装置ごと持つていつたみたいですし、相当な人数と医療知識を持った人が、はあ。連れ去つたんだと思います。まあ入院していたのが一階だつたんで、やりようがあつたでしょが。

はあ、怪しい人ですか？誰にも慕われてなかつたみたいで、誰もあの人に面会するような人なんかいないですよ。喋ることも出来ないですし、彼のお父さん、お母さんですらウチの受付までしか来ませんでしたし。

：これで大丈夫ですか？私、本当何も知らないのです。4年前の殺先生、でしたつけ

?の騒動の関係者で優秀な学者だつたくらいしか知らないんです。同僚のみんなも彼の酷すぎる惨状を見て、彼がどこから来たのかも知りたがらなかつたですし。

え、この介護施設の内部に詳しすぎる? はあ、確かにそうですね。前に見慣れない誰かに施設の中に誰かを入れなかつたか? はあ、一応は毎月医療機器のメーカーはメンテナンスに来て、色々と調べていますけど。あつそういうえば日本人から外人さんへ変わりましたね。確か白人だつたと思います。

俺と渚はみんなを集めた。

「ふーむ…」

クラス一同は考えに沈んだ声をだす。

防衛庁や自衛隊の上層部は確かに何度も会つた。二つの組織の迷いや悩みが見えた。そこを見ると間違いなく躊躇つてゐるし、提督の言葉はその流れを受けてゐる。

「なんというか、私達を使つてやりたいことがはつきり見えないね」

不破さんが口を開いた。

そうなのである。鎮守府に入らせたのが予想通りであつたなら、このお目通しは予想通りだつたのか、だとしたら「見ているぞ」というメッセージなのか。それにもなんというか、目論見としての精度が弱すぎる。

「もしかして、そこまで強い権限を持つ人間じやない…？」

磯貝は一つの仮説を出す。

「いや、もしかしたらこういう事をする仲間が少ない可能性もあるぞ」

「おつ寺坂の割にいい線行ってるじゃん」

俺は寺坂に茶々を入れた。俺もその線を考えていた。民主主義の政治家は一人では超越者になれないものである。鎮守府をどうにかしたいという目的で上手く俺たちに入れ込んだが、一人でやっているせいで上手くそこから俺たちを動かせる手段が思いつかないし、思いついてもそれをやれる人間が居ないのである。

「そうだとすると、大臣の中に居るのか、大臣じやなくて副大臣か政務官か…」

だとするなら、総理に近い派閥の大臣の可能性が高い。現在の内閣は前総理が関東大空襲で被災し、死亡した後の内閣である。前内閣の中でも空襲で何名かが亡くなつたが、何事もなかつたかのように丁寧に政策を推し進めている。

「ということは首相に近い藤本派の誰かかあ」

と言つても藤本派は主流じやない派閥である。衆参の議員合わせて14名しか居ない。首相の位置に据えられたのは当時関東大空襲で複数名の死者を出した安藤派の重鎮であつた大淀さんの祖父で夏田仁三郎の推挙であつた。政治スタンスも全く違う派閥であつたが日本自由党には良くある事であつた。

「うーん祖父も藤本派の事について詳しく話してくれないのですよね」

「推薦したから利敵行為はしない、か。流石80過ぎても現役大臣やつているだけある」
話に夢中だったのもあつたが、ドアは閉まっていたはずなのに、音をたてずにここまで近づくとは…！」

「提督と大淀さん…！」

「スマンスマン、重要な知らせと彼女達を送つてきたんだ」と、提督が後ろに片岡さんと奥田さんが居た。

「奥田さん」

あれから2・3時間経っている。顔の黒さはまだ取れていないが短く眠りはしたのであろう。片岡さんは奥田さんに意志を任せたのか、顔は冷静さがある。

「あの件は後回しに。今はこの話し合いに参加したいって」

「どうか奥田さんもE組でありたいんだな…。」

「ところで知らせつてなんスか？」

村松が聞いた。提督の前で言葉を崩すのをやめろと指示しているのに、提督に対して

崩した物言いになつていてる。

「柳沢誇太郎が介護施設から居なくなつた」

「！」

何だと……。

「それって、」

磯貝がその事実に対する疑義を挟む。そうだ。アイツはもう再起不能のはずだ。監視すら付く意味が無いほどの神経に深刻なダメージ。4年前に殺せんせーの最後のビームにふつ飛ばされ、反物質を神経に張り巡らせた柳沢はビームの壁に突つ込み、反物質の消滅を持つて全神経が大きなダメージを被つた。もう寝返りすら打てないのだ。

「ああ。恐らく誰かが手引きしたのだろう」

提督は言つた。苦々しい顔をしていた。顔の火傷の痕を含めるとかなりの威圧感を感じた。

「…手引きした人間に心当たりがあるか？」

提督は聞いてきた。俺たちは首を横にふる。

「そうか、そこまでする人間自体、あり得ないよな。正直な話、お前らへの敵愾心を持つ者を無理やり引っ張った感じがする」

提督は頸の下に手を添える。考える時の癖であろう。

「それとも別の意図があるのか…？科学者を確保したかった。でもあそこまでの怪我だぞ、艦娘の身体でも手に入れる気か？適正が無い人間を艦娘に出来る術はこの世界で一番研究している明石がそういう術は無いって言つていたが…」

提督は思考実験するが、傍から見る俺らからしても壁が何枚がある事が分かる。

「それとも奥田さんや竹林くんに託された、殺せんせーの触手狙いか？そんな事は無いな。あれは明石の目にすら通していない。俺と大和にしか開けられない金庫の中だ」

提督達と艦娘と俺達が事務作業をする部屋があるが、提督の席の後ろにいつの時代に作られたのか分からぬレベルの古い金庫がある。俺たちの機密資料はそこに入っているらしい。木で出来た鍵を一人で2ヶ月毎に作り変える代物だそうだ。

「…で、それを知っているのは艦娘の殆どを除く海上女性職員部の職員だけだ」

「…何名居るのですか？」

片岡さんが聞く。そんなに多くないとは聞いている。艦娘の金の動きを見せにくくさせたいからだそうだ。

「俺と山口、伊代野の両海将補含めて8人。医師や臨床心理士は数えてないぞ。そもそも許可が無ければいつも居る部屋と食堂以外は入れない様になつていてるからな」

「少ない…。その上ここは海上女性職員部以外の職員と口が堅い人間として指名された陸上自衛隊の護衛部隊と警察職員を入れない代わりに抜き打ちで公安部の監査を許しているくらいだと聞く。」

「公安部が漏れた可能性は…？」

不破さんが聞いた。

「あそこは一応、筋目を守るしなあ。というか公安部がそれやつたならもう騒ぎになると思うぞ」

提督はそう否定した。

「まあ一つ、分かつてている事実としては、この地球上でお前らを最も憎んでいるのは柳沢誇太郎、以上は居ないだろうな、まあ鷹岡明も居るが、あいつは未だ監視下だからな。お前に危害を加えはしないだろう」

提督はそう言った。：この時の俺はこの人が何かを隠しているように見えた。何故かは分からぬ。と言つてもその直感は根拠が無さすぎてはぐらかされるだけだと感じた。

「とりあえず俺が言えるのは一人で外出するのはリスクが高い。しばらく外出する時は3名以上の行動でお願いしたい。竹林くんの護衛はもつと厳重にする必要もありそうだ」

「わ、私はどうなるのでしょうか？」

奥田さんが聞いてきた。

「とりあえず明石と夕張の下で補佐してくれ。力作業もあるから、少しづつ体力をつけていって行こう」

艦娘ならきちゃんとコントロール下に置いておけるという事であろう。俺も暇があれ

ば工廠には行けそうで良い判断だと思う。

「それと、赤羽」

「なんですか？」

そう返事したら、提督が近づいてきて身体のずつしと両手で掴まれた。提督はとても深刻そうな顔をしている。

「お前、奥田さんの想いを知ったのだろう？」

「…それが何か」

俺は提督と一番近い身長だがそれでも筋骨のたくましさは提督の方が勝る。だからここまで顔を近づかせてくるのは中々の威圧感だ。

「お前はロジックで相手の愛を否定したが、感情の一つである恋は理論じやない。どうしても不合理な事もある」

「…」

「…だから、ここに居る内は恋人になつてあげても良くないか？」

「…」

「気持ちとは変わりゆくものでも、ずっと持ち続ける事もある。ここに居る間だけでも彼女の願いを受け入れても良いのでは無いか？」

「提督は今まで居る鎮守府の人の中で最もさつきの事を深刻に抱いていた。と言つ

ても自分たちが決めることであり、この人に言われる筋合いは無かつた。だがそれ以上にどうも気になる事があつた。

「提督は恋で後悔した事があるの？」

どうしても俺の翻意を望む姿に自分を鏡にしているように見えた。

「さあな。お前が2年でここを出るつもりなら、聞かない方が良い」

それは、俺には負えない物である事があると分かつた。分かつたが、疑問が確かに有つた。

「それってどういう事ですか？」

茅野さんが声を上げた。兵役義務以上の物があるのかという当然の疑問である。

「俺には限られた人にしか知られてない秘密がある」

「それはこの世界の構造を脅かすほどの重要な物だ」

……………は？

全くもつて理解が出来ない。なんで恋人に対する後悔が世界に直結するのか。論理のボールが飛び上がつたら、宇宙まで行つてしまつたレベルである。みんなも完全にいきなりの言葉の重さに沈黙している。当たり前だ。こんなある意味「強い」言葉が出てくるとは誰も思わなかつたであろう。

「それを知つてしまつたら？」

三村が絞り出すように言つた。沈黙に耐えられなかつたのであろう。カメラを持つ手に汗が滲んでいる。

「うーん、秘密が漏れないようにこの戦争まで兵士として戦うようになるかな。場合によつては全員メンバーがバラバラに陸上自衛隊に行くことになるかもしけない」

：有期刑が無期刑になる訳か。まあ殺される訳では無いらしい。

「：提督 その秘密とは、この深海棲艦との戦争にも繋がること、なんですね。だから自分もこうやつて鍵の入つた部屋に自分を入れた、表向きは艦娘の一一番上で統率すること。それで自らの秘密を隠そうとした」

渚が喋つた。：なるほど、あそこまでの防諜の警戒は艦娘もさながら、提督自身の秘密をなるべく外に漏らさないようにした訳だな。

「ああ、そうだ。だからお前らにとつて俺自身はパンドラの箱な事を自覚した方がいい。好奇心は猫を殺す」

と提督は言つた。提督の秘密は殺せんせーの時の秘密のように殺せんせーを殺すような手段では開かない。そんな気がした。

(：防護の車が5台居る)

昨日の提督の「告白」が頭から離れない。僕とカルマと飛鷹さんと隼鷹さん、提督と伊代野海将補と共に政府の車に乗っていた。運転は伊代野さんである。

「普通こういうのつて運転士が居ると思うのですが……」

僕はこの居心地の悪さに絶えきれず、口を開いた。

「今更だけど、鎮守府は秘密主義だから」

飛鷹さんが口を開く。昨日の事は知らないのか、常套句の如く言う。

「大丈夫大丈夫、あの3人とも運転は上手いから！」

隼鷹さんが炭酸水を飲みながらケタケタ笑っている。二人ともスーツだ。
(運転士すら雇わない。秘密主義を貫くのは大変だな……)

陸上自衛隊の1／2t トラックすら使わない。普通の三菱・デリカD：5である。
(まあ周囲をクラウンで囲んでいるから、わかる人にはわかるだろうな……)
カルマは寝ている。昨日は悩みすぎて寝られなかつたのであろう。

「あはは、まあ国会議事堂に着く前に起こせば良いさ！」

「自分完璧！みたいな子だと思っていたけど、こういう顔もするのね」

隼鷹さんと飛鷹さんが口々に言う。

(近所のおばさんみたいだな)

「そこまでにしておけ」

「提督！失礼しました」
「はーい、分かりました」

提督が二人を注意する。あの告白の意味をずっと考え続けていた。この世界を脅かす秘密をあの人人が握っているという事態がなんというか途方もない物であつた。

殺せんせーも自分の命が世界の趨勢を握っていたが、提督は何を隠しているのである。何んまいは静か、だけどたまに喋る時は色んなこと面白おかしく喋り、真面目な時はきちんと締める。そのギヤップが面白い提督であるが、そんな人の秘密ってなんだろう？どうしても分からぬ。

「…提督。これから会う内閣の人たちで僕たちの徵兵する事を思いついた人は居るのですか？」

昨日のことでの頭が一杯だつたが、そろそろ頭を切り替えないと。これから出会う人たちは曲がりなりにもこの日本を統べる人たちであり、自分たちを陰謀で追いやつた人間が含まれているのだ。

「…うーん、先ず今の内閣全員つて言えるよな？ちょっと言つてみろ」

「えーと、内閣總理大臣 手塚 勘助、副總理兼厚生労働大臣が藤本 六郎、總務省が神鳥 親長、法務省が石森 彪太郎、外務省が福籠 溜（ふくごおり たまる）…」
「財務省が鷺沼 裕彦、文科省は鴨志田 和正、農水省は阿野 葉留彦、経産省が大淀さ

んの祖父である夏田 仁三郎、国土交通省が青山 孔明、環境省が川原 江奈で防衛省の大臣は俺たちが会った掛巣 長之だな

「カルマ起きてたの!?」

驚いた。あんな感じだとぐつすり寝たものだと思っていた。

「まだガキ扱いかよ。兵士でもハードな任務はある。ちゃんと寝られなかつた時はちゃんと埋め合わせないと失格だぞ」

僕の髪の毛を抜こうとするカルマ。坊主をしなくて良いという提督のお達しから伸びし始めてうつすらになつた髪の毛である。

体格の差がありすぎてあつさり上をとられてしまう。

「髪の毛引つ張るのをやめて、痛い、痛いって」

軽空母二人はその様を見ている。

「ここまで人畜無害に見えるのは凄いわね……」

「まあウチで言う神通や羽黒、潮の類だろうけど、彼はそれ以上だな」
…なるほど。きちんと話することで分析もしている訳か。

(それでも、敵意があるわけじやないか)

純粹な興味の下なのである。戦艦や空母、重巡洋艦は普段護衛任務に出ない代わりに事務仕事や軽巡洋艦や駆逐艦（水雷戦隊）を世話やカバーする事が仕事なのである。

前回の野球の試合も見ていたのも水雷戦隊が中心で残りの伊代野さんが提督代理をして、大型艦がそれを支えていた。

「強さなんて条件下で容易く変わるのよ」

運転手の伊代野海将補が口を開く。

「私は水の上で戦えないけど、陸上では艦娘にも引けを取らない、そういう物です」

：鎮守府の3人は全員武道を使える。自衛官なら当たり前だが、ここまで強さで陸上自衛隊に行かないのは珍しいらしい。

槍の宇田川、柔術の山口、剣の伊代野。銃の四方田。と呼ばれていた。4人目の四方

田さんは生きていたら鎮守府に誘つたであろうと言われる存在であつたが、深海棲艦を艦娘無しで食い止めるための戦いにおいて命を落としたとの事だつた。

（そつか…提督と伊代野海将補は艦娘の来ない絶望の中で戦つていたのかな）

そう思いながら、昨日の言葉を思い出した。

（ん…いや、待てよ、提督は艦娘が来ることが分かつていたのか？）

深海棲艦に関わる彼の過去とはなんであろうか。：提督が深海棲艦を生み出した？

いや、それだつたら政府にとつて危険者として扱われ、そもそも提督になれて居ないであろう。それに深海棲艦が殺せんせーの騒動の時に何故動かなかつたのかが分からぬ。

(もうちよつと提督の過去を詳しく知る必要があるなあ)
と思っていると国会議事堂が見えてきた。

(その前にこの試練が乗り越えなければ)

第188回定期国会が終会した後に、一ヶ月足らずに臨時国会が開かれる異様な事態になつたのは、アメリカ合衆国が深海棲艦に占領された東南アジアに対する奪還戦において兵数不足に陥り、日本国に対して派兵を強く求めて來た。ここまで手塚内閣は少しずつ国内の反発した勢力に対しても根気よく説得していたが、アメリカ軍はそこまで待てなかつた。

一ヶ月以内の自衛隊の出兵。

兵站の確保且つ海上の安全確保の為の深海棲艦が駐留しているシンガポール艦隊の撃滅の為の艦娘の派遣、を性急に求めてきている。

鎮守府は今まで防衛を大義名分としての専守防衛を崩してこなかつた。今までで最大の戦いのレイテ沖海戦もフィリピンを再奪取した国連軍を防衛する役目であつた。

(アメリカの艦娘は、あんなに提督に惚れていて大丈夫だろうか、色んな意味で)
アメリカに艦娘を派遣してくれるだけ日本を大切にしている事が分かる。しかし、深海棲艦の戦いで消耗している今のアメリカ海軍には扱いきれないらしく、実質日本の艦

娘の行動についていく状態になつてゐる。日米同盟の意義を考えるとアメリカが日本の下で行動するのではまずいのではないか、と提督は思つてゐるので何度も提言しているが、取り合わないらしい。

(提督に色々な責任被せて、失敗した時に蒸し返すようにしてゐる)

そう思いながら国会の裏口にある参議院入り口に入る。警備員に一礼される。

「…」

入り口に背の高い一人の中年男性が立つていた。なんてことはない、自分たちを鎮守府送りにした防衛大臣、掛巣 長之であった。

その前に対した提督と飛鷹さんたち、カルマ、僕の5人が敬礼する。

「宇田川信悟海将、潮田一士、赤羽一士、艦娘の飛鷹隼鷹を連れてまいりました。本日はよろしくお願ひいたします」

海将である提督、艦娘（戦艦空母は佐官相当）と僕たち。

「二人共様になつてゐるじやないか」

防衛大臣は自分の孫に話しかけるような喋り方である。

「それはどうも。ありがとうございます」

カルマはそんな防衛大臣をどう対応したら良いかが決まらなかつたのか、若干引き笑いをしながら語つた。提督の強烈な視線を感じる。

(あつ、カルマは後で罰走だ)

「はい、訓練もこなし、一人前となりました!」

敬礼しながら僕はそう答え、提督は満足そうな視線を送ってきた。

(ほつ：)

「艦娘代表はお前ら二人か」

飛鷹さんと隼鷹さんが呼ばれる。

「はい、海上女性職員代表として来ました」

「彼ら二人と提督の橋渡し役として努めようと思います」

先程までの二人とは思えない程、しつかりした受け答えだ。提督はそういう上下関係に厳しい。他に整理整頓してないと部屋をめちゃくちゃにしていくが、これは自衛隊員に必ずする行為らしい。それ以外は僕らにもフランクに話すし、上手く行つてない教育を見つけたら、問題点を話し、艦娘と僕たちの橋渡しをしてくれる。

「…良いだろう、内閣は色んな思惑があるところだ。気をしつかり持つのだぞ」

そう防衛大臣は付いてこいとばかりに振り返り、奥へと導く。

(色んな思惑かあ：)

それは僕たちにとつて良いことなのか、悪いことなのか。それを見極めなければいけない。

——殺せんせーは今の僕らをどう見てくれるのかな？怒るのか、嘆くのか、それとも肯定してくれるのか。

今はまだ誰にも分からない。

うわーんうわーんうわーん。

子供の鳴き声が一帯に響き渡る。

誰の鳴き声だろうか。

ああ、自分の泣き声だ。

ここは俺の夢の中。

そしてこの夢は自分の過去の記憶だ。

小さな町に俺は生まれた。父親の顔は知らない。

祖父母もおらず母親の腕一つで育てられた俺は当然のことながら貧乏で、通つている小学校の中ではいじめの対象として見られていた。

俺は近所のガキ大将達に貧乏をからかわれ、持つていた体操着袋を取り上げられた。返してよと叫ぶ度にガキ大将達はどんどんと手毬の様に人から人へと渡つていく。

そうやつて俺の体育着袋は神社にまで持つていかれる事が常であつた。

あの日はいつもの通り、体育着袋を盗まれた俺は神社に棄てられた体育着を持ち帰ろうとしていた。

だが、その日はいつもの神社では無かつた。いつもは閉まつてゐる本殿。その扉が空いていた。暗い本殿の中に気配があつた。気になつて覗き込んだ先に「人」が居た。
 「オオ、ニンゲンノ仔か。ホントウナラミツカツタナラ殺スカ逃げナケレバナラナイガ
 …」

そう言つて足音を立てずに俺に近づいてきた。その瞬間にその「人」は人型の何かであり、この世のものでは無いと気づいた。

恐怖で竦む身が、その「人」の手に抉り出した目があることに気付いた。声にならぬい声を挙げた。逃げようとしても足が動かない。その「人」はそんな自分をあざ笑うかのように、俺の前へ立つた。

そうして俺は視界を失つた。

会議を室に入った僕は目線が一気に集中放火を受ける。周りの警護も隙が殆どない強者だ。

「掛巣くん、ご苦労。宇田川海将、2等海佐相当、軽空母飛鷹、隼鷹。そして1等海士相当、赤羽業、潮田渚」

こう言つたのは首相手塚勘助である。58歳。テレビを見る限りでも若々しい感じ

がしたが確かに40代に見える。だが、忙しいからか白髪染めがぼけて来ていて、薄墨みたいになつてゐる。

「はつ、お招きいただきまして、恐悦至極存じます」

(思つても居ない事を話すのは大変だろうな……)

この場は提督がお世辞を言うターンである。

「お付きは隼鷹と飛鷹か」

「はつ、2等海佐相当として勤めを果たします」

隼鷹さんはいつもとは全く違う調子で話す。いつもの酒飲みらしい能天気な様子はない。

「鷹森という苗字に名前負けしないようにしてほしい」

鷹森……どこかで聞いたことがあるような。隼鷹さん飛鷹さん二人共の本名だろうか。

「はつ」

飛鷹さんの顔がやや険しくなつた。だが、声は変わつていない。と同時に他の大臣と小さな話し声が聞こえる。だが、距離があるので一部しか聞こえない。

「……まさか、……議員に……が居たとはね」

「しかも双子の女性に…………とか」

その中途半端に聞こえる声が自分の集中力を削いでいく。飛鷹さんと隼鷹さんは政治家達にとつて衝撃的な人物であつたのだ。

「あの、」

そんな浮ついた雰囲気を飛鷹さんは一瞥して静かに言葉を出した。

「別に今は鷹森彩飛（たかもりあやひ）も鷹森隼子（たかもりじゅんこ）という名は今必要無いです。私たちは改装軽空母、飛鷹、隼鷹としてここに來たのです」

まるで北海道の雪原で出したような澄んだ声であつた。今は8月だ。外も蝉が鳴くのを辞めるほどの酷暑である。だが、飛鷹さんの声はその暑さに打ち克つような声であつた。

「私たちは自分の意思で戦う事を決めたのです。だから私たちは今ここにいる全ての人から賛成を得る戦いに來たのです。私たちはそれだけを求めるます」

まだ艦娘と3週間くらいしか話し合つていない。：彼女達は装備される艦装によつて勇敢さを引き出されているという。だが僕はこの山麓の澄んだ空気のような言葉を誰かによつて作られている物とは思いたくなかった。この二人の人としての力であると。

「…よく分かつた」

手塚総理は口を開いた。

「ただ、日本は戦いたい意思では越えられない憲法というものがあるのだ。たいていの法律は今まで一つ一つ対処、時には強引に突破していったが、憲法だけは国民投票があり、不確定性が高く、ここに至るまで出来なかつた。だが、クアラルンプールやシンガポールの状況を見る限り余談は許さない。超法規的措置を行う覚悟、憲法をなるべく早く改正する必要を迫られている」

手塚総理は強く言い切つた。覚悟した顔であつた。

「艦娘になる事でどちらかというと戦いを好みやすくなる、がそこに至るまではきちんとした感情がある。宇田川海将、潮田一士と赤羽一士、その激情を汲んで戦いを補佐して欲しい。私としてはあなた達を艦娘の様に戦闘意欲を見せるような真似はしたくない。だが、ここに来て、自衛官の殉職は増えているのも事実だ」

手塚総理が人並みの人間で無い証明が目の前に存在する。書かれていた原稿の分ではない、下心が無い真摯な言葉が紡ぎ出された。…ここから分かる事は彼が僕たちを徵兵しようとした人間ではない事だ。だが、この内閣の人員が居る、当然この中に居るのである。だから僕らはそういった事を表にしてはいけない。探つてている事を気取られたら、逃げられるか利用しに来るであろう。

「ハイ、その事は常々伺つております。先々からのこの懸案に対して作られた舞台であると」

提督は姿勢を全く崩さない。結構くだける事が多い人ではあるが、立派な自衛官はこういった表の舞台を外さない。

「分かった。それならば拝謁させなければいけない人物がいらっしゃる」

總理大臣が謙譲語じやなくて尊敬語であることは誰に会わせるかというのが分かつた。

(今上……)

「色々と立て込み過ぎて拝謁の機会を今の今まで逃していた。英雄という言葉を海将は嫌うが、今上も海将のことを優れた軍略家として評価している。だから、おそれ多いと畏まる必要はない」

「…わかりました」

提督の声が少し震えている。落ち着き払った対応を意識している提督の声が緊張に包まれる、それは両隣に居る二人も提督程では無いが緊張の雰囲気が包む。

「なるほどな」

と唐突に總理はなにか納得した顔でつぶやいた。だが、何に得心行つたのかは口にせず、切り替わるように、提督達を促す。

「宇田川海将と伊代野海将補は私と宮内庁長官である赤松長官とそこに居る海上自衛隊の園部1等海佐、小河2等海佐と清水2等海佐の3人が付き従う」

ん…？ 飛鷹さんと隼鷹さんじゃないのか？ ここに元から居る海上自衛隊員を最初から選んだ？ ジヤあ…僕たちは…？

「そこ」に居る四人は空いている席に座つて待つていなさい
やつぱりここで待つのか！

自分たちに目線が来ていることが分かる。

（座らせようとするのも罠だな…）

あくまで「兵士」である事を観察させるためか…。 前に居る隼鷹さんや飛鷹さんは気持ちを切らしていない。

どう仕掛けてくるのか。

「ふうむ…あくまで座られないのですな」

夏田仁三郎（なつた・にさぶろう） 経済産業大臣が口を開く。 大淀さんの母方の祖父である。

御年80の目に植踏みしている目。 内閣最年長であり、 内外の利害調整に長けている「妖怪」である。 派閥には入つておらず、 中立の立場にいる大臣だ。

「まあそうでしよう。 私達は駆けられていない野獸ではないので」

飛鷹さんが答える。 夏田さんは片眉すら動かさない。

「深海棲艦はどういうものか、 私達にも伝わっています。 機械に宿る靈魂ならば倒して

もまた他の取り憑くものを見つけたらまた復活してしまうのでは?」

大臣の中で唯一の女性である環境省の江原江奈（えはら・えな）が質問してきた。議員当選当時は世界で一番美しい国會議員であると取り沙汰されたアイドル議員かと思われていたが、環境大臣を選ばれる程に力を蓄えてきた。

「直接観測出来ていないので仮説止まりですが、深海棲艦は自己繁殖が出来ず、死んだ個体の蘇生も出来ないとの事。深海棲艦を生み出せるのはハワイ・オアフ島に居る中枢棲姫だけであり、人間と意思疎通出来るいわゆるネーム級の深海棲艦は彼女を厳重に守備しています。人間から改造された深海棲艦は彼女ののみであり、地中深く潜っていると思われます」

隼鷹さんが淀みなく言葉をつむぐ。

「アメリカが核弾頭を使うべきか真剣に話し合いましたが、効かなかつた時に残る放射能を浴びながら中枢棲姫を壊さないといけない、という点で見送りになつたのは覚えています」

環境省らしく環境面の事に対してきちんと理解している。

「まあそのうなので、4年前に使われた衛星兵器をどうにか転用することも考えられています。ただ、生きて人格がある機械という点とそれを結びつけるのが靈というオカルトの思想ですから、私達の艦装以外に強力で彼らに打撃を与える攻撃手段があるのか

ははつきり分かつていません」

隼鷹さんは現状の確実である情報を並べる。それはもう何度も咀嚼された情報であつた。

「他にも歴史のある銘刀を使つてダメージを与えたという例が少数ながら存在します。ただその説はどこからが当てはまるのかが全く不明であるため、検証は全く進んでいません」

これも聞いた話である。提督はこれで3回深海棲艦を殺したというが、それと引き換えに刀は粉々になつてしまつたという。

「良い刀が脅威だとしても、艦娘の銃弾の方がよっぽど費用対効果がある話だ。検証するのですら再現性が無い」

藤本六郎（ふじもと・ろくろう）副総理兼厚生労働省がうんざりという言葉が似合つた言い方である。

「深海棲艦はオカルトなフォーマットを持つとは言え、絵に見えなき過ぎる。異世界から来た物なのに、異世界の理はこの世界では毒性が強すぎるのが、正直頭が痛い」手塚総理の懐刀はやれやれみたいな雰囲気だった。異世界の理…？

「藤本副総理、それは…」

真っ先に外務大臣の福籠溜（ふくろう・たまる）が制止した。派閥は別だつたが、梶

のマイナスイメージを打ち消すほどの人格者と聞いている。だが、外務大臣を務めている人間がそんな人格者だけでは通らないであろう。小柄でどこかにこう言つたうだつの上がらないおじさんが居るみたいな外見から、強い声が出る。

「あつ、……今の聞かなかつたことにしてくれ」

自分の不覚に気づいている声であつた。異世界。少し前にタイムマシンは既に完成しているが、誰もタイムマシンを使つたことによる世界の変動をはつきりとは理解できず、ほんの一部が理解しているだけだと。

それを克服した人間が居た。そういう事実は政府によつて伏されている。それだけでも重要な発言である。異世界の人間は…。もしかして…。

場内は騒然としている。僕と同じ様に初めて知つたものもあるだろう。大臣は全員驚いていない。一番怪しいのはこの中な誰かであるだろう。だがここまで全く隙を見せていない。

「カルマ」

カルマに話しかける。同じことを思つていたのかやれやれと同じような事を思つていたらしい。

「もしかしたら予想以上に難しいのかもな、俺たちの仕返し」

僕たちは日本の政治家を舐めていたようだ。こういう形であれば、狼はすぐに吊るせ

るものだと思っていた。ところがその期待は淡く消えた。

(今日本の日本という混迷に覚悟が出来てゐるつて事か…)

震災の時と違う党ではあるけど、そこまで政治家つて党によつて違うものなのかな?

「…」

隼鷹さんも飛鷹さんも考え方でいる。何故かは分かる。わざわざ余人が居る場所でその事を言つた理由である。わざとらしくこぼしたのか?それとも本当に口を滑らせたのか?前者だとしたら、怪しいにも程がある。飛鷹さんはこう返した。

「どうもE組の二人に伏せている情報を敢えて言つたようですね。何か意図はあるのですか」

副総理に対してかなり攻めの姿勢である。

「私のミスだ。申し訳ない」

副総理が謝罪している。だが隼鷹と飛鷹さんの隙は厳しくなつたままだ

「ここは記者も居ないですしねえ。ここで漏らしても箱口令が出来る。この二人を除いて」

僕らを指さした。一瞬ドキッとしたが、何を言いたいのかが分かつてきたので、そのまま黙つておく。

「まあ異世界から來た人間を疑いたい気持ちは分かります。もしかしたらこの世界に対

して恨みを募らせている可能性がある。その為のこの二人という事ですね。並々ならぬ暗殺の才能をE組で開花させ、そして片方は官僚という自分たちの世界に挑んでくる危険分子に」

隼鷹さんが言つた。自分の自意識があまりに低かつたことに気付く。僕の才能は僕が思つていてる以上に畏れられているのだ。それは提督すら騙して直接話しかけたかつたのである。

(もしかしたら提督が天皇陛下と会わせたのもこの時の為つて訳……?)

緊迫感が胸を震わせていく。誰が言つたか伏魔殿。提督が帰つてくるまでこれに耐えなければいけないのか。

「……それで俺たちの事を呼び出したわけか」

カルマは呆れるように、だが確実に怒りを込めた声色だ。

「カルマ！」

制止する声が出た。もしかしたら政治家を殴るかもしない。飛鷹さんも隼鷹さんも反射的に警戒する。

「……」

最初は怒りの顔だつた顔をしていたが、段々と怒気が無くなつて行つた。

「やめた」

呆気にとられる部屋の中。

「俺だって守りたい人が居るんだ。誰か一人殴つたら乱闘になるだろう。そしたらそこの上司が平然で居るわけじやないだろ？それだつたら犯罪者にされるだろうしね。だけど俺はそうしてはいけない。自分にはやり遂げないといけないものがあり、そんな流れには乗らないよ」

カルマ…。感情を抑えている。守りたい人が居る、か…。覚悟を決めたのであろうか。奥田さんと共に歩むことを。と思つていた所にガシャンと扉を開く音が聞こえた。

「大丈夫か！」

血相を変えた提督の大きな声が響く。天皇陛下の拝謁から戻つたようだ。総理大臣も伊代野さんや付き添いの自衛隊員の皆さんも同じく戻つてきた。

「四人共、聞かれたくない質問を聞かれたか？」

提督が聞いてきた。

「大丈夫です。そんなヤワじやないですよ。飛鷹型もこの二人も」

隼鷹さんはそう返した。

「…そ…う…か」

そう言つて提督は僕らを見回した。

「…ふう。流石に本当に会わなければいけない行事であつた事を利用してきたか」

提督は一緒に付いてきた総理と副総理を刺すような目で見て いる。

「私は正直怒っています。きちんと私や伊代野の間を通さずに、直接E組や艦娘に尋問をするという行為に。私達に聞かれたくない事を聞きたいなら、その準備をします。問題は私が敬慕する陛下との出会いを利用したことです。それは陛下への不敬と受け取つても問題無いとも取れるのですが、そこをどうお考えを?」

宮内庁の赤松長官が早く家に帰りたい子供の様な顔をしている。自分は反対したみたいな顔をしている。

「…陛下に拝謁したかつたら、鎮守府の長という職を退いてから言つてもらおうか」

副総理は吐き捨てるように言つた。

「…何だと!」

提督が初めて僕らの前で怒気を顕わにした。突き刺すような空気の痺れが肌に感じる。

「提督、怒らなくて良いです。後は私が」

そう提督の肩に飛鷹さんが前に出る。

「死んだ私達の父親の影を追つているみたいだけど、私達はそんな過去なんか越えてみせる。だから私達は艦娘になつたのです」

飛鷹さんは言い切つた。

「…」

帰れるようになつたのは夜遅くなつていた。提督は不機嫌さを隠さずに助手席から窓の外を眺めていた。

「おーい、提督そんな怒るなよ。私達が気を引いたおかげで提督やE組の二人の弾除けになつたしよお～」

隼鷹さんが提督に話しかける。

「…いや怒つていない。が、それでも艦娘の過去をほじくり返す事を望んだ内閣はあまりにも幼稚過ぎて嫌な気分になつただけだ」

提督はそう言ひ顔をこつちに向ける。

夏田仁三郎の孫の大淀さん。

野党である民主啓蒙党の当主である後藤 明子の姪にあたる三隈さん。

市長の子である瑞穂さん、孫である最上さん。

親戚が政治家である艦娘は数知れず。

…そして25年前に贈賄疑惑をかけられ、議員の職を追われながらも冤罪を主張し続けるも非業の死で生涯を閉じた国会議員飛田 隼人（とびた はやと）の落とし胤であ

る飛鷹さんと隼鷹さん。

政治家、企業トップに縁が続く艦娘は多い。そこから生まれた勉強を好む人間であることを「艦に選ばれている」という。その中で兵庫一の不良だったという摩耶さんは「重巡洋艦摩耶の好みが変わっていた」と妹の鳥海さんが冗談交じりに話していた。

：副総理の言葉は異世界の存在していること、深海棲艦が異世界から訪れた事を断言したものである。この事実を提督や艦娘が喋らなかつた意味がまだ分からぬ。（いや、まあ世の中に出せる情報じやないとは言え…）

日本人、そこまで口が堅くない。こういつた全世界の敵が現れて、ここまで目立つた内輪もめが起きていいだけで奇跡なのである。恐らく異世界というものの存在があつてしまえば悪い方向に向かう人達が確実に存在するのである。では誰が異世界の存在が分かつたのだろうか。

（そういえば、提督の過去を知ればE組を解体すると提督は言つていたなあ）

〔提督〕

カルマが提督に話しかける。僕と同じ事を考えていたのか。

〔提督〕

提督はこちらを一瞥せずに返事をした。

〔提督〕

提督は異世界から来た人物でしょ」

……やはり。世界秩序という言葉はこういう事であつたのだろう。

「まあ分かるわな」

(さつきの時と同じくらい場が冷えている)

認めた。

(なるほど：副総理が提督を邪険にしていた理由が分かつてきたり)

異世界からの来訪者、それを信頼する事に対しての危惧だ。異世界への記憶を持つ者が何人居るかも分からぬ、そして深海棲艦は異世界からの生物。提督が提督になつた事も更に疑念を持たせたのでは？それを勝利で黙らせ続けたのが提督の凄いところである。

「それでこれからどうするの？副総理がああなつたのは初めてで、提督を疑つているんでしょ。多分アイツどこまでも提督達を追い詰めてきますよ」

確かに。提督は、公安部の話を考えていてもあからさまな反抗的な態度を避けていた気がする。逆に言うと今回の事件は副総理の懸念を証明させる形にさせてしまった。
「あつ、防衛大臣は提督をスタンダードアロンさせないと」

あいつらをスタンダードアロン（孤立）させたくないってそういう事か。

「掛巣さんそんな事言つていたのか。あのには大きな借りがあるから、そういう事言わせたく無かつた」

提督の悔悟が聞こえて来る。

「信悟」

運転をしている伊代野海将補が声を出した。

「ああすまん。色々とお前にも迷惑をかける」

提督は伊代野海将補の方にも頭を下げた。

「言いたいことはそういう事じやないのに…。あつそうだ信悟、陛下がお褒めになつて
いたわよ」

提督と伊代野海将補、普段の二人はこういうやり取りなのか…。まあ同じ釜の飯を
食つていた同士だしな。

「朕の前でも自分の大事な物を持つているのですね、と」

「そうか。嬉しいな」

「言いつつ、かなり顔が緩んでいる。提督に天皇陛下には敬慕の念を抱いていること
が分かつたからだ。

僕は天皇陛下について何も知らない。殺せんせーは「日本人の古代からの理想を帶び
た君主」と称した。「敗戦を自分の責任と知り、マツカーサーの前で命を賭ける。もちろん
彼の責任もある。だが天皇を担ぎ上げて起こった明治維新において、藩同士は派閥争
いで相互不信に陥つた。それはだが、その前江戸幕府の命運は完全に尽きている事も確

かであり、その中で薩長の時代を変える力を持つ天皇は揺るぎないものであつた」と。
 (せんせーは悪とも正義とも言わなかつた。ただ君主の力をもつて、新しい時代の舵取りを願つた人間たちの頭であつたのは確かなのである)

「異世界でも天皇家は存在してたの?」

カルマが話しかけた。さつきのように提督が破顔したのは始めてである。普段の提督は気安いが笑う時でも口元で笑う程度だ。

「ノーコメントだ。それよりはつきり言うが、今日の事はしばらく黙つていろ」

「はーい」

妥当である。提督の言葉で知つたわけではなく、相手が意図的に漏らすことをここまで早くされた事に対しても全く対策が出来てなかつた上に、僕ら二人だけを鎮守府から抹殺または放逐するリスクの方が高いことであろう。

「…提督、結局副首相がうちに対し色々と仕掛けている相手なんですか?」

飛鷹さんが提督に話しかけている。鎮守府に明確に人間側の敵が居ることへの証明となる言葉であつた。

「違うと思うわ」

運転している伊代野海将補が答えた。

「…何故?」

即答が出来ると思つていなかつたのか飛鷹さんは聞き返す。

「トンネル出たところ、行き先の看板の上。3人居るわよ」

伊代野海将補が衝撃的な言葉を言つた。

伊代野海将補、なぜトンネルの先が見えるのであろう。このトンネルの中は上り坂であり、その先にある看板は自分たちには視認出来ていないのである。

「なるほど、今邪魔しているやつは少なくとも政治家の前には立ちたくないわけか」

前方のクラウンが、行き先表示器から3人が武器をもつて降りてくるのを見て、トンネルの出口で急停止した。必然的に自分たちの車も止まつた。止まつた車に提督と飛鷹、隼鷹さんが立ち上がる。

「待つて、信悟！これを」

どこからか出したのか、僕の身長にも負けないような大きな刀であつた。あとで聞いたが野太刀という日本で一番大きな刀であつたらしい。

それを認めた3人は拳銃をこちらに突きつけてきた。

「「止まれ」」

クラウンから出てきた護衛が提督たちの前に立つが、3人の殺意はここからでも感じた。それを見た3人はどこからか出した花火の球に似た塊を投げつけてきた。その瞬

間、提督が一気に前に飛び出していく。
「宇田川海将！」

そう叫んだ瞬間、煙が噴出してトンネルが一帯白く覆われる。

「畜生！跳ね飛ばした方が良かつただろ！」

カルマが毒づく。宇田川提督が前に行つた理由が分かつた。煙でトンネルの中で連携を断たれる前に3人を制圧する気だ。と直感し、提督に向かつた方へ辿つて行つた。

「がつ、ぐわつ」

「早い…」

「ぐふつ」

おそらく提督にやられていく3人の声が聞こえる。早い。相手が攻撃する前に仕留めていく。だが、その可能性はとつくに敵は織り込み済みだ。僕なら提督が出て来た時に狙うスナイパーを用意しているはずだ。

「スナイパーに気をつけてください！」

大きな声でトンネルの向こうに声をかけた。とほぼ同時に声が聞こえる。

「全機発艦！あそこに隠れているスナイパーを攻撃せよ！」

という隼鷹さんと飛鷹さんの声が聞こえ、風が舞つた。煙幕に覆われたトンネルが視界を回復させていく。

隼鷹さんも飛鷹さんもいつの間にか艦娘の服になつていた。手から日本海軍の飛行隊を召喚して出していく。スナイパーに一気に近づいた。スナイパーが持つていたナイフを振るつても、小気味よく回り的を絞らせない。そして爆撃を近距離で行い眼を封じる。その爆撃に為す術もないところをいつの間にか回り込んでいた護衛の人たちが確保した。

「私達だつてちゃんと役に立つのよ?」

飛鷹さんと隼鷹さんはこつちを向きながら笑つた。

「対向車線にも見られている、早く戻ろう!」

カルマが声を出した。車が止まつていてる情報も広まつていてる頃であろう。長居をして良いところでは無い。

「飛鷹、隼鷹! こいつらを拘束したから連れて撤収だ!」

「はい、了解しました!」

提督と隼鷹飛鷹の三人は氣絶している男を片手で持ち上げて後ろに居た護衛に投げつけた。と、同時に走り出す。

「ほれ、渚も早く走りな

「は、はい!」

隼鷹さんに急かされて走り出す。車の前に居た護衛の人は既に撤退を始めている。

その時、気絶している中で一番恰幅のいい男のポケットから硯のような黒く四角い物体が落ちた。

「…」

提督はそれを一瞥し、ほんの僅かながら眉毛を歪ませた。…それを見て、提督はまだ何かを隠している事に気付くのであつた。

今日あつた事を説明し終わつた時、鎮守府の時計はてつべんを回つていた。消灯の時間はどうに過ぎている。

(疲れた)

精神的にかなり疲れている。と同時に奥田さんが気になつた。

(あそこまで感情を表したのは本当に予想外だ)

：友達だと思っていた。俺は女性を愛というより打算で見ていた。性欲というものを知らないわけでは無い。ましてや自分の演じてゐるキャラに跨つてくるような女性はいくらでも居た。：だが確かにそういう愛のない性交で満足したことも無かつた。

誰も居ない渡り廊下。渚も杉野も自分の彼女を気にして先に行つてしまつた。その寂しさが俺を考えの渦に至らせていていた。

異世界人。そんな響きの言葉を聞けるとは。

(そりやそだ。今は変に受け入れているけど、時間が立つたらその重大さに飛び起きた自信がある)

口が滑つてでも言えない。クラスも状況次第で信頼に足るのかという問題に発展する可能性も否定できない。そしてそんな提督が奥田さんの感情を汲むような感情を顕わにしたこと。それは異世界に住んでいたことと関係があるのか。そして政治家に不審を抱かれている現状をどうやって挽回するのか。鎮守府は課題だらけである。

それに今回の襲撃者である。殺せんせーに送り込まれた暗殺者ですらないのでそこまで強くないはずの人間では無いことが分かる。では、何故あのタイミングで送られてきたのか。俺は考えながら一階の自動販売機で麦茶を買つて側のソファーに腰を掛けた。

(煙草が吸いたい)

高校の一時期隠れて吸つていたが、目に見えて運動量が落ちてしまつたので速攻やめた。だがその事実をどうでも良いと思うまで思考を深めてしまつていた。鎮守府も酒呑みは多いが、煙草吸う人は艦娘含めても少ないからか、煙草の自販機はこのあたりに無い。

(仕方ない。何か飲み物買ってから部屋に戻るか)

自販機の前に立ち、ノンカロリーのコーラを買った。…人がこつちに近づいている。

明石さんと夕張さんと、奥田さんだつた。

「妖精さんは基本的には優しいけど、道理に合わないことやドライに扱う事は絶対禁物だからね」

夕張さんが喋つている。

「あつ赤羽くんじやない」

明石さんがコーラを持つ俺に気づいた。

「どうも。奥田さんも楽しそうで何より」

俺は安心しながら奥田さん達を見ている。

「はい、明石さんも夕張さんも色々と教えて下さつて、工業の基礎的な事を教えてもらいました」

昨日はゆっくり寝たのであろう。血色が段違いに良い。

「奥田さん、この二人とかんしゃく玉作ろうぜ。この人たち、そういうの得意そうだし」
いつもの様な下らない話。あの時の様な悪童（ワルガキ）に戻つたつもりで奥田さんに話しかける。

心に残る迷いを振り払おうとしている自分に気付く。奥田さんとの関係をもとに戻そうとしている。

——それは彼女の願いを受け入れない事であつた。

「ありますよ」

と、冗談半分で言つたことが真正面から受け入れてきた。

「あるの!」

俺は驚いた。奥田さんも納得している顔だ。

「確かに、戦場を離脱するための道具も色々と考えていらっしゃいましたね」

奥田さんは口を開く。

「その通り。その中にカルマくんの言うような小さな火薬で驚かせて退却するつて考えたけど、近距離でしか使えないっていう欠点で没になつたみたいです」

なるほど。

「で、何に決まつたの?」

明石さんに聞いてみた。

「煙幕ですね。ただ発生し続ける時間がまだ想定される時間に出来なくて」

煙幕なら確かに投げつけるような事は要らない。風上に逃げていく事である程度は視覚を妨害出来る。

「研究所にその煙幕の改善を提案しなかつたの?」

奥田さんが勤務していた海上女性職員研究所研究所。研究にはお詫び向きの物だが、

研究所のダメなところを散々見せられた後であるから期待はしていない。

「まああそこ、今は艦娘の改二改装に必要なものを私の代わりに探している上に、歯獲した深海棲艦の分析も苦戦しているみたいですし、頼みづらいのは確かなんですよね」

明石さんは頭を搔きながら言つた。なるほど、『理聖』にも人間の血がしつかりと流れている。明石さんは自らを北海道松前町の地で生まれたフツーじやない女の子だつたと自らを振り返つてゐる。

『理聖』の名は彼女の出身大学の教授が付けた名前である。数学から土木工学は愚か數学史まで対応出来る知識の広汎さと適切な意見を言える様をそう呼んだ。専門だけが優秀じやないホンモノの天才。そしてその朗らかで和を重んじる性格も誰かの不出来さを一切責めない在り方も人間らしさがある。

「だから私達がある程度は戦闘に役に立つ兵装の研究を自分たちでしなければいけないのよね」

夕張さんは北海道夕張市に生まれた。彼女も明石さんの同じ道を辿つていた人間である。夕張市は彼女が9歳の時に破綻し、財政再生団体に入つた。満足な行政サービスが出来なくなつた為夕張さんの家族は一族と共に引っ越そうとした。だが当時の夕張さんは何かを感じていたのか、最後まで強固に抵抗したと言われている。引っ越した北海道にある別の土地はまた夕張さんを『理聖』として生み出そうとしていたが、彼女は

大学入学前に艦娘になつた。彼女もまた、理系という誰かが勝手に作り上げたテンプレートに全く当てはまらない人間であった。

「なるほどね。出来ればその火薬の球譲つてほしいな。海の上だと役立たずでも陸の上では違うし」

こういう事を考える時が俺にとつて一番楽しい時間だ。堂々と戦う、という行為も嫌いでは無いが妨害や挑発、口喧嘩。それらを使うことで堂々と戦うより遥かに高い快感である。

杉野が言つていた。日本人の監督が初回でもバントをするのは何か自分が指示したというアリバイの為だと。次に良い出墨が出来るかが分からぬという不安が選手を信じて待つという選択肢を取れないという。そういう理由でバントという手段が目的になつてしまふのである。

(俺のこれもそういった部分は否定できない)

自分が戦いの中でイタズラを使うこと。それが目的になつてないか。

(でも、やつぱり)

「良いですよ。はい」

明石さんはなんともなしに渡して來た。

「え、良いんですか…？」

奥田さんは驚きと戸惑いを隠していない。そこまであつさり渡してしまうとは彼女も思つていなかつたのであろう。俺も予想外であつた。

「あの人気が見込んだ人間を私が信じなくてどうするんですか？」

明石さんは不思議そうな顔をしながら答えた。後ろの夕張さんも同じ表情だつた。

（うおつ、提督に対する信頼度が高いつてものじやねーな。下手すると殺せんせー以上だ）

信頼を飛び抜けて信仰の部類だ。まあ去年から今まで艦娘を発見し、艦娘を集め、深海棲艦を倒していき、戦線を押し上げてフィリピンを奪還したのだ。戦いに勝利し続けることの難しさはレイテ沖での戦闘の敗北で良く知つたであろう。だが提督はそちら立ち直り、フィリピンの完全奪還を成し遂げている。

「信頼度高いなあ。提督だつて判断を間違えることだつてあるんじやないの？」

心の底からの本音である。提督を信仰すればするほど、提督の判断に異論が出なくななる。それは軍人として欠陥を抱える事になる危険性がある。

「別に1か0かじやないわよ。作戦担当だつて今日も鎮守府で頭ずつと抱えていたしね。私達はそうやつて足りない事を補い合うことが出来る。だから私達は提督を信頼するのよ」

夕張さんはそう真剣な眼で語る。強い。二人とも信念がある。提督の指す先を信じ

ている。そして誤つていると感じたら、提督は理解すると思つてゐる。俺等はこの心を自分のどこに秘めているのが理解できる。

「へーすゞい信頼。その心の持ち方懐かしいな」

：鎮守府に提督が居たように僕らにも殺せんせーが居たのである。そして彼は自らの罪を背負つて死んだのだ。

「俺等にも殺せんせーが居た。お互に信じあつた相手の心意気をもつてそれをもらうとするよ」

「後で感想聞かせてね？」

何かの役に立つ、という望みを背負い、その黒色火薬は俺のものになつた。

二人の艦娘は去り、奥田さんと一人きりになり階段を登つてゐる。

「やーっと寝れる。これで明日も遅いと良いんだけどな」

凝り固まつた背中を伸ばす。艦娘の人間としての信念には正直驚くものがあつた。
(まあ軽巡洋艦や駆逐艦もそういう部分はあるんだろうな、表に出さないだけで)

「奥田さん」

「はい」

奥田さんに話しかける。

「明日から部屋同じにしようか」

未来の事は分からぬ。恋人として今は見ることが出来なくても、もしかしたら俺の気持ちが変わるのかもしれない。それこそ提督に鉄の忠誠している艦娘だつて綻びが生まれたり、更に深まつたりするかもしれない。この艦娘にとつては役に立たなかつたものを自分の手で活かす未来。それを彼女と共に見たい。それは確かであつた。

「えつ?! それじゃあ…」

奥田さんは嬉しそうに話しかけてくる。だが俺はさつき考へていたことを告げる。

「まだ恋人にはならないよ。あくまで俺たちはパートナーだ」

奥田さんは混乱しないで、次の言葉を待つてゐる。

「役に立つ研究つてものは簡単には分からぬ、だから…」

そう言つてポケットに入れた火薬の箱を取り出す。そして指の間に一つずつ挟んでいく。

「俺等で深海棲艦をビビらせるやつを考えようぜ！」

「今はこれで良い。恋は理論じやないと提督も言つていた。だからまだ今のままでいよう。決定的な岐路がこれから先に来る時に腹をくくれば良いんだ。」

「…はい！」

二人は同じ方向に一步を踏む。俺等は俺らなりの関係を築いていく。

「しかしカルマくんも身体は大きくなつたのに中身は変わつてないですね」

奥田さんが嬉しそうに話しかけてくる。

「官僚になりたいからつて自分の趣味まで変えるような良い子ちゃんじやないし、俺」
偽らざる自分の心である。

「ふふつ、そういう事を言えるカルマくんを好きになつてよかつたです」

笑いながら話す奥田さんの顔は自分が見た中で最も美しいな顔であった。

(もしかしたら俺もそこまで保たないかもな)

そう思いながら俺は別れを告げ、自分の部屋に向かつた。

暗殺教室×艦これ第五話「マレー半島の戦い」

「なんだ、青葉か。

身体は大丈夫か？率直に言うならきつい。身体が燃えているような感覚だ。だがこれは……。分かつていてるだろ？

……ここまで続いていたものがこの状況に収束するとはな。提督も色々と頑張った。だが、はしごを外されるとは。もう我らは目の上のたんこぶ扱いだな。

そんな顔するな。戦いに勝つことにしか執着してなかつた私を真に人間にしたのはお前たちじやないか。だから最期まで戦い、運命に抗え。そして私に生きている事への良さをまた、教えてくれ。

青葉。この我らの戦いの行く末を未来に伝えてほしい。頼む。

「粗茶でござります」

浅野學峯という人物の実力はずつと聞いていたが、正直面を喰らつている。

「……頂きます」

茶道、特にわび茶の勃興は室町時代の末期に武野紹鷗とその弟子千利休の広めたものである。千利休は秀吉に重宝されたものの、自分にとつて都合の悪い存在となつたのか罪を問われ切腹を命じられる。

だが、利休の子供らは武士に匿われ、大半が武士であった弟子の利休七哲は罪に問われず、様々な流派に分かれて今の時代に茶の湯を伝えている。

：俺は綾や信悟みたいな教養が無い。最近浅野學峯が茶道にハマつてているという噂を聞いていた為、少しは練習したが全くの門外漢のため、この接し方で合つているのか。それすらわからない。

「…で、私にどういったご要件で」

不覚にも要件を忘れていた。この浅野學峯、かつてはE組が在籍していた柄ヶ丘学園の理事長であり、殺せんせーが先生になることを許可した人物であり、殺せんせーをE組の教師以外では良く知っている者である。

「E組が誰の手によつて徵兵扱いをされたのかを知りたい」

单刀直入に聞く。

「それ有何故私に」

聞く、とまで言わなかつた。外面用の顔を持つてゐるのは情報で知つていたが、その顔では無く、疑問を呈した様な顔であつた。

「大きな理由が一つあります」

俺は深呼吸し、言葉を絞り出す。

「今年の春、E組の副担任であつた鳥間惟臣陸将と鳥間イリーナの両者がマレーシアのクアラルンプールを内偵していました。ですが、イリーナはそのまま失踪、陸将も利敵行為の疑いとして極秘に拘束を受けていること。私はこの事をつい先日に知つたことです」

マレーシアはイスラム教国である。コーランの強さで激しい抵抗すると思つたが、非イスラム教の教徒の力もあり、その宗教はイスラム教を上回つたのである。教祖は今も存続している国家や国連からの干渉を拒否し、深海棲艦には港使わせているという消極的ながら深海棲艦を支持する陣営に回つていた。

「…」

浅野學峯は微動だにしない。考えていた範疇の言葉だつたようだ。

「…鳥間陸将が嫌疑不十分で今日日本に戻された事をご存知ですか？」

浅野學峯は口を開く。既知の言葉ではあつたが、民間に既に漏れていることに俺は驚いた。

(狐め)

かつては眞面目で優秀な優しい人間だったが、教え子の死に絶望して力を信奉するよ

うになつたという話を聞いていた。その中で格闘技をわずか数日でマスターしたという。立ち振舞いに全く隙がない。

「…それを先に言われるとは」

悔しいが偽ざる本音である。：おそらく、俺はこの浅野學峯という人間を超えることが出来ない。何をしやべっても隠すことや、誤魔化すことは不可能だ。自分でも口数の多さで聞きたいことを聞き出すことが出来、威圧する人間を黙らせるることは出来る。だが間違いなく彼は自分以上にそれが出来る。

「分かりました」

學峯は口を開いた。自分の心の中を覗かれたようだつた。

「あなた達、意外と疎まれてているのですね」

図星である。

「だから、表向きは私がE組に対して慈悲深く見せるように思わせ、様々な利用価値を提案するように見せかける、そういう事ですね」

學峯は顔色一つ変えずに言う。

「…はい。その通りです。確実な可能性は無いながらも、大臣の後ろに居て献策している人間である可能性が一番高いかと」

私はそう言い切つた。

「…だが、それを調べるには政治に携わっていない門外漢で無いと禍根を産みかねない。だからこそ私である必要がある。あなたの婚約者の家族だとすぐに気付かれてしまう。だからあなたたちとは繋がりがあるが、すぐには分からぬ繋がり。時間稼ぎすれば逃げられるような有能な人間を選んだ」

読みが深い。正直表面上は俺等を支持している派閥に居て支持しているフリをして、頭の中では俺達を嫌つてゐる人間の可能性は充分有り得る。そのような場合に対しても俺たちは全く対策をしていない、いや、出来なかつた。

「すべてその通りです。…受けてくれますか？」

そこまで頭が回る人間だから、話は早い。直球勝負するしかない。

「良いですよ」

良かつた。これ以上の人材は中々居ない。こちら側に付いて来る事を心底安心した。横車ばっかり押していたのをこうやつてリカバリーしないとな…。

「ですが、一つ条件があります」

…?

「何の条件でしようか」

「それは…」

お盆が終わつた。僕たちは彼女らの学びをサポートしてから一ヶ月が経つていた。
鎮守府は迫る大規模な奪還作戦を意識してかどんどんとブリーティングや戦術が増えていつている。弱音を吐く娘も居る中、僕たちの運命を大きく変えていく風が近づいてくることをまだ知らずに居た。

(…)

机に向かつてひたすら問題を解いていく。陽炎型駆逐艦九番艦の天津風は眞面目に勉強を怠らず、メンバーの中で最も解くスピードが早い。

(…)

だが俺は彼女がいつも着ている服に対して邪念を払われずに居た。

銀色のロングヘア、赤と白の吹き流しにどこの学校のものでもない黒いセーラー服。スカートは無く、セーラー服が身体を包んでいるが、問題は黒いセーラー服が透けていて、その上で肌着も着てないので偶に下着が見えるのである。

(こうして見ると眞面目で勉強熱心な娘なんだけどなあ)

どうしても異質、いや異常な服装である。だが、艦娘の痴女とも呼べる衣装事情はそれに留まらない。

「ねえー！ 勉強終わつたよ！だからかけっこをしようよ、かけっこー！」

そう言つてE組のスプリンターである木村正義（ジャステイス）を困らせている駆逐

艦の艦娘は島風である。

「記述式の問題が全然書けてないよ。かけっこはそれからな」

島風は天津風さんより異常な服装である。セーラー服を改造したような服装だが上は丈が足りない格好でお腹が丸出しであり、女性器を隠すものが腰で支えている黒い紐状の見える下着である。その上で紐状の下着が見えるほどの短いスカート。

(そんな露出狂みたいな格好なのに中身は痴女どころかスピード狂で色気もへつたくれも無いという)

かつて大日本帝国海軍最速の駆逐艦の艦娘であつたのが色濃く影響された性格なのか、E組最速の木村と毎日走り比べたがる。艦娘だから基本的に島風の方が速いので、木村は負ける格好だ。心なしか木村の顔はやつれている。

「ほら、島風。木村さんを困らせるることはしないの！」

天津風さんは注意する。

「はーい」

そう言われて元の椅子に戻った島風。

(真面目に勉強に対しきちんと取り組めば、優秀な娘なんだけどな)

その証拠に選択問題は一つも間違ひがない。速さ以外に対してはかなり飽きっぽい性格であるだけで勉強が出来ない訳でもない。

「杉野さん？」

思索に耽りすぎていた。目線を下げるとき身長の清霜さんが目線の下に立っていた。俺は顔を下げる、なるべく圧迫にならないように話を聞く。清霜さんの目は俺が見ているだけでも、元気が無い顔をしている。

（どうするべきか）

「どうしたの？」

「この問題が良く分からなくて…」

彼女自身も普通に話しているのに今にも泣き出しそうだ。人數の都合で俺に担当が回つたが、正直渚や有希子の方が彼女にとつて良さそうだ。提督や教育長の香取さんに言つたほうが良さそうだ。

「清霜さん」

夕雲さんがいつの間にか横に居た。

「ね、姉様！」

と言つて彼女の胸に飛び込んだ。

「よしよし！怖かつたわね」

（やつぱり怖がられていたー！）

「杉野さん、申し訳ございません」

頭を下げてお詫びをする夕雲さん。

「いや、大丈夫ですよ」

夕雲型一番艦の夕雲さんと十九番艦清霜さんという、一番上と一番下の組み合わせである。ただほぼ近い歳で構成されているらしく、長女らしく振る舞いながら年齢差は大きくても2歳しか変わらないらしい。だが夕雲さんにはどこから手に入れたのかが分からぬのが大人の色気と言つていいほどの貫禄があった。

(今みたいに姉妹の行動、感情を瞬時に把握している。駆逐艦のネームシップはこれくらい出来るのか)

「清霜さんはまだちよつと大きな男性は苦手みたい」

夕雲さんは優しげな表情で清霜さんの頭を撫でる。

「…やっぱり渚が向いているのかなあ」

半分自己分析、半分弱音であつた。

「今日の勉強時間が終わつたら、提督と話し合いましょう」

夕雲さんは提案した。本当にしつかりした女の子である。

(有希子とは違うけど、一本芯が通つてゐる)

その人間性は、艦娘になつてから得たものなのか、元々の人間性の賜物なのか。

「わかった」

清霜 戸籍名霜田 清子

故父親はプロレスラー。母親は夫の競技中の死に精神の状態を著しく崩し、一人つ子であつた彼女は母方の祖母に預けられた。祖母は清子を可愛がりながら生活の術を教えていた。だが、元々は祖母の家はプロレス団体を支援する家であつた為、清子はプロレスラーが出入りする事で父親の死を思い出し、トラウマを形成してしまう。それによつて重度の男性恐怖症、特に高身長の男に顕著に見られるようになった。

以上の理由を以て鎮守府生活を送るために必要なのは男性恐怖症を克服すること、すなわち精神科医の治療が必要となる。

永島先生の簡易な所見を見て、静かにため息をついた。小さな頃はやや小さめだった身長が一気に伸び、195cmに到達した時はあいつと見合う自分になれたと嬉しかった記憶がある。だが、今その身長は清霜を呪わせている物であった。

「大淀」

側に居た艦娘に声をかける。長身の男性恐怖症というなら艦娘の中で信頼している人間を選んで自分の意思を伝える他ない。

そして近日起きた戦いには参戦することが出来ない事を。

「失礼します」

夕雲さんは凄く清い声を出して提督の執務室の扉を開いた。ここは艦娘と俺等が艦娘を教えること以外に作業する部屋も兼務している。

「杉野！」

今日は事務作業が主であつた渚と奥には磯貝の二人が事務作業をしていた。ふたりとも山のような資料をパソコンに入れている。艦娘は全員耐水や耐圧力であるタブレットを所持している。それはこうやつて情報入力を手で書き込むことが大半だ。通信を傍受されることへの警戒心が防衛省は未だに高い。入力が終わつた資料が山積みになつてている。

（ふたりとも手慣れてきているな）

野球選手になる自分にパソコン操作なんか必要ないと思つていたが、こういうところが必要となるとは思つていなかつた。

「渚も板についてきたなそのタイピング」

「あはは…自分でここまで早くなるとは思わなかつたよ」
いつも通りのやりとりである。

「夕雲さん、清霜さん、んにちは」

磯貝さんは夕雲さんに話しかける。

同じ様に磯貝は夕雲さんに話しかけていく。

「はい、磯貝さんこんにちは」

あつ。磯貝は俺ほどじゃないが大柄だ。

その証拠に並んだ渚が小さく：あれ、

「渚、身長高くなつてない？」

俺は友達の変化に気づいた。

「うん、提督から成長ホルモンを投与しろって言われて。低くて得するのは競馬とか競艇の選手だけだとも言われたよ」

「で、今少し身長伸びたわけか。そういうや先生始めてから顔合わせることが無かつたな」暗殺者、それは確固たるスキルではあるが、提督はそれに変化を加えたいように見える。

「こういう身長の伸ばし方があるんだなつて、もつと前にやつておけば良かつたよ」

「大きくなつて舐められることが無くなれば良いな」

「…つて！そこに大きな男性が苦手な娘がいるじやん！」

…あつ。しまつた。なんでここに来たのか忘れていた。後ろを見ると呆れた顔をした磯貝と色んな感情を我慢している夕雲さんが引きつった笑顔の表情になつていた。
「す…すいません忘れていました」

夕雲さんはその言葉を聞いて怒りの色が消えていった。

「…謝れる人間は好きよ。それが出来ない人間がどれだけ居ることか」

夕雲さんはそう良い、清霜さんを連れて、只今無人である提督の机の前に立つ。

「提督…？ いらつしやいましたら、出てきてくださいるー？」

「ガチャヤ」

扉を開けて出てきたのは大和さんと大淀さんだつた。

「お待たせしました。提督は本部からの特命の連絡が来たので席を外しています」

(…嘘だな)

提督は自分で清霜さんのトラウマを刺激するのを避けたのである。

(まあ、動搖して話を聞いてないと良くないし、精神的に疲労してしまつたら元も子もないからな)

艦娘の長である大和さん。女性でも見たことが無いレベルの長身は見るものを圧倒させる。身長187cmはE組の男子の殆どより大きい。

(こういう場合つて清霜さんはどうなるんだろう…)

清霜さんは嬉しそうな表情で大和さんに近づく。

「大和さんいつも大きいな、戦艦つてみんな大きくて良いなあ」

そう言つて清霜は大和さんにしがみついて登ろうとする。身長が高いだけあって、普通の人間では味わえない高さを味わうことが出来る。そう言えば、時津風さんも提督の

頭にしがみつるのが好きだっけ。

「ほら清霜さん。話し合いをするので、しがみつかないで隣の会議室に行きますよ」

大和さんが清霜さんを手慣れたように身体から剥がし、床に立たせる。

「あーん」

名残惜しそうに清霜さんはその場にへたり込む。

「ほら、艦娘であるならちゃんと立つて椅子に座るのよ」

夕雲さんがそう言つて立ち上がるのを促した。貫禄が最早母親である。そう言つてテーブルに座つていく俺たち6人組。⋮6人組？

「か、茅野居たの?! いつの間に?」

全然気づかなかつた。渚の気配消しを完全にコピーしたかのようだ。

「ふふふ…。きちんと私も渚の技術を練習して実践でしているのよ」

茅野はドヤ顔で決めている。心なしかつやつやなのは…。

「渚、あいつお前に抱かれている間になんか盗まれているぞ」

小声で渚に言う。

「僕も色々と教えてもらつて いるから…」

といつもの照れながらも、渚は流されている訳では無いことがわかつた。

「…おまえも成長したなあ」

ほんの数ヶ月であるが、渚は温厚なだけでは無くなっていた。

「お話を終わりましたか？始めませてもらいますね」

大和さんが声をかける。

「す、すいません」

「では、始めます」

大淀さんはそういつた言葉を意に介さず、話し始めた。

清霜さんの生育環境、戦闘訓練での成績、学校や鎮守府での様子、トラウマ、そしてマレー半島の奪還計画。

「清霜さん、今のあなたはまだ戦いに従軍するには課題があります。戦いに出るために精神科医の治療を経る事が必要です」

大和さんはそう結論づけた。話を聞いている間、虚ろにも見えた清霜さんの表情が涙顔に変わる。

「うえええん！」

清霜さんがついに泣き出しあつた。そう。教えられたことで一番重要な部分、艦娘はどんなに子供のように居ても戦うという心が差異はあれど本能に根付いているのだ。

「みんなは戦いに行けているじやん！なんで私だけ…」

は好対照である。

「それは、私達だけで戦っているわけでは無いからです」

大和さんは言い切つた。

「まだ、ここ鎮守府の中では提督や研究所の所長、E組の人たちにしか身長の高い男の人たちには遭遇しません。だが作戦となると様々な軍の軍人と正対する時があります、軍人の中にはプロレスラーの様に身体が大きい人は当たり前のよう居ます。その人達の前で我を失つてはならないのです」

大和さんはそう毅然と言つた。当然の帰結であつた。清霜ちゃんは不満ながらも返せる言葉は無いようだ。涙の跡は乾いており、スネたようにそっぽを向いている。

夕雲さんはその顔を愛しい自分の娘を見ていた。そこから大和さんと大淀さんに目をやり、こう話した。

「…いさか厳しいのでは。今度の戦い、恐らく今までの深海棲艦との戦いで最も大規模になると聞きます。一人でも戦える人間が欲しいと思いますが」

大和さんと大淀さんから発する冷徹さを跳ね返すべく夕雲さんが声を出す。

「だからこそ、まだ戦いの練習を教えていたばかりの半人前のままで一回目で沈んでしまってはいけないのです」

完全に正論だ。だが、ここで渚が声を出した。

「僕にいい案があります」

!

「渚、いい案あるのか？」

「ここに来て磯貝が口を開く。

「はい。艦娘を輸送する船、輸送艦おおすみには乗りはしますが戦いは見学するという形になります。僕と茅野が一緒なら対処出来るでしょう」

攻めた提案であつた。さながら社会科見学の如く引率するという。

「ふーむ」

大和さん大淀さんが二人とも唸つてゐる。

「多分やめた方が良いですね」

大和さんが口を開く。

「ダメなのですか？」

渚が聞きかえした。

「私が艦娘として初めて大規模な戦闘に参加したのは、アンカレッジ防衛戦でした」

「はい、その事は聞いたことがあります」

レイテ沖で痛み分けに近い敗北を負った艦娘を深海棲艦は見逃さず、現在日本の経済を支える大動脈と言つていいアラスカ航路への攻撃であつた。

「艦娘の大半、特に大型艦は病み上がりで満足な行動を取れず、苦戦は必至でした。中で採つた行動はまず部隊を都市救援に部隊をギリギリまで部隊を投入しました。そしてわずかな数の私を含む大型艦と輸送艦は囮として深海棲艦に攻撃、完全に深海棲艦に包囲されるまで引き付けました。その後、都市救援に見せかけた部隊を急旋回させて包囲した軍隊を攻撃させて混乱に陥らせて、私達は勝利を掴みました。輸送艦は沈没寸前まで行つた上に、船員も死者も何人か出ています。ここでわかつた通り、安全そうに見える輸送艦でも危険は隣り合わせです。清霜さんは良いでしょうが、E組の皆さんにはこの様な危険な目に合わせる訳にはいけないです」

大和さんはアンカレッジの救出作戦の一連の流れを説明し、輸送艦の危険を説諭してきたが、最後の一言で清霜ちゃんより俺等の心配をしている事となる。

「清霜さんより俺等の方を心配しているのですね」

磯貝は冷静に指摘した。

「：提督とあなた達の担任であつた鳥間先生とは旧知の仲でした」

大淀さんが口を開いた。

「！」

「防衛大学校で教官ですら敵わない強い野球部員が居る、という噂を聞いて鳥間海将は防衛大学校にアポ無しで訪れて提督と一戦し仲良くなつたらしいです」

昔のヤンキー漫画みたいだな…。

「…だから提督にとつてはあなた達も失いたくないのです。烏間海将は今、利敵行為したとされて拘束されているから尚更」とんでもない爆弾が投げられた。

「な…！」

僕らは驚愕の声を出した。

「どういう事ですか?! タイに行っているのでは」

渚と茅野が動搖した言葉で返した。

「…もしかして、イリーナ先生と関連しているのでは?」

磯貝が口を開く。

「その通りだ」

と、大和さんでも大淀さんでも無い声が聞こえてきた。

「提督！」

清霜さん以外が声を出した。

「清霜の話はまた後日決めよう。烏間海将が羽田に到着し、こっちに向かっているとう知らせだ」

これがE組においての初めての戦闘となり、一番大規模な戦役に多大な功績を残す

「マレー半島の戦い」の開幕である。そこでE組は終生の敵との遭遇となるが、まだ彼らには知るよしも無かつた。